913.36-To387
1200500757354

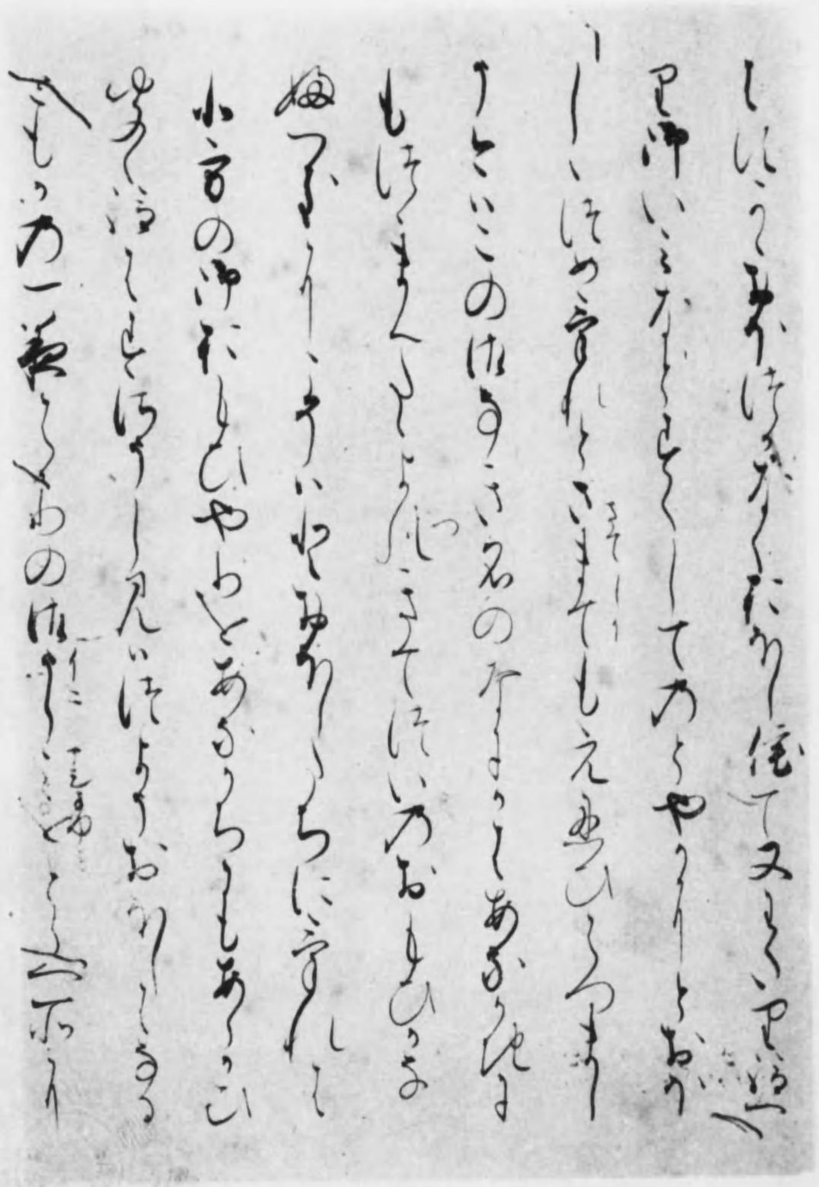
324.11

913.36
T038(1)

德本正俊著

源氏物語講義 卷一

東京
芳文堂藏版



源氏物語古寫本空蟬卷　（著者所藏）

623-128

緒言

源氏物語は國文學中の一大傑作であつて、我が國民たるものは何人と雖も必ず愛讀すべきものである。然るに一般人士にとつて適當なる參考書といふものは少ないやうに思つたので淺學無才をも顧みず。通俗なる註釋書をものしようと思ひ立つたのは數年以前のことであつた。それから稿を起し、思はない困難にあひながら漸く一部の完了をなし、松井博士や鳥野教授から序文を戴いて、本書のため非常なる光榮を添へることになつた。爾來幾星霜を經た今になつて見ると背に汗する不備なところもあるが、書肆の請はるままに世に公にするはこびとなつた。

顧みるに今や、源氏物語の研究は長足なる進歩をなし、池田龜鑑氏の如きその道の大學者があらはれてゐられる。本書も學術的には大に修正すべきやうなところもあるが、元來が一般人士の通俗な參考書として筆を起したのが本書であるからして、源氏物語に關する一通りの智識を求められる一般研究者のためには參考書となり得るかと思ふ。不肖著者もいよ〳〵鈍才に鞭うちて研究をつみ、更に補修改版をなし、讀者のために盡したいといふ誠意だけは忘れないでゐるつもりである。

本書發刊に際し、松井簡治博士、鳥野幸次教授の莫大なる御厚意を感謝すると共に、併せて書肆酒井福次氏の義俠的援助を深謝する次第である。本書が源氏研究の一助ともなり、源氏研究の氣運に資するところあらば、それは右諸士の厚意によるものと信ず。

なほ江湖諸賢士の忠實なる御指教と御援助とを賜はりて、本書を益々完成の域に近づけたいといふ著者の切なる念願であることを述べて緒言となす。

昭和八年四月

徳本正俊

しるす

序

昔から源氏物語ほど註釋の多い書はない、凡そ二三百種もあると思ふ。近年又其の研究が盛になるにつれ、種々の著書が公刊せられ、口釋もあり、摘註もあるが、然しまだ萩原廣道の評釋(未完であるが)のやうな詳釋は出ないやうである。

德本氏は隱れたる源氏研究者である。多年諸種の異本を蒐集し、幾多の註釋書を渉獵し、比較折衷して綿密な註解を施し獨特な批評鑑賞をも加へ、源氏物語講義と題して今般世に公にする事になつた。自分はまだ十分に精讀の暇もないが、氏が苦心研究の結晶であるから、萩原氏の詳釋に次いで讀者を資益する事の多大なる事は信じて疑はないのである。

かかる大部の著を刊行する書肆の義俠を喜び乞はるるままに一言を題するのである。

昭和三年七月

松井簡治

序

五條三位俊成は、「源氏見ざらん歌よみは、無下の事なり」といひ、順德院は、「源氏の物語は、不可說のものなり。更に凡人の所爲にあらず」と仰せられ、一條攝政は、「源氏物語は、我が國の至寶なり」と稱した。げにや源氏は、單に一部の物語として宮廷貴人の間に玩ばれたばかりでなく、古今、伊勢と共に、歌人必讀の書であり、婦人が修養の資であり、進みては儒佛の大綱、本願も、是れに盡きたりとまで推重された。それが德川時代に入つては、一部漢學者の反擊に會ひ、褒貶の論相半したのも暫時、本居翁の物の哀說氏でゝ、人情本と銘打たれてよりは、更に萬人必讀の古典と立てられて、今日

に及んでゐる。殊に其の舞臺が平安時代の昔であり、登場の人物が宮廷の貴紳である爲に、當時の儀式、典禮から、風俗、習俗等に至るまで悉く一部の中に顯れてゐる點は、歴史家にも社會學者にも、此の上ない好參考書とされてゐる所以である。

さるからに、是れが註釋書も論義書も、古今其の數が甚だ多いので、水源、紫明に始まつたものが、河海、花鳥に統一され、一轉して岷江入楚の大作を生み、湖月抄となり、評釋を出してゐる。其の外、契沖阿闍梨や、眞淵、宣長の二翁はいふまでもなく、大小の國學者で、源氏に關する何物かを書いてゐない人は殆どないといふ有樣。殊更明治此の方は、新しい註釋書の外に、口譯物も幾種か出て、讀むにも調べるも、

頗る便利になり來つてゐる。とはいへ、何といつても、內容のむづかしい上に、大部のものであるから、眞に繁簡宜しきを得て、是れはと取り出づべきものは誠に乏しい。それ故、湖月抄が幾度か改版されて、いつまでも重寶がられてゐると云ふ有樣なのは、今日文運の進歩上から見て、甚だ物足らぬ。德本正俊君は、少壯篤學の士である。夙に此の點に留意され源氏註釋の大業を思ひ立ち、夜を以て日に繼ぐといふ熱心と勉强とで、或は諸本を集めて對校し、或は古今の註釋書を讀破し、其の取るべきを採り、補ふべきを補ひ、今や其の第一冊が成つて、世に公にされるに至つたと云ふ。是れは同君の爲にも、一般讀書子の爲にも、大に悅ぶべき事と思ふ。併し前にもいふ如く、素より困難な大事業ではあり、且は同君の

獨力に成つたのであるが爲に、今之を見ては、云ふべき節がないでもないが、それは當然、將來の補修に待つべきものと思ふ。それにつけても、私は德本君の益健康にして、此の業を大成されん事を切望するが爲に、先づ大に本書の門出を祝する意味に於て、此の序文を著したのである。

昭和三年初秋

鳥野幸次

源氏物語講義　卷一　目次

桐壺の巻……一—二二

人物……一
年立……一
梗概……二
桐壺更衣、帝の殊寵を得給ふ……三
公卿を始めとし、唐土の故事楊貴妃の先例などを引きて噂す……六
更衣の母の後見……九
更衣皇子(光る源氏)を生む……九
帝、更衣寵愛したまふ甚しきため、弘徽殿女御は一の皇子の儲位を不安に思ふ……一三
帝は弘徽殿女御の嫉妬をうるさく思召さる……一六
○女官達の嫉妬と惡戯……一七
○帝、更衣に上局を賜ふ……一七
○源氏の君三歳にて袴着の事あり……二〇
○更衣病氣にて里邸に下る……二二
○更衣衰弱のさま……二六
○輦車の宣旨あること……二七
○更衣の逝去……三〇
○愛宕の火葬と三位追贈……三三
○嫉みし女官ども亡き更衣を憶ふ……三五
○帝、更衣を追慕し給ふ……三七
○秋夜靱負の命婦を母北の方に遣はされる……三九

里邸荒廢の狀……四一
命婦帝の仰言を母北の方に傳ふ……四四
母北の方の返り言葉……四六
母北の方のわりなき愚痴……五〇
命婦帝の悲歎のさまを傳へつつ、出立つ……五三
北の方更衣の忘形見の品を奉る……五六
帝長恨歌の繪に更衣を追慕し給ふ……五八
命婦の復命と帝の悲しみ……六一
帝は忘形見を見るについても追慕の念いや
増す……六三
○楊貴妃の故事を思し給ふ……六六
弘徽殿には故らに管絃の遊びを催し給ふ……六七
帝は御食事も進ませ給はず……六九
一の宮の立坊、北の方の逝去……七二
若宮書始めし給ふ……七四
高麗の相人若宮を相して驚く……七七
右大辨の高麗の相人と互に詩を作り交す……七九
若宮に源氏の姓を賜ふ……八〇
典侍先帝の四の宮が故御息所に似通ふ事を
語る……八四
四の宮(藤壺)の入内……八六
帝藤壺に源氏と親むやうに諭し給ふ……八九
光る君とかゞやく日の宮……九一
源氏の元服……九二
帝源氏のみづらを剃ぐことを惜み給ふ……九四
源氏清涼殿の東庭に下りて帝を拜し給ふ……九七
帝は加冠の大臣の娘を源氏の添臥にと仰せらる……九九
下侍で祝ひの宴を催す……一〇〇
帝からの群臣への祿、源氏からの奉物……一〇一
源氏は左大臣邸で葵上と結婚……一〇四
源氏藤壺を慕ひ葵上を疎む……一〇七
左大臣家では心をつくして源氏をもてなす……一〇八
源氏の御曹子は淑景舍と定められる……一〇九
二條院の修理……一〇九

帚木の巻……一一三—二六八

人物……一一三
年立……一一三
梗概……一一四
つつましやかなる戀愛……一一五
しのぶの亂れ……一一六
内裏の物忌に長居したまふ……一一七
頭中將源氏に親む……一一八
雨夜の品定め……一二〇
頭中將源氏の御厨子より艶書を出す……一二〇
頭中將艶書の主を問ふ……一二二
頭中將女性觀を述ぶ……一二四
頭中將中の品に趣を認む……一二七
左馬頭と藤式部丞來る……一二八
左馬頭中の品について論ず……一二九
葎の門にも品よき女あり……一三三
藤式部はわが妹のことかと思ふ……一三四
よき妻を選ぶは國家の人材を選ぶより難し……一三五
見始めた緣にて結ぶ契り……一三八
異つたな性格の女を述ぶ……一三九

ふめきたる女と氣丈な女……一四三
物まめやかなる女をたよりとすべし……一四四
夫の薄情を怨んで輕卒に出家する女……一四六
繋がざる舟の浮きたる例……一五〇
頭中將はわが妹の姫君はこの定めにかなふ……一五一
工匠、畫家の道の論……一五三
書道の論……一五七
左馬頭の經驗談（指喰の女）……一五八
指喰の女の熱心な心づくし……一六〇
左馬頭の女に對する訓言と指喰の騷ぎ……一六二
雪降る夜、朝廷からの歸りに彼女の家に至る……一六五
指喰女の死と彼女のすぐれた技能……一六九
中將は彼女をほめる……一七二
左馬頭の情人木枯の女の雅びた點……一七三
殿上人月夜笛を吹きて木枯の女に通ふ……一七七
左馬頭が體驗より得た訓言……一八二
頭中將の經驗談（夕顔の女）……一八四
中將の本妻からのおどしで夕顔の女悲む……一八七
夕顔の蹈晦を悲む……一九〇
藤式部の經驗談（博士の娘蒜くひの女）……一九三
女の風邪の爲めで蒜を喰つたこと……一九七
僅に知れることを殘りなく語るは惡し……二〇一
物忌果てて源氏葵の上のもとに行く……二〇六
紀伊守の中河の宿に方違したまふ……二〇九
紀伊守の庭の景色……二一三
空蟬どもの話を源氏立聞きなさる……二一四
とばり帳は如何に……二一八
源氏空蟬、小君の不運を語る……二二〇
伊豫介空蟬を愛することを噂す……二二二
空蟬小君、源氏の噂をす……二二四
源氏空蟬のもとに通ふ……二二七
源氏空蟬をつれて東面の座敷に入る……二三〇
源氏いろ〳〵と空蟬を口說く……二三五
翌朝源氏と空蟬との別れの場面……二三八
源氏葵の上の邸に歸られて、馬頭の中の品を思ふ……二四二
源氏紀伊守と小君、空蟬のことを語る……二四四
源氏小君を使として空蟬に文を送る……二四七
小君返書を得ないで源氏のもとに歸る……二五〇
源氏空蟬各々の懊惱……二五四
源氏再び小君を使として中河の宿を訪ふ……二五六

空蟬の巻……二六九—三一一

空蟬姿を隱して女房どもの部屋に逃れる……二五九
小君、源氏と空蟬との間に使す……二六二
源氏小君と共に休む……二六六
人物……二六九
年立……二六九
梗概……二七〇
源氏失望の一夜……二七一
空蟬の悶え、源氏又小君に賴む……二七三
小君のはからひで源氏三たび中河の宿に行く……二七四
源氏簾の間に身を入れて中を窺ふ……二七六
空蟬と軒端の荻と碁を圍む……二七八

碁終つてお互にけちさすさま……二八一
小君出できて源氏に軒端の荻のことを語る……二八四
小君障子口に寝て源氏を内に導く……二八七
空蟬は源氏を避けて軒端の荻のみゐる……二九二
その一夜は源氏軒端の荻と語る……二九六
源氏空蟬の殘した薄衣を取りて出で給ふ……二九九
出で口で老女房に出逢ふ……三〇二
二條邸に歸つてから空蟬への歌を小君に託す……三〇五
小君空蟬に源氏からの歌を渡す……三〇八

夕顔の巻……三一三—四七二

人物……三一三
年立……三一三
梗概……三一四
◎源氏五條の大貳の乳母の病を訪ふ……三一五
◎隣家の垣根の夕顔を召さる……三一七
◎病める乳母との對面……三二二
◎源氏乳母に對して感謝の意を漏し給ふ……三二五
惟光をして隣家揚名介の家の事情を問はす……三二八
源氏隨身をして返歌を夕顔の宿に遣す……三三二
◎六條御息所を訪づれ給ふ……三三五
惟光再び夕顔の情報を源氏に報告す……三三七
伊豫介歸りきて彼地の物語をなす……三四一
伊豫介娘を少將に預け、空蟬を連れ立つこと……三四五
六條御息所は源氏との關係をいろ〳〵と惱む……三四七
御息所の許からの出立つ折、源氏中將に言寄る……三五一
時の女誰しも源氏に接近するを願ふ……三五四
夕顔の宿では頭中將の渡り給ふを騷ぐと惟光夕顔の同輩格に已が身をしてゐるを告ぐ……三五六
惟光夕顔の同輩格に已が身をしてゐるを告ぐ……三五九
惟光の計ひで源氏夕顔のもとに通ふ……三六一
源氏妻をやつして通ふ……三六五
源氏夕顔の妻を隱さんことを憂ふ……三六八
夕顔に就いて頭中將の常夏のことを思ふ……三七〇
八月十五夜夕顔の家で賤男の話や碓の音を源氏聞き給ふ……三七二
野趣ゆたかな朝彼女を他へ連れ行かうとなさる……三七五
夕顔を御車の中に入れ彌勒の世を契る……三七八
源氏夕顔を伴ひて某院に入る……三八一
某院の西の對屋に御座所を作られる……三八四
あたりは寂寥とし鬼氣あり……三八六
惟光果物など奉り、源氏の心のほどををかしと思ふ……三九〇
源氏の夢に鬼女あらはれ、醒ればあたりは燈火消えて悽慘の氣漂ふ……三九三
夕顔は鬼氣におそはれて頓死……三九七
瀧口の若者紙燭をともして來る……四〇二
使者をして惟光及びその兄阿闍梨を召さる……四〇五
右近を抱きて夜の明くるを待つ……四〇八
惟光の來るので源氏は氣もゆるむ……四一一

源氏惟光に夕顔の死骸の處理を問ふ……四二三
惟光死骸を東山に送り、源氏二條院に歸る……四二六
源氏を訪ねた頭中將に乳母の家にての穢を話す……四二八
源氏穢のよしを帝や左大臣に知らす……四三一
この度のことを誰にも知らさないやうに惟光に口止めなさる……四三三
源氏夕顔の死骸を見むとて出で給ふ……四三六
東山の尼寺にて夕顔の死骸に逢ふ……四三九
右近をなだめて尼寺を出でらる……四三三
歸途源氏馬上から落つ……四三五
源氏病臥される及び右近を召さる……四三七
夕顔の穢れ忌みの終ると共に源氏全快……四四〇
源氏夕顔とははかなき契でありしと惟光に語る……四四二
頭中將と夕顔との關係を惟光語る……四四五
源氏惟光に夕顔の遺兒を求めらる……四四八
二條院の秋景を右近眺む……四五〇
源氏右近と夕顔の上を語り合ふ……四五一
空蟬と源氏との消息……四五四
源氏小君を使として軒端の荻と應答……四五七
比叡山法華堂で夕顔の追善あり……四六〇
夕顔の宿では夕顔のことを案ず……四六三
伊豫介空蟬を連れて任地に立つ、源氏から贈物あり……四六七

若紫の巻……四七三—六三〇

人物……四七三
年立……四七七
梗概……四七五
わらわやみの加持に洛北某寺に行く……四七六
巖窟中の聖僧加持し奉る……四七九
源氏後の山に上りて都を眺む……四八一
良清播磨國明石入道のことを語る……四八四
明石入道の娘に對する理想高きを良清語る……四八六
源氏小紫垣の中の尼君の誦經を窺ふ……四八九
女兒紫上雀を逃して泣く……四九二
尼君女兒の頭を撫でてなだめる……四九六
僧都の弟子來りて惟光を呼び傳言を傳ふ……四九九
僧都自ら源氏のもとに來る、源氏もおはしぬ……五〇一
源氏女兒のことを尋ねらる……五〇四
僧都故按察大納言の娘の死を語る……五〇六
娘の子(紫上)の後見たらん事を源氏仰せらる……五〇九
僧都初夜の勤めに歸り、源氏女房どもを尋ぬ……五一〇
源氏歌を以つて紫上をもとめらる……五一三
尼君紫上のまだ幼きさまを申さる……五一六
僧都出で來る、折しも法華讀經の聲聞ゆ……五一八
源氏都へ歸られる事になり、僧都饗應す……五二三
聖、僧都源氏へ獨鈷などの贈物をなす……五二六
左大臣のもとから源氏をお迎へに來る……五三二
君達と花の許での酒宴も終りて源氏歸洛す……五三五
君は直ちに參内なさる、左大臣迎へに來る……五三七
葵上は端然としてつれなきさまなり……五四〇

紫上のことにつき僧都尼君のもとに便あり……五四四
その返書來る、再び惟光を使として遣はす……五四七
藤壺里邸に歸る、王命婦を媒として藤壺に
あふ……五五〇
源氏藤壺のことで惱み給ふ……五五三
藤壺懷胎三月になり給ふ……五五七
源氏夢占をなす……五六〇
源氏故按察大納言の家に尼君を訪ふ……五六三
尼君紫上の將來を源氏に託す……五六六
紫上出できてあどけなき語をなす……五六九
十月の朱雀院行幸の役割を定む……五七二
僧都の許から尼君卒去の報あり……五七六
紫上につきて源氏と少納言との對話……五七八
紫上出できて源氏に近づく……五八二
夜になりて源氏紫上を抱きて御帳に入る……五八五
翌朝紫上の頭髪を撫でながら出で給ふ……五八七
歸途妹が門を叩く、兵部卿紫上を訪ふ……五九〇
兵部卿宮紫上を一兩日中に迎へむとす……五九五
源氏惟光を紫上のもとへ宿直に遣す……五九八
再び惟光紫上もとに使す、女房父君に迎へ
られる準備……六〇一
源氏紫上を迎へる決心されて出かけらる……六〇五
紫上は父兵部卿の迎へかと思ふ……六〇七
源氏紫上を二條院に迎ふ……六一〇
二條院の西の對屋に寢給ふ……六一二
源氏童女四人を迎へて紫上を慰む……六一六
つとめて紫上の歡心を求め給ふ……六一八
紫上の手習……六二一
兵部卿宮の紫上の家に迎へに行く……六二四
紫上をよき愛女と思し召す……六二七

末摘花の巻……六三一―七四六

人物……六三一
年立……六三一
梗概……六三二
源氏さま〳〵の女のことどもを思ふ……六三三
大輔命婦に常陸宮の姫末摘花の事を聞く……六三五
大輔命婦に末摘花の琴を聞かせと仰せらる……六三八
朧月夜に命婦末摘花に琴を彈かす……六四一
命婦琴を中途にて止めさす……六四六
命婦源氏の浮氣を父帝に知らせたく思ふ……六四八
源氏垣根から出でて頭中將に合ふ……六五一
頭中將いさめ奉る……六五三
源氏頭中將同乘で左大臣邸に歸る……六五七
翌朝二人とも末摘花に文を送る……六六〇
互に彼女を挑む……六六三
命婦末摘花の人となりを源氏に傳ふ……六六五
末摘花の返書なきを命婦に責め給ふ……六六七
末摘花に逢はせと命婦を責め給ふ……六六九
命婦さるべき折に源氏を逢はせむと思ふ……六七二
八月廿餘日源氏末摘花のもとに行く……六七六
命婦廂の所に源氏を置く……六七七
正身は何の心げさうもせず……六八〇
末摘花の無言を怨む……六八二
末摘花の部屋に入る……六八七
二條院から頭中將と二人で參內……六八九

後朝の文遅る……六九二
左大臣邸では朱雀院行幸の舞樂の練習……六九五
命婦源氏の薄情を怨む……六九八
打解けたる宵居のほどに末摘花を訪ふ……七〇一
質素な部屋の有様……七〇三
その夜は雪降り、風荒れて物凄し……七〇五
翌朝共に庭の雪景色を眺む……七〇八
奇怪なる末摘花の容姿……七一〇
末摘花の衣裳……七一二
打解けぬ彼女をうらめしげにして出づ……七一四
故常陸宮の心中を察し給ふ……七一七
彼女に同情しまめやかに音づれ給ふ……七一九
彼女に絹綾など送り給ふ……七二二
命婦彼女の消息を源氏に奉る……七二五
消息文中の歌を珍しがり給ふ……七二六
命婦姫から奉つた衣服を恥づ……七二九
源氏たたらめの花の色ごと三笠云々と歌ふ……七三三
七日白馬節會後末摘花を訪づれ給ふ……七三六
翌朝今年だに聲すこし聞せ給へといふ……七三八
紫上と女を書きて戯れ給ふ……七四一
鼻を赤めて遊び給ふ……七四三

源氏物語講義 卷一目次 終

人物

桐壺の帝 物語中單に帝とあるは桐壺の帝をいふ。
桐壺の更衣 大納言の女で、桐壺帝の更衣となり、源氏の君の生母にあたる。
大納言 按察大納言と稱せられ、桐壺更衣の父である。
源氏の君 桐壺帝の第二皇子で、御母は桐壺の更衣である。
右大臣 朱雀院の祖父で、弘徽殿の父にあたる。
弘徽殿 右大臣の女、桐壺帝の女御で、朱雀院の生母にあたる。
一の宮 桐壺帝の第一皇子で、後に朱雀院と申し奉る。御生母は弘徽殿である。
左大臣 葵の上の父である。
兵部卿の宮 先帝の皇子で、藤壺女御の兄にあたる。
藤壺 先帝の皇女で、桐壺帝の女御になられた方である。
葵の上 左大臣の娘で、御生母は藏人少將に同じ。源氏の君の正妻となられた方である。
藏人少將 左大臣の子、御母桐壺帝の御妹で、葵の上の兄にあたる。
四の君 右大臣の娘で、藏人の少將の北の方である。
靱負の命婦 桐壺更衣逝去後、帝の御使として更衣の母の許に使した人。
右大辨 源氏の御後見として、高麗人にあはせ奉つた人。
内侍のすけ 藤壺の宮のことを帝に奏した人。
大藏卿 源氏君元服のとき、理髮のことを司つた人。

年立

源氏一歳 ときめき給ふ桐壺更衣の腹に源氏の君誕生の事
二歳 桐壺の君著袴の事
三歳 夏 桐壺の更衣病惱の事
同更衣輦車の宣旨を許されて退出の事
源氏の君母の忌服により内裏退出の事
故中衣を愛宕に葬る事
靱負命婦を遣し、更衣の母を訪はれた事
故更衣の遺物御裝束一領御髮上の調度を桐壺帝に奉る事
秋 桐壺帝更衣の御覽の事
桐壺帝故御息所を思ひたまふ事
日數経て後源氏の君參内の事
四歳 春 一の宮立太子の事
五歳 源氏の君の外祖母（桐壺更衣の御母）失せ給ふ事
六歳 源氏君御書始の事
七歳 源氏君鴻臚館にて高麗人に謁見の事
八歳 源氏君に始めて源氏の姓を賜はる事
九歳 源氏の君藤壺の御方に參候の事
十歳 源氏の君の先帝の女四宮入内の事
十一歳 源氏君御元服の事
十二歳 其夜左大臣の娘葵上と朝臣の事（葵上十六歳）
藏人少將右大臣四君を娶る事
二條院を作らる事
十三歳 玉鬘の君誕生の事（夕顔卷に出づ）
十四歳 源氏君中將となり給ふ事
十五歳 藏人少將頭中將となり給ふ事
十六歳

梗概

或る御代多くの女官中に容姿一世に勝れた更衣があつた。これを桐壺の更衣と申す。當時の帝は桐壺の帝と申してゐたが、この帝は他の多くの女官に注がれる愛を總べてこの桐壺の更衣に集注なさつた。今や帝の愛から遠く隔てられた多くの女官共は忽ち嫉妬の火焔をあげて、只管桐壺の更衣の身上に向つた。世人も唐朝の玄宗皇帝と楊貴妃との例を引き合ひとして、國家の前途を不安に思ふものもあつたが、帝と更衣とは前世からの宿緣が深かつたのか、斯うした間に更衣は帝の御情の胤を宿したのである。生れなさつた玉のやうな皇子こそ、この物語の主人公である源氏の君である。帝は更に桐壺の更衣を寵愛なされる。源氏の君は三歳で御袴着の式よりも更に盛大なものであつた。この年更衣は女官達の嫉妬の積りであつたか、里邸に御靜養中、身に餘る恩寵も甲斐なく遂に果敢なく崩ぜられてしまつた。

この時の帝の御悲歎は一通でなく、葬儀の際は三位の御贈位があつた。秋風肌に寒い月夜に寝負の命婦といふのに勅書を持たせ、更衣の母の許にお遣しになり、いろ〳〵と慰問をなさる。母は帝の御情を思へば更衣の生前といひ、又只今といひ萬感交々胸に迫つてくるばかりであつた。その夜は命婦と共に一夜を泣き明し。やがて夜は明けてから命婦は返書を持つて内裏に歸り、昨夜のことがらを逐一上聞した。かうした間に弘徽殿一の宮は皇太子となられる。源氏の君はいよ〳〵成身なさつて七歳となられた。その容姿風采の端麗優美であることは、こゝ世の人とも思はれない。嘗ては桐壺の更衣を仇敵の如く嫉視してゐられた弘徽殿の女御でさへも、源氏の君を愛しなさるやうになつた。源氏はこの七歳の年に御書始の式がある。日を經るにつれて、學問諸藝にも通達なされる。折から高麗からの人相見が來朝したので、帝は密かに源氏の君の人相をトせられる。相人一驚して曰く、この皇子には帝王の相あるも、帝王となり給ふときは憂ふべきことがあると言ひながら不思議がる。帝は熟慮の上、この皇子の前途を考へなされ、遂にて源氏の姓を給はつた。この間に於て帝は毎日快[illegible]まれす。ただ故更衣のことばかりを思つてゐられ[illegible]侍のすけといふ女が、先帝の皇女である女四の宮は[illegible]れ、故更衣によく似てゐられる由を奏上して、入内[illegible]てはいかがと帝にすすめ申した。帝は遂にこの女四の[illegible]せしめなさる。之れが藤壺の女御と申す方である。又[illegible]は三歳のときに母に死に分れた爲め母の面影をも御存じ[illegible]たが、藤壺の女御が母によく似てゐられるとのことをお[illegible]なり、これから帝のお伴をしながら、藤壺の姿を御覽に[illegible]一方ならず慕ひなさつた。源氏の君はあまりに美しい方であつたので、世人は「光る君」と申し、又藤壺の女御も容姿が優れてゐられたので「錦く日の宮」と申した。源氏も成人なされ十二歳の年を迎へられた時、元服の儀式が清涼殿で擧げられる。加冠の大臣には左大臣がなり、當夜は直ちに左大臣の邸で左大臣の娘、葵の上と婚禮の儀が行はれた。このときの葵の上は既に十六歳でゐられる。然るに源氏の君は正妻である葵の上が氣に叶はないで、帝が愛してゐられる藤壺に戀慕をかけてゐられる。元服以後は立派な一人前の男子であるから、最早大人扱ひとなつて、藤壺の部屋の近くで女御の彈じなされる琴をお聞きになり、御自身の笛をこれに合せて、ただ一つの樂しみとしてゐられた。源氏が内裏での御部屋は母君である更衣が住んでゐられた桐壺と定められた。又更衣の里邸であつた家は、源氏の君の里御殿となされ、宣旨によつて立派に改造されて二條院と申すのである。

この巻を桐壺と申すのは、桐壺の更衣のことが主なるものとして記述されてゐる爲め、巻中にある「御局は桐壺なり」の語によつて巻の名としたのである。

○いづれの御時にか——何時の時代であつたか、はつきりとわからないがといふ意。このやうな書き出しは古い時代のものにはよくある書き出しである。

○女御——中宮に次ぐ女官である。

○更衣——女御につゞける女官である。更衣、女御、については補綱參照。

○いと——きはめて、極めて。

○やむごとなき——無二止事」の意。非常に身分の貴きないふ。ここでは更衣の素性をいふ。

○時めき——その時代にありて榮えるをいふ。

○めくは接尾語で、他語に接して「その如くなる」の意を表はす自動詞の用をなす。春めく、上手めくの如し。

○初より——前からの意。

○われはと思ひあがり——

いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初よりわれはと思ひあがり給へる御方がた、めざましき者に貶しめ嫉み給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、うらみを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなり行き、物心細げに、里がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなる者に思ほして、人のそしりをもえはばからせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

解 何時の時代であつたか、確かなことは思ひ出されないが、女御更衣など澤山の女官達がゐられた中に、一人の更衣があつた。その更衣は極めて高貴な身分門閥の方でもなかつたが、時の帝（桐壺の帝）の寵遇を受け、當時では非常に花やかにもてなされてゐられた。この更衣（桐壺の更衣）がこのやうに帝の寵遇を一身に集めるやうになられたそのずつと以前から、容貌も優れ、家柄も高い女官で自分こそは、帝の恩寵を一身に集め、一世に榮えようと自重自信ゐられた女官だちは、桐壺の更衣が身分も卑しいにも拘らず花やかに榮えて、帝の恩寵を專にしてゐられるのを見、事の意外なるに吃驚りし、且は不快に思ひ、彼の桐壺の更衣が帝の寵を專らにするとは、あまりに甚しい方であるとしてけなし妬んだ。斯く家柄の高い何事にも大やうな女官即ち女御などでさへ、かく桐壺の更衣を妬んだのであるからして、まして更衣と同

一我こそは帝の恩寵を一身に集めようと思ひ、うぬぼれてゐた女官の方々をいふ。思ひあがりは自重してゐること。

○めざましき――この語は目の醒めるやうな愉快なことにも不快なことにもいふ語である。ここではその後の意にとつてゐる。

○貶しめ嫉み給ふ――桐壺の更衣を女御達が、言ひけなし嫉妬するをいふ。

○同じほど――桐壺の更衣と同じ身分のもの。

○それより下臈の更衣――桐壺の更衣よりずつと下つた身分の更衣をいふ。

○下臈――位次の下れる者をいふ。

○まして安からず――大體何事についても、大やうな所の高級の女官女御でさへも嫉妬したのであるから、まして下臈の更衣だちは、なほさら何の嗜みもなく、やきもきとしてれたんだのである。

○人の心を動かし――女官だちの嫉妬心をそそりたてること。

○うらみを負ふ――人から恨を受けるので、それが積つた爲めかといふこと。

○あつしく――病氣勝ちで身體の弱きことをいふ。

○物心細げに――何事に就いても、心細く淋しく感ずることをいふ。

○里がち――病身の爲めに宮中に居ることも出來ないので、母君の家に居ることの多いをいふ。

○あはれなる者――可愛相な者だと思ふこと。

○えはばからせ給はず――少しも遠慮をしない。

○世の例――何々の帝は更衣に對して斯樣な熱烈な愛を注ぎなさつたと、後世のためにも先例となる等の者や、それより下位の更衣達になると更に一層甚だしくやきもきして嫉妬した。斯うなると桐壺の更衣が宮中にお仕へ申すについての一擧一動は、すべて後宮の女官達の嫉妬心を起せるやうになつた。その人達からの嫉妬を受けるのが、つもり重なつた爲めであらうかの更衣は甚だしく身體が衰弱し、病身勝ちとなり、何事に就いても物淋しく心細い感じて、最早宮中に御仕へ申すことも苦しくなり、母方の實家に保養されることが多いやうた。斯うなると桐壺の帝は、愈々更衣は可憐な者であると、御考へはなつて、極端な愛がれるやうになつた。世人は帝の更衣を寵遇なさるのが甚だしいので、あれやこれやと噂るものもあつたが、帝はそんな外聞には少しも遠慮をなさらないので、遂には世間の噂の種もなりさうな極端な寵愛振りであつた。

補 いづれの御時にか――源氏物語中に出でてゐる人物は、その多くは當時の人をモデルとして書かれたところがあるに違ひない。それで紫式部はあからさまにこの物語を書き出すのを憚つて、何時の時代であつたか判然しないがと、殊更にボカシて書き出したものである。伊勢集の書き出しにも「いづれの御時にかありけんおほ宮す所（七條后）ときこえける御づぼねに大和におや（繼蔭）有ける人（伊勢）さぶらひけり云々。」とあるのは、作者自らのことを殊更にぼんやりとさせて書き出してゐるので、こととその意は同じことである。伊勢集は群書類從第二百七十三卷に收められてゐる。○女御――ニョウゴとよむ。周禮天官に「女御掌ニ叙ニ御于王燕寢ニ」以ニ歳時ニ獻レ功事ニ註女御即八十一御妻也、御猶レ進也侍也、叙御以ニ九九ニ而叙進也云々」とあるのから起つたもので、後宮の官女で天皇の御寢に侍するものをいふ。この號の起りは雄略帝の時である。日本書紀に「雄略天皇七年、是歳吉備上道臣田狹侍ニ於殿側ニ、盛稱ニ稚媛於朋友ニ曰、天下麗人莫レ若ニ吾妻ニ茂矣綽矣諸好備矣中略、天皇傾レ耳遙聽而心悅焉便欲レ自求ニ稚媛ニ爲。女御」と見ゆ。その後久しく中絶してゐたが桓武天皇のとき再び女御の號が起り、紀乙魚、百濟敬法等を女御とせられた。艇江入楚に「女御は殊の外賞翫ぞ后の次にする也、いかなる親王攝家の女も直ちに后に成給ふ事はなし。先女御入内とて參給ふ也。さて可然人はやがて后に立給也、是を中宮といふ。又其外女御にてあるべき品の人も第一の皇子など生れ給て若宮などに立給へば、いかやうの女も后に立也。」と見えてゐるから、皇后、中宮、女御、更衣といふやうな順序になる。女御は宣旨を下して補せられ、其上位階を賜はる例である。人員についても幾人と定つてゐないから一時に多くの女御がゐらせられるときは、そのお住ひになつた宣耀殿、弘徽殿、梅壺、桐壺など、その御殿の名稱をつけて宣耀殿女御など言つた。○更衣――カウイとよむ。更衣は女御の次で位階は四位か五位に叙せられた。もとは主上の御衣を御めしかへになる便殿に參候して御用を勤めてゐたものであるが、後には御寢所にも伺候するやうになつた。本朝では仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚授ニ從四位下ニ爲ニ更衣ニ是始也と河海抄にあるが始めての更衣である。○恨を負ふ積にや――古歌の「あしかれと思はぬ山の峰にだに　ある物を人のなげきは。」とある意をふまへて書いたものかと思はれる。

補 源氏物語の文は、切れてゐるやうで續き、續いてゐるやうで切れてゐる。そのため始めて讀

氏を繙くものは、その意を得ずして五里霧中にさまよふやうな感じがするであらう。是れは之の主格を始め、いたるところに省略法が行はれてゐるためである。又作中の主人公を始め、出てくる人物は、多くその本名があらはれて居ないといふことも影響してゐる。元來平安朝ふ時代は、人の名前を呼ぶことを嫌つた風習があつた。彼の紫式部といひ、清少納言といひ、何れも呼び名であつて、その本名は今日に至るまでまだ不明である。されど源氏物語全篇の文章は筆路整然として一糸亂れず、伏線あり、照應あり、一讀再讀更に興味の森々たるところはさすが傑作たるに恥ぢないものがある。

古來、このところの帝を、桐壺の帝といひ、更衣を桐壺の更衣といひ慣してゐる。

上達部、殿上人なども、あいなく目をそばめつつ、「いとまばゆき、人の御覺えなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も亂れ惡しかりけれ」と、やう〳〵天の下にもあぢきなう、人のもて惱みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて交らひ給ふ。

輔 上達部殿上人までも、更衣に對して何の遠慮をすることもなく、思ふ儘に目にかどを立てて嫉視しながら、「桐壺の更衣は、すばらしく見る目もまぶしい程に帝から寵愛せられてゐらつしやる。さてまあ、支那に於ても斯樣に帝が極端に妃を寵愛なさつたことからして、天下の政治

○かをいふ。
○御もてなし——待遇。
○上達部——公卿のこと三位以上をさす。時には大臣を除いての三位以上をさしてゐることもある。
○殿上人——ここでは、「うへびと」とよむが、テンジヤウビトのことである。四位五位の人々で、昇殿をゆるされた人をいふ。
◎あいなく——「あひなく」と書いた本もある。何のひだてもなく、打ちつけなことをいふ。思ふ事を遠慮なく露骨にあらはすをいふ。
○目をそばめ——目にかどだてて、人を嫉み見ること。
○まばゆき——目もまぶしくて、更衣の花やかな樣子を、眺められぬ程であるといつてゐるので、ここでは帝の非常に更衣を愛して、華麗に時めかされてゐることをいふ。
○人の御覺え——人の語は輕く、添へられたもので、更衣をさしてゐる。御覺えは寵愛をいふ。即ち更衣の寵愛されてゐられることかなあといふ意。
○唐土——支那。
○あぢきなう——なさなく。
○楊貴妃——唐の玄宗皇帝の妃で、皇帝はこの妃のために政を怠り遂に安祿山などの禍となつたことをいつてゐる。
○ほしたなき事——都合も亂れたといふ事である。」などと噂をするやうになり、世の中では、だん〳〵と、なさけないなつた。かうなると更衣も宮中にお仕へして行く上に於いて、同僚から仲がにつき嫉まれるとが極端になつてからは、安祿山などの騒亂が起つたなどといふ先例をも引き出して語るやうてゐられては天下はどうなるめであらうかと言ひ、遂には玄宗皇帝も楊貴妃を寵愛なさつたこの帝の恐れ多い御慈みの御心持を、又とないものとして縱りつき、苦しい同僚間の仲に立ち交つてゐられた。

補 ○上達部——カンダチメと訓む。公卿の異稱。上達は上等で部はムレ(群)の意であらう。官なれば參議、位なれば三位以上の人を總稱していふ。名目抄註には「關白以下三位以上云公卿、又云上達部、叙從三位、所曰上階、仍謂上階達部事歟。」とある。○殿上人——ウヘビトと訓む。又、テンジヤウビトとも訓む。四位五位の人で昇殿をゆるされた人をいふ。昇殿とは淸涼殿の南端にある殿上に昇ることを許されることで、四位五位のものは勿論、公卿でも昇殿を許されるものと許されぬものとがあつた。殿上人のことは又、雲客とも雲の上人、或は單に上人ともいふ。◎唐土にもかかる事の起りにこそ云々——これは殷の紂王が妲妃を愛して遂に國を滅亡せしめたことや、その他周の幽王は褒似を寵し、夏の桀王は朱喜に溺れ、吳王夫差は西施の美に醉ふて、何れも國を傾けたことどもをいふ。○楊貴妃のためし——楊貴妃

の惡くて困るやうな事をいふ。
○かたじけなき御心ばへ――更衣はいろ〳〵同僚に對して心苦しい立場になることもあるが、それでも桐壺の帝の恐れ多い御心を比類ないものとして、それをたよりとしてゐられるをいふ。

は楊玄琰と云ふ人の娘である。艶麗なること當時天下に比ぶべきものなく、歌舞音律才智算數の事に至るまで極めて達してゐた。白樂天の長恨歌の中にも、「一朝選在ニ君王側一。回レ眸一笑百媚生。六宮粉黛無ニ顏色一。」とある如く、唐玄宗皇帝の妃となり、後宮の佳麗三千人の寵を一身に集めてゐたものであつた。玄宗皇帝は嘗ては政治に勵精なされ姚崇、宋璟等の賢臣を擧げて開元の治をなされたが、後半生は楊貴妃の愛に溺れて、政を顧みず、そのため天寶十五年に安祿山一たび反旗を擧げると、漁陽の兵鼓、地を動かして來つた。帝は遂に止むなく馬嵬の地にて同車して蜀に蒙塵したまひしも、馬嵬の地にて妃はくびり殺されてしまつた。なほ詳しくは白樂天の長恨歌に出てゐる。

評 上達部殿上人までが何の遠慮もなく、ぶしつけに更衣の身の上を嫉妬するやうになつた。然かも單なる嫉妬ではなくして、だん〳〵と批難攻擊するまでに立ち至つた。世間でも帝が斯く妃の愛に溺れてゐらせられては、政治も亂れるであらう。玄宗皇帝が楊貴妃の愛に溺れて、天下を亂し御自身も蜀の地に蒙塵なされた先例のやうになりはしないかと言ひ騷ぐやうになつた。しとやかな一女性と生れた更衣は、周圍のやかましい批難攻擊には耐へられない事ではあるがそれでも一方ならぬ帝の愛情だけは、どうしても切るに切られず、唯だ一筋の帝の愛をたよりとよりすがつてゐられる。

最初更衣の身邊に起つたのは、單なる嫉妬に過ぎなかつたが、更に批難攻擊となり、今は天下の騷擾を豫期するまでに人心は不安となつたと作者を筆は極めて書き立てた。君王一日の恩に感じて妾は百年の身を誤るともいはれてゐるが、帝の一筋の愛によりすがつてゐる更衣は、思して今後どうなるだらうかと、讀者をして一途に更衣の身上に同情を引かさせてゐる。

このあたりの描寫は實に纖細なゆきわたつた筆致である。

○父の大納言――更衣の父。
○母北の方――高貴の人の妻をいふ。凡そ女は陰陽からいふならば陰にあたり、北の方に寢るをもととするところから出た語である。それでここでは更衣の母をいふ。
○古のよしあるし――古くから由緒のあること。即ち家柄のよいこと。
○親うち具し――ここでは、母親が女御更衣の身邊の世話をなして。
○あしあたりて――現在まのあたり。
○世のおぼえ――女官共の世間から尊敬せられてゐるをいふ。
○はなやか――花々しく

父の大納言はなくなりて、母北の方なむいにしへ人のよしあるにて、おやうち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもおとらず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、取り立ててはかゞしき御後見し無ければ、事とある時はなほより所なく心細げなり。

先の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。何時しかと心もとながらせ給ひて、いそぎ參らせて御覽ずるに、めづらかなる乳子の御貌なり。一の御子は右大臣の女御の御腹にて、よせ重く疑ひなき儲の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂には並び給ふべくもあらざりければ、大かたのやむごとなき御思ひにて、この君をばわたくしものにおぼほしかしづき給ふ事限り無し。

評 更衣の父は大納言であつたが、その父が亡くなりなさつてからは、更衣の母にあたる未亡人

は、古くから家柄のよい身分の方であつたからして、自分自ら更衣の身邊のことに關しては
すべてのことに就いて用意周到な世話をなされた。それで、女官達の中でさえ羨ましがるほどに生存し
てゐられて、現在さきのあたり世の中からもてはやされてゐられる女官の方々にも劣らなかつた。
いろ〳〵な儀式のときにも他の女官に劣らないやうに母が世話をなされたが、それでも矢張り
女親一人のかよわい腕ですることであるから、十分なことも出來なかつた。結局更衣の身
特別にしつかりとした後見する人がないために、いざ何かといふことのあるときには母
れるものの矢張り、たより所が無く心細い氣持でゐられる。
桐壺の帝と更衣とは前世の宿緣も一方ならぬ深いものがあつたのであらう。帝と更衣との間に
は玉のやうな美しい男の御子樣さへ御生れになつた。帝はこの御子の御產については、何時御
誕生になるかしらと、待ち遠しく御思召しになつてゐたが、いよ〳〵御誕生になると、早速御
子を宮中に召し寄せになつて御覽なさると、珍らしい程美しい容貌の御子樣でゐらつしやつた。
帝の第一の皇子は右大臣の娘で女御になつてゐる人の御腹に生れた方で、その皇子は外戚にも
堂々とした方があり、當然皇太子となるべきであつたからして、大切に養育なさつたが、然し
この源氏の君の容貌の並びなく立派でゐらせられたのには、とても比較にならなかつた。それ
で帝は一の皇子の方は世間體もあり、どうしても相當に養育せねばならぬところから普通の愛
を注いでゐられた。けれどもこの源氏の君の方は、眞に自分が愛する皇子であるとして大切に
お育てなされることは非常なものである。

はでなこと。
○もてなし——世話する。
○取り立てて——特に。
○はか〳〵しき——しつかりとした。
○御後見——家事の世話をすること。
○先の世——前世をいふ。過去世。
○御契り——宿世の緣。宿緣。
○世になく——この上ない。
○心もとながらせ——心もとなく思ふこと。心配してゐること。
○いそぎ參らせて——誕生になつた皇子を、帝が急いで宮中に御召しになつて。
○めづらか——珍らしいことで、珍らしく可愛いこと。
○乳子——乳を呑むほどの兒。赤兒。
○一の御子——帝の第一の皇子。

○よせ重く——よせは外戚のこと、それで外戚の重々しき人あるをいふ。
○儲の君——皇太子をいふ。
●もてかしづき——もては輕い接頭語で、かしづきは大切に養育すること。
○御匂——匂ひ色つやの美しきをいふ。ここでは容貌の美しきをいふ。
○大かた——一通りの。
○やむごとなき——無二止事一の意で、のつびきならぬこと。皇太子であるため、世間體もあるから、よんどころなく愛してゐられること。
○この君——更衣の生んだ只今の皇子で、後にいふ光の源氏なさす。
○わたくしものに思ほし——源氏の君こそは、眞に愛する自分の子であるといふやうにして、育てなさるをいふ。

補 ○大納言――普通ダイナゴンと讀むが、和名抄にはオホイ、モノマウスツカサともよんでゐる。大納言の號は天武天皇の御代蘇我果安巨勢比登臣紀大人臣に始まる。和名抄に太政官には大臣を長官とし、納言を次官とし、少納言辨を判官とし、外記史を主典とすと見えてゐる。大納言の職掌については、職員令に「大納言四人掌レ參二議庶事一敷奏宣旨侍從獻替」義解に「納言王者喉舌之官也、言納二下言於上一宣二上言於下一也。」とある。つまり大臣と共に天下の政事を議し、大臣なき時は太政官の政務を專行したのである。納言の文字は書經舜典の「命レ汝作二納言一夙夜出二納朕命一惟允。」とあるのから出てゐる。○右大臣の女御――右大臣の娘である女御といふことで、弘徽殿の女御と申す方をさす。父右大臣は後に二條の相國といふ。右大臣は太政官の長官で天皇を輔佐し、天下の大政を行ふ。位は左大臣の次にある。起源は皇極天皇の四年六月始めて左右大臣が置かれ、蘇我山田石川麿を右大臣となしたのに始まる。職員令に「左大臣一人掌下統二理衆務一舉二持綱目一總二判庶事一彈正糺不レ當者兼得レ彈レ之右大臣一人掌同二左大臣一。」とある。○儲の君――儲君、儲皇など書く、皇太子をいふ。この一宮は未だ皇太子に立ちなさらないけれども、世人はこの皇子こそは疑ひなき皇太子であるといふので、儲の君と言つたのである。この語は禮記郊特牲に「天子之元子士也天下無二生而貴者一也。鄭玄註儲君副主猶レ云レ士也。明下人有二賢行著德一乃得上レ貴也。」とある。

評 更衣の宮中に出でて宮仕するにつき、女官達との交りに心苦しい折が多かつた。母は相當な家柄の出であつたが、母の細かな世話も甲斐なく、更衣は宮中では他の女官達と肩を比べるわけには行かなくなつた。

○初より――この語の上に母君の語があつたものだと本居宣長は言つてゐる。光の源氏の母、桐壺の更衣をさす。
○おしなべて――なみ一通りの。
○上宮仕――女御、更衣のやうに別殿に祇候して

然し更衣は實になさけない方であつたが、帝との契は深かつたものか、玉のやうな美しい皇子を誕生なされた。帝の皇子に對する寵愛は甚だしいもので、今や弘徽殿の女御の腹に生れなさつた一の皇子にも增して更衣の御子を愛された。この皇子こそ光の源氏といひ、源氏物語全篇の主人公である。薄倖な弱い母から生れなさつた光の源氏こそは、當時の宮廷に於いて並びなき榮華を極めなさるのである。「先の世の御契りや深かりけむ、世に無く清らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。」と書いてゐる所、皇子の誕生にも前世の宿業を考へるところは、平安朝佛教の思想があらはれてゐる。又「一の御子は右大臣の女御の御腹にて、よせ重く疑ひなき儲の君と世にもてかしづき云々。」のあたりにも、外戚が堂々としてゐるから皇太子となられるのであると思つてゐる所も平安朝式である。決して第一の皇子だから皇太子となられるのだとは思つてゐない。斯ういふやうな考へは平安朝を通じての時代思想と言つてよい。

初よりおしなべての上宮仕したまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく上すめかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊のをり〳〵、何事にもゆゑあることのふし〴〵には、先づ參う上らせ給ふ。ある時には大殿籠り過して、やがて侍はせ給ひなど、あながちに、御前去らず、もてなさせ給ひしに、おのづから輕きかたにも見えしを、

時々帝に侍ふのではなくして、内侍などのやうに朝晩御前に何候するをいふ。
○おぼえ――帝の御寵愛をいふ。
○やむごとなく――甚だしきこと。
○上す――上臈といふのに同じ。貴人の稱。
○わりなく――あながちにしひて。
○まつはさせ――なつきて離れぬをいふ。
○ざるべき――然るべき、重だつた遊びが催されることをいふ。
○ゆゑある――何か重たつた事がある時。
○大殿籠り――貴人の御寢になることをいふ。
○やがてさぶらはせ給ひ――翌朝更衣が局へ歸させ給はないで、そのまま御前にさぶらはせ給ふをいふ。
○おのづから――自然と。

桐壺

の御子生れ給ひて後は、いと心ことにおもほしおきてたれば、「坊にもようせずば、この御子の居給ふべきなめり」と、一の御子の女御は思し疑へ

一四

釋 光の源氏の母君即ち桐壺の更衣は、さすが大納言の娘だけあつて、普通の典侍や命婦の常に帝の御前を去らずお仕へ申すやうな卑しい身分ではなかつた。又帝の御寵愛も格別で上臈らしい品のよい方であつたが、帝が極端に寵愛なさつて、御自身の[illegible]から呼び寄せてゐられたことが、だん〳〵と甚しくなり、然るべき御遊びなどに[illegible]とか、その他何事でも何か催されることのある時には、先づ第一に桐[illegible]を宮中にお招きになつた。

或る場合には、御寢になつて朝遲く起きられても、更衣はそのまま[illegible]くにさぶらはせ給ふなど、無理矢理にでも帝の御前近く更衣をはべらせて、手厚く待遇[illegible]つたからして、何と[illegible]く更衣の品位も落ちて輕々しく見えた所もあつた。この光の源氏がお生れになつて[illegible]いふものは、帝は一層甚だしく更衣を取り立てて愛しなさつたからして、この[illegible]た一の皇子の女御即ち弘徽殿の女御は、「これは油斷がならぬ。惡くするとこの光の[illegible]宮坊にお住みになるやうになり、遂に皇太子となりなさるやうだ。」と心配し、皇太子の[illegible]についても疑ひを抱かれた。

補 ○上すめかし――源注餘滴に「眞淵云今昔物語の古本に貴人を上衆と書き、賤を下衆と[illegible]

○輕きかたにも――何となく重々しい所がなくして、更衣の品格の落ちたことをいふ。
○おきてたれ――取りはからふこと。
○坊――東宮坊のことで皇太子の居給ふ御所をいふ。
○ようせずば――おしくするといふ意。
○居給ふべき――この光の源氏が東宮坊の御所にお住みになるやうになるといふことで、皇太子となりなさることをいふ。

り時の俗語也。」とある。○上宮仕――源氏官職故實總抄に、「上臈の女房をいふ、所によりて男にもいへり。男女ともに御前ちかく召つかはるるを、うへみやつかへといふ。」と出づ。
○坊――この坊の事についても、源氏官職故實抄に「坊とは春宮坊の事にして、本式春宮大夫以下の宮司政事を行ふ所なり、太政官のごとし。然れども又儲君の御事をも或は坊ともいへり。それ皇太子のおはします宮は東宮なり、傳、學士の官は常に東宮につき、大夫以下には春の字をもちゆること唐朝已來例なり。又春の字を東の音に假せるは是日本のならひなり。加樣なる事おほし。本邦東宮春官の號は持統天皇の御宇にはじまれり。」と記してゐる。又春秋隱公三年傳東宮得臣疏正義曰、四時東爲レ春萬物生長在レ東、西爲レ秋萬物成就在レ西、以レ此君在二西宮一、太子常處二東宮一也。或可下據二易象一西北爲レ乾、乾爲二君父一、故君在レ西東方震震爲二長男一故太子在レ東。」ともいつてゐる。○大殿籠り過して、やがて候はせ給ひなど――このあたりのところは、長恨歌の「芙蓉帳暖度二春宵一、春宵苦レ短日高起。從レ此君王不二早朝一。」とあるあたりの文句を思ひ浮びて作者が書いたものである。

評 作者はこの所で更に、具體的にとだん〳〵筆を進め、繰返して帝の更衣を愛せられる樣を爲したのである。「大殿籠り過して、やがて候はせ給ふ云々。」のあたりは濃厚な書き方であるが、このやうに筆を進めてゐるのも後段になつて、女官どもの嫉妬の爲めに、果敢なく世を去る更衣の運命をほのめかしてゐるのである。
このところで弘徽殿の女御の心配、皇太子の御位についての疑ひがそろ〳〵と萌してきたこと

桐壺

一五

○人より先に――この所の主語は、一の皇子の女御である。弘徽殿の女御は他の女御更衣よりも先に宮仕したのである。
○なべてならず――なみ大抵ではない。
○おんいさめ――弘徽殿の女御が、光の源氏の母の更衣を、嫉妬なされて帝にいろ〳〵と帝の更衣を愛せられる御心を制するないふ。
○なほ煩はしく――帝の弘徽殿の嫉妬なうるさく思召しなさるないふ。
○かしこき――恐れ多いこと。かしこき御陰なば云々といふのは、桐壺の更衣が帝の恐れ多い御愛情をたよりとしてゐられるないふ。
○貶しめ――桐壺の更衣を中傷し、その缺點をさがす他の女官達の多きなかなかなる――却つてとか、反對に。

を描いてゐる。

人よりさきに參り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子達などもおはしませば、此の御方のおんいさめをのみぞ、なほ煩はしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。かしこき御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵をもとめ給ふ人は多く、我身はかよわく、もの果敢なき有樣にて、なかなかなる物思ひをぞし給ふ。

釋 弘徽殿の女御は女官達の中でも、古く宮仕に參つた方で、帝も愛してゐられることは甚だしく、なほその上に女御の腹に生れなさつた皇子達も幾人もゐられるから相當な權威も持つてゐられた。それで帝が桐壺の女御を愛せられることは甚だしかつたが、それに對して誰も何ともさまたげ言ふものは無いが、只だこの弘徽殿の女御だけはいろ〳〵と嫉妬をなさつて、帝の更衣に對する愛を制しなさるので、これだけは帝も、うるさく心苦しく御聞きになつてゐらつしやつた。

さて桐壺の更衣は帝の恐れ多い愛により縋つてゐられるが、それでも外には他の女官達が缺點を搜したり、陷し入れようとたくむ人が多く、その上に自分の身は纖弱であるので、更衣はたよりない有樣でゐられた。普通ならば帝から愛せられてゐるなら何等不安もなく樂しかるべきであるのが、反對にさうではなくして常に心配ばかりをしてゐられる。

○御局――女官の住む部室。
○桐壺――内裏の淑景舍の別名、宮人女御の曹司である。壺(庭のこと)に桐が植ゑてあるから斯くいふ。
○隙無き――絶間無き。
○御前渡り――帝の御前に更衣が召されて參り給ふこと。
○心を盡す――煩悶することこゝでは女官どもが、更衣に對してやきもきすること。
○うち橋――廊下の切れ

補 ○なか〳〵なる物思ひ――なか〳〵は却つてとか、反對にといふ意であるが、このところの解としては眠江入楚に「ここの心は御寵愛なくばそれこそ物思ひなるべきに、是は御門の御寵愛故に人々おとしめそねめば結句中々物思ひをすると云心也。」とあるのは適解である。

評 更衣に取つては畏けない帝の愛も、今は心苦しい惱みのたねとなつた。帝も何一つ遠慮のあるべき身ではないのに、矢張り更衣の愛故に煩はしい事に逢ひ、いろ〳〵と煩悶なされると記してゐる。愛は人生の樂しみである。けれども老も若きも愛のために心を苦しめ惱む事が多い。

御局は桐壺なり。許多の御方々を過ぎさせ給ひつつ、隙無き御前渡りに、人の御心を盡し給ふも實に理と見えたり。參う上り給ふにも、餘り打頻る折々は、うち橋、渡殿、此處彼處の道に怪しき業をしつつ、御送迎への人の衣の裾堪へ難う、まさなきこともあり。又或時は、得去らぬ馬道の戸を鎖し籠め、此方彼方心を合せて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて數知らず苦しき事のみ增されば、いといたう思ひ佗びたるを、いとど憐れと御覽じて、後涼殿に、もとより侍ひ給ふ更衣の曹子を、外に移させ給ひて、上局に賜はす。其の怨まして遣らむ方無し。

てゐる土間へ、假りに板などを渡して通られるやうにする橋をいふ。移橋の轉訛であるといふ。
○渡殿――廊下。
○怪しき業――けがらはしきものかまきちらした事をいふ。
○まさなき事――宜しからぬ。
○得出らぬ――どうしても通られぬならぬ。
○馬道――横に厚板を數き渡して、廊の如く通行するやうにしたもの。
○はしたなめ――迷惑せしめて、困まらしむること。
○事に觸れて――事々に、何事についても。
○後涼殿――コウラウデンとよむ。清涼殿の西に隣れる御殿である。
○曹子――女官の部室。局といふに同じ。
○上局――つねの局のほかに、帝の御座所近くで休息所として別に設けられた部室をいふ。

桐壺

桐壺 桐壺更衣の御居間は桐壺といふ部室である。更衣が帝から御召しになつた時、この桐壺から澤山の女官の部室どもの前を通り過ぎなさつては、帝の御前に參上なさつた。うち頻りに帝の御前に召される桐壺の更衣を、他から見てゐる女官共が嫉妬や煩悶に心をつくしてゐたのも理のあることである。更衣が帝のところへ參上なさることが、あまりに頻繁なときは、他の官達だちはやきもちして、うち橋とか、渡殿などの此處彼處にきたないものを、などして、更衣の送り迎へのお伴人の着物の裾が、そのきたないものでよごれるやうな宜からぬ惡戯をされることもあつた。

又或場合には參上なさるときに、どうあつても通らなければならぬ馬道に更衣がさしかかりなさると、行手の方の戸をピシヤリと閉ぢてしまふものがある。かく此方彼方にて女官共が申し合せと、又後の方の戸をピシヤリと閉ぢてしまふものがある。さて更衣は仕方なしに後へお歸りにならうとして更衣をいぢめ苦しめる事も多かつた。

斯く更衣は事々に出逢つては、數へられぬ程苦しい事ばかりが增さるので、どうしようかと大變思ひ困つてゐらつしやるのを、帝が御知りになり、これは甚だ可愛相なことであると思召しになり、御座所に近い後涼殿中の曹子を更衣に與へて、此處に住ませた方がよい、さうすれば參上するに遠い路を通つてくる必要もなく、心苦しい思ひをする必要もあるまいとお考へになり、後涼殿の中に以前から住んでゐた更衣を他に移し住ませて、その部屋を桐壺の更衣の御座所近くの部屋として賜はつた。さて愈々斯うなると、後涼殿に今迄住んでゐた更衣はただでさへ桐壺の更衣に對して嫉妬の惡感情を持つてゐるところへ、更に今度は自分の住んでゐた部屋まで沒收されて桐壺の更衣に奪はれたのであるからしてその怨みはまことに、どうすることも出來ない程烈しかつた。

橋 ○うち橋――殿舍から他の殿舍に渡る廊の土間へ假りに板などを渡す橋をいふ。便宜に他に移すことが出來るところからして、移し橋といつたのが、ウチハシと轉訛したものだといふ。神代紀にも打橋を作ることが見えてゐる。○渡殿――ワタドノとよむ。殿舍から殿舍へ渡る通路をいふ。普通は兩側を壁、又は板にて張り、上方に格子を釣つたもので、これを「壁渡殿」といふ。又柱ばかりで勾欄があり吹き通しの廊を「透廊」といふ。渡殿のことは、細殿とも渡廊とも、單　廊ともいふ。○馬道――この語の解については古來いろ〳〵と說かれてゐる。古寫本に於ける古注には「馬道とは緣の事也」と書かれてある。言海もこの說によつてゐる。然し橋守部の說として、「横に厚板を敷き渡して廊の如く通行するやうにしたる處で、必要のある時は奥まで馬を引き入れる通路とするもの」としてゐる。又、長澤伴雄の說では「間通の約で殿中を貫通して構へた板敷の道」としてゐる。これが最もよいと思ふ。松井博士は平安朝中世から以後は專ら長廊下の稱として用ひられてゐたと說いてゐられる。○上局云々――紙江入楚に、「うへのつぼねとはまうのぼり給ふ時に、かりそめの休息などの局に給ふ也。末々の更衣などにうへつぼね給ふ事は難き事也。中宮后のまうのぼり給ふ時は清涼殿の御座のかたはらの二の間をうへつぼねに給ふ定れる事也。さて桐壺の更衣は女房ぞ、もとのままにて後涼殿をうへ局に

給ふ也。常に御前にのみさぶらひ給へば、ここにのみ御休息成べし。更衣御寵愛甚しき故に、の更衣たちいろ〳〵はしたなめわづらはす故に又如レ此。猶恨みの有べき事出來る也。」といつてゐる。

評　更衣は一身を捧げて帝に仕へてゐられる。帝は又、只管更衣に愛を注いでゐられた。女官共の嫉妬は益々烈しくなり更衣の參上の折は一方ならぬ苦しめを受けられることになつた。帝はこれをお聞きになり、それは可憐なことだと同情されて、更に上局として後涼殿にゐた更衣を他に移して、その局を桐壺の更衣に給はつた。ここは御座所にも近く、從前のやうに長い廊下や、人々の部屋の前を通つてくる必要もない所であつたから、桐壺の更衣としては至極好都合な場所であつた。然し帝が斯うして桐壺の更衣に對し、特別の同情を注ぎなさればなさる程、他の女官共の更衣に對する反感、憎惡、嫉妬は激烈の度を増したのである。

この御子三つになり給ふ年、御袴着の事、一の宮の奉りしに劣らず、内藏寮、納殿の物を盡して、いみじう爲させ給ふ。それにつけても世のそしりのみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御容貌心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、えそねみ敢へ給はず。物の心知り給ふ人は、「斯る人も世に出でおはするものなりけり」と、あさましきまで目を驚かし給ふ。

めて置くところ。
○物を盡して――そこにある總べてのものを、ことごとくとりだして使ふこと。
○およすけ――おとなびたること。成人すること。
○心ばへ――心のおもむき。
○ありがたく――ありにくいことで、稀である意。後世いふ感謝の意ではない。
○えそねみ敢へ給はず――敢へてにくみ來ることが出來ない。
○物の心知り――物の趣きを理解してゐる人。
○斯る人も云々――このやうな端麗な人も世にはあらはれなさるものであるかなあ、と歎息するの意。
○あさましきまで――思ひの外になることをいふ、奇怪になること。あきれること。
○御袴着――小兒の始めて袴を着するときの儀式。
○一の宮――弘徽殿女御の腹に生れた第一の皇子をいふ。
○内藏寮――金銀珠玉寶器錦綾御服別勅の用物をつかさどるところ。
○納殿――後涼殿にあり諸國よりの進物などを納

評　この桐壺の更衣が生みなさつた光る源氏が三歳におなりになつた時に、御袴着の儀式が行はれた。その儀式は以前に弘徽殿の女御の御腹に生れなさつた第一の皇子のなさつた御袴着の儀式に比べても劣らない程に、内藏寮や納殿にあるありだけの道具を出して盛大に立派な儀式を擧行なさつた。

斯く更衣の腹に生れなさつたやうな身分低い御子の袴着の儀式を、堂々たる第一の皇子の時の袴着の儀式よりも劣らぬ程に立派になさるとは、帝も思慮の無いことをなさると、世間では批難する人も隨分多かつたけれども、この更衣の御子がだん〳〵と成人なさるにつれて、日常の御容貌風采といひ、御精神といひ、どうしても世上にこのやうなすぐれた方は、又とあり得るものではないと思はれる程に珍しい方でゐられたからして、世間の人はこの御子を嫉み憎むことはとても出事なかつた。

物の趣きがわかつてゐる人は「このやうな立派な人が、世間へ出て來られることもあるものであるかなあ。」大變不思議なことであると、あきれながら目をぐる〳〵まわして光る源氏の美しい容姿を感心してゐた。

補　○袴着（着袴）――ハカマギとよむが、又音讀してチヤクゴともよむ。その起源は判然としてゐないが、西宮記には、「延長三年八月廿九日於二弘徽殿一親王著袴」とある。平安朝頃の朝廷に於ける袴着の式の樣子を見ると、先づ陰陽師にその日時を勘へしめられ、又着袴親といふものを定められる。この着袴親は普通天皇か若しくは大臣がその役になる。式の當日は袴着をなさ

る皇子は下袴を着し、着袴親が袴の腰を左に引廻し片匙に之を結び、次に直衣を着するのであるといふ。此の日饗饌奏樂をなす。その裝束は内藏寮より調進する。而して袴は仲恭天皇の時は合御袴（紅打三重）を用ひ、安德天皇の時は紅張三重御袴であつたと史に見えてゐる。皇女は紅の長袴を用ふ。次に公卿の子女の行ふ着袴の式も大體これに準じて知ることが出來るが、着袴親は親戚中最も宿望ある者を擇び、裝束は親戚中の尊長のものが贈る習慣である。大臣子女の着袴は、宮中若くは女院の方から裝束を賜つた事が多い。武家時代以後も行はる。

○内藏寮――ここではクラツカサとよむのであるが、普通はクラレウとよむ。和名抄にはウチノクラノツカサとよませてゐるが、内の字はよまぬのが故實であるといふ。服伸天皇の時に始まるといふ。中務省の被官である。内藏は大藏に對する稱で、御座所の近くにある倉庫を司る。金銀とかその他諸國から貢献した品物は先づ大藏におさめ、それから更に内藏に別ち納めたものである。なほ主上の年料御服、中宮東宮の冠服、諸社の幣物、佛事の布施等のことも司つた。

○納殿――ヲサメドノとよむ。貴重品、衣服、調度などを納れ置く所をいふ、後世の納戸に同じ。禁中では宜陽殿の内に在つた。それで宜陽殿のことを一に納殿ともいふ。又、校書殿の母屋には累代の書籍がをさめてあるが、そこをも文殿、納殿ともいふことがある。然し今の場合はそれをさしたのではない。

註　更衣に對する帝の愛は、遂にその腹から生れなさつた御子の上にも及ぶことになつた。然も更衣が未だ食て無い寵遇を受けられた如くに、御子も第一の皇子も及ばぬ程に盛大な袴着の儀式をあげられる。御子が斯く前例のない帝の愛を受けられることを、世人はそねみにくむのであるが、御子の成人なさるにつれて、容貌といひ、その精神といひたぐひなき立派な方であつたので、誰もこの御子に對してそねむことが出來ないといつてゐる。

その年の夏、御息所果敢なき心地に煩ひてまかでなむとし給ふを、暇更にゆるさせ給はず。年頃常のあつしさになり給へれば、御目慣れて、「なほ暫し試みよ。」とのみ宣はするに、日々に重り給ひて、唯五六日の程にいと弱うなれば、母君泣く〳〵奏して、まかでさせ奉り給ふ。斯る折にもあるまじき恥もこそと心遣ひして、御子をば留め奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限りあればさのみも得留めさせ給はず、御覽じだに送らぬ覺束無さを、言ふ方なく思さる。

語　御子光の源氏の御袴着のことのあつたその年の夏に、御子の母である御息所（桐壺の更衣）は少し病氣の氣分がして苦しまれたので、早速、實家の里へ歸らうと爲なさつたが、帝は更衣が居ないと淋しく思召さるので、決してそれを御許しにならなかつた。更衣は玆處數年來と云ふものは始終病弱の身になつてゐらつしやつたのであるからして、帝もそれに慣れてしまひあまり氣にも止めなさらないで、更衣に「まあ〳〵暫く我慢して、内裏に居て見るがよからう。」と

○御息所――女御更衣の汎稱。ここでは皇子を產みたる女御の稱。

○果敢なき心地云々――一寸した病氣で、少し氣分の惡いこと。

○まかでなむ――宮中から退出して、更衣が實家に歸らうとすること。

○暇更に――暇を少しも。

○あつしさ――病弱の身になること。

○暫し試みよ――内裏に居て病のなほることを試みて見よ。

○あるまじき恥――他の女官からいろ〳〵といぢめられて、おつてはならぬやうな恥ぢを受けるかも知れぬと心配して、御子だけは宮中に止めるのである。

○限りあれば――如何に別れを惜んでも、その果があるものであるから。際限がある。
○さのみ――そのやうにばかり。
○御覽じだに――天子の御位であるから、更衣の退り歸るを見送ることの出來ないのを。

仰せられた。然し更衣の病氣は日一日と重くなりなさつて、唯五、六日といふ暫かの間に大變衰弱してしまひなさつたので、かうなつては更衣の母君も非常に心配して、母君自ら宮中に參上し、泣く泣く更衣の病氣の狀態を申し上げて、內裏から暫し御暇を戴き、里で靜養するやう御願ひした。すると帝も御同情になつて止むなく御許しがあつた。「いよ〳〵更衣は靜養の爲めに宮中から下ることになつたが」斯うした場合にでも他の女官達は決して更衣に同情する筈がない。それで退出の途中、あつてはならぬやうな非常な恥辱に逢ふかも知れない。その場合は自分だけはどうなつてもまあよいとしたところで、更衣の腹に生れなさつたとはいへ帝の御子である光の源氏に對して一大事があつてはならぬといふ心配からして、御子を宮中に留めて更衣御自身ばかり人目に立たぬやうにして、こつそりと內裏を退出なされた。帝は別離の情に堪へぬ程であつたが、それかと言つて何時までも引き留めるわけにも行かず。あきらめなければならぬこととなり遂に留められずに許されたのであるが、帝の位にもあるものが、まさか更衣の如き身分のものを見送るわけにも行かず、更衣の里がへりを見送らぬのを、甚だ心もとない不安に思召され、何とも言ふに言はれぬ御心持でゐられた。

補 ●御息所（みやすんどころ）――天皇の御寢に侍する女御更衣の汎稱である。御息所の稱は蓋し天皇の休憩なさる便殿から起つた語で、女御更衣を言ひ、更に御寢に侍するけれども職名なきものをもいふ。要するに一の私稱である。その起源は確としたところは分らないが、東大寺要錄に引ける惠運の記には、「貞觀三年四月廿五日皇太后並北御息所剃髮出家」と出てゐるといふからして、淸和天皇の時代には既にこの名稱のあつたことが分る。猶此の惠運の記に出てゐる御息所は文武天皇の女御藤原古子である。又、降つては鳥羽天皇以後はその意味が一轉して皇太子及び親王の妃の稱となつた。本居宣長は玉勝間の中に於いて、女御更衣で皇子皇女を生みたるものを御息所と申すのであるといつてゐるが、必ずしも左樣とは限らない。その證には榮華物語卷一、月の宴のところに「さても此の御かた〳〵、みな御子生れ給へるどもなり。御子うまれ給はぬ御息所たちもあまた侍ひたまふ。」とあるのがそれである。但し源氏物語細流抄には「更衣のことなり、更衣と同心也。更衣たるは御子をうみ奉りて後、御息所と號するやうに此物語にはいづくにも見えたり。」とある。

評 更衣は日に〳〵病は重るが、帝はなか〳〵御許しなさるやうな樣子もない。更衣の母はいよ〳〵吾が子の身の上が心配になつて來た。老いの身を以つて自ら內裏に參內し泣く〳〵帝に申し上げて、吾が娘更衣のお暇を願つた。帝も老の身の涙を見ては、そのままにせられず止むなく更衣に暇を賜つて、里に靜養せしめられた。然し帝はその際となつても離別の情に悶々としてゐられる。更衣は斯うした病で退出する際となつても女官共の嫉妬、迫害を恐れ、御子の身上を心配なされ、里には連れ歸らないで內裏に留め奉るといふところ、帝、更衣、母と各々の此の際に於ける眞情が紙面に溢れてゐる。病に襲はれ重患の身となりながら、吾が子を案じ然も同僚女官の迫害を恐れねばならぬ更衣の心中こそ何と言つてよいだらうか。

○匂ひやか――匂ひはここでは色どりの美しいことで、更衣の皮膚の色のほんのりと美しいことをいふ。
○面痩せて――顔の痩せ衰へること。
○あはれと――嗚呼といふ感動の意と殆ど同じ。
○物を思ひ染む――心に心配を抱いて深く考へ込む。
○言に出でても――言葉に出して、自分の心中の苦を申し上げることもせず。聞えやらずのやらは遣るの意。
○有るか無きかに――自分の身でありながら、それが自分の身であるか、どうかが分らないほどに無感覺となつて衰弱してゐられること。
○來し方行末云々――帝が更衣に同情しなさつて前後のことも分らぬやうになり。
○目み――目つき。

いと匂ひやかに美しげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれと物を思ひ染みながら、言に出ててもいはえやらず、有るか無きかに消え入りつつ、もの給ふを御覽ずるに、來し方行末思召されず、萬のことを泣く〳〵契り宣はすれど、御答もえ聞え給はず。目みなどもいとたゆげにて、いとどなよ〳〵と我かの氣色にて、臥したれば、「如何樣にか」と思召し惑はる。

語釈 非常に皮膚のつややかに美しい姿でゐられた御息所も、病氣の爲めに顔も大變痩せ衰へなさつた。さうして今いよ〳〵内裏から暫く暇を戴いて退くについても、このやうな病氣では現在なくなつてしまふやうなことがあつて、帝に御逢ひするのも今が最後となるやうなことになり、はしないかしら、可愛い御子をも宮中に留めて去らねばならぬのか、又かく病の重るのは女官だちの嫉妬のつもつたのが鞠ひをなしてかくなるのではないかしらと、あれやこれやと思ひあぐらし嗚呼、どうなるのだらうと思ひ惱みながらも、さればとてこの惱みの數々を帝に申し上げようかと思召されても、いろ〳〵と迷ひなさる心と、病の苦しみとで、遂に口に出して申し上げることもなさらない。更衣の病はだん〳〵と重るにつれて、もう意識も朦朧としてしまつて、吾が身ながらそれが自分の身であるか、人のものであるか分らないやうな人事不省の狀態にまで衰弱してしまひなさつた。この有樣を帝が御覽あそばされて、殆んど前後不覺の體となつてしまひなされ、無中となつて涙を流しながらいろ〳〵なことを約束をしなさつて、御息所を慰めることに努力なさつたが、御息所は御返事もなさられず。ただ重い吐息をつきながら、その目つきもだるさうな樣子で、一層體の力も衰へ、ぐた〳〵として無意識でそこに倒れてしまひなさつたから、帝も非常に心配なさつて「こうなつては一體どうしたならばよいのだらう。」と、いよ〳〵思ひ惑ふてゐられる。

○たゆげ――俗に言ふだるさうな樣子にいふ。たゆげの「げ」は樣子とか、態度、狀態といふ意の接尾語。
○なよ〳〵――ぐにや〳〵として弱々しいことを形容した語。
○我かの氣色――自分の身が自分のものか、人のものか分らない程感覺が鈍つてしまつたこと。正體もないこと。
○如何樣にか――これはどうしたらよいだらうかと思ひ惑ふこと。

補 ○目み――孟津抄には單に「目」のこととしてあるが、源注餘滴には契沖の說を引いて曰く、目みとは「目をあげて物を見る目つきである。單に「目なり」と注してゐるはよくないと。その例證としては萬葉集卷七の「大船を荒海に漕ぎいで八船たけわが見し兒等が目みはしるしも。」とあるのや、今昔物語にある「簾の方をしり目に見やり給ふ眼見などはづかしげなる。」の如きを擧げてゐるが、この說はよい。

評 御息所はます〳〵重らせなさる。帝は愈々途方に暮れて心配なされ、あれやこれやと心盡しのことを述べて、御息所を慰めなさるが御息所はただ力ない目つきでぼんやりとしてゐられるといふあたりは、眞に迫つて如何にもよく描かれたものと云はねばならぬ。

輦車の宣旨など宣はせても、又入らせ給ひては更にえ許させ給はず、「限りあらむ道にも遲れ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとも打棄ててはえ行きやらじ。」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

限りとて別るる道の悲しきに、生かまほしきは命なりけり

○輦車の宣旨――輦車に乘つて宮中内を出入してもよい、といふ勅許をいふ。輦車とは、輿に車輪をつけて、人の手でひく車である。
○え許させ給はず――御息所の里歸りをお許しに

いと斯く思ひ給へましかば」と、息も絶えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、「斯くながら兎も角もならむを御覽じ果てむ」と思召すに、今日始むべき祈禱どもさるべき人々承はれる、「今宵より、」と聞え急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせ給ひつ。

講　御息所の病惱は甚だ重態となつたので、帝は特に輦車に乘つて出入してもよいといふ勅命をお下しになり、その方の用意を整へてゐられながらも、それでも御息所のことが心配になつてたまらず、再び御息所の部屋に入らせられ、一旦は里に歸ることを許したが、それでもいとしい女の姿を見ると、さあ歸つてもよいとは少しも仰せられず。「どうせお互に死なねばならぬ人間の運命であるとしても、「死ぬときは遲れたり、先きになるやうなことなく」一緒に共々に行かうと嘗ては約束をして置いたのであるのを、それでも我を捨てて御身だけが死んで行かうとするか、それはやらせないぞ。」と仰せられるので、御息所も甚だ悲しい思ひで帝を見奉りながら一首の歌を詠じて、

限りとて別るる道の悲しきに生かまほしきは命なりけり

まあこのやうな病身にならうと思つてゐたことならば……」とまでは言はれたけれども、その後は呼氣も絶え〳〵の有樣となり、帝に申し上げたいことは山々ありさうだと苦しさうに弱つてゐられるので何にも仰せられない。帝はこの有樣を見ながら、その影響が引いては第二人者に及ぶので話のなだらかを計る上からして、對者に對する敬語として用ひたものである。

○わりなく――理無しの義、餘りに甚だしく。

なる重態であるのを、里へ歸すわけには行かない。このまま此處に留めておき、再び助かるものか、それとも死んでしまふものか、そのどちらかになるかを見屆けよう。」とお考へになつてゐられるところへ、然るべき堂々たる人達で帝の仰せを受けて、御息所の里家で平癒の祈禱を行ふべき人達が參つて、「今晩から早速、祈禱を始めますから早く御歸りなさい。」と御息所のお歸りを急がせ奉つたので、帝は里で行ふ祈禱も大切であると思召しになり甚だしく惜別の情に打たれてゐらせながら、遂に里にお歸しになつた。

注　○輦車の宣旨――輦車といふのはその形、唐車に似てゐて庇が少し異り、人の手で輓く車である。屋形は長さ五六尺に作り、障子は六枚櫬で、轅と輪とは櫟を用ひ、柱と勾欄とは檜と榑とで作る。一に手車とも、腰車、小車ともいふ。天皇行幸の時に用ひる。なほ東宮、親王、攝關、大臣、妃、內親王、命婦、三位の嬪、女御等も乘用することを得る。僧では大僧正、護持僧などが宣旨にて乘用することが出來る。この輦車に乘るを許される勅命を「輦車の宣旨」といふ。「宣旨」は、もと勅旨を宣傳する義であつたのが、後には轉じて別に口勅を傳宣する義となり、更に文書の名稱となつたのである。即ち先づ內侍が勅旨を承りて、その口宣をば直ちに藏人頭などに下され、外記の手を經て宣旨となし、之を頭に送り、さて頭から授くべき人の許に送るのである。今日始むべき祈禱ども――源氏細流抄に「今夜より更衣の里にて修法をもさせんとて也。是もふかくおぼしめすにより退出を許し給ふなり。」とあるのはよい。

評　即息所の心中に於ける悲しみを、主觀的には述べないで、「いと斯く思ひ給へましかばと、息

も絶えつつ聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば云々」と、どこまでも客觀的に述べてゐるところが、一層御息所の悲しい心中の惱みが窺はれて面白い。又帝は別れようとしても別れられない惜別の情に悶えてゐらせられる。そこへ突然新禱の僧どもがあらはれて御息所の里へ下られることを促した。帝は名殘は惜しいが里に於ける新禱も大切だ。もしや平癒することもあらうかと、それをたよりに里に歸らせなさる。帝の細かな心の動きがよく描かれてゐる。

御胸のみつと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、なほいぶせさを限り無く宣はせつるを、「夜中打過ぐる程になむ絶え果て給ひぬる、」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り參りぬ。聞し召す御心惑ひ、何事も思召し分れず、籠りおはします。御子は斯くてもいと御覽ぜまほしけれど、斯る程に侍ひ給ふ例無きことなれば、まかで給ひなむとす。何事かあらむとも思ほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを、よろしき事にだに、斯る別れの悲しからぬは無きわざなるを、まして哀れに言ふ甲斐なし。

○つと塞り――俗にいふぴったりとに同じ。
○つゆまどろま――「つゆ」は「少しも」といふ副詞、「まどろむ」は暫しうつら〳〵と眠ること。
○御使の行きかふ云々――勅使の更衣の里に訪れに行つて歸つてくるだけの時間ないふ。
○いぶせさ――氣が塞つて心許ないこと。
○絶え果て――死んでしまふ。
○泣き騒げば――御息所の里のものどもが悲しんで泣き騒ぐのである。
○あへなくて――力落して、張り合ひの無いこと。
○籠り――夜の御殿に引きこもつてゐられること。
○御子――御息所の御子である光の源氏をいふ。
○斯くても――御子の宮中に居らせられるのでも。
○斯る程に――生母の死なれたやうな悲みの場合に。
○まかで給ひ――宮中から生母の家に下ること。
○何事かあらむ――子供でゐらせられるので何事が起つたのか、それらのことには氣がつかずにゐられる。母の死を氣附かねないふ。
○上――帝をさす。
○侍ふ人々――おそば近くにはべる人々をいふ。
○怪しと――不思議なことだ、變なことだと。
○よろしき事――さまでなきこと。普通なこと。
○斯る別れ――ここでは

御息所もいよ〳〵里家に歸つてしまつた。淋しくなつた帝は惱みで胸が塞つてしまひ、少しも眠られずにゐられる。夜一晩はどうして明かさうかと苦しまれる。かく御息所のことが氣になるので、その里へ御使を遣して訪ねなさるが、その使が行つてまだ歸つて來ない暫かの時間でも待ち遠くて、侍臣の者どもに、氣が晴れ〳〵しないことを始終仰せられる。左右の者共も困つてゐたが、その處へ御使に行つた者が「夜中過ぎの頃にまあ、御息所は到頭御かくれになつてしまひなさつた。」と言つて、里の者共がその死を悲しんで泣き騒いだので、御息所をおとづれたが何の張り合ひもなかつたと、がつかりして歸つて來た。このことを御聞きになつた帝は、御精神も混亂してしまひ、何が何だか少しも分らぬやうになつて、夜の御殿に引き籠つたきりでゐらつしやつた。かうなつてはせめても、御息所の忘形見であるところの御子を、生母を偲びなさるものとして、宮中において御覽になりたいと思召しになつたが、併しこのやうに忌服になつてけがれてゐられる御子が、この如き場合に內裏に留つてゐられた先例は、未だ曾てないことだからして、御子は愈々御退出にならうとせられる。御子は此時僅かに三歲でゐらせられるからして、利巧でゐらせられるとはいへ、母上の死になさつたことなどは少しもおわかりにならない。帝の左右にゐられる方が泣いてゐられるのや、帝の御目には始終涙が絶え間なく流れてゐることなどを、變な不思議なことだと、御子はあたりを眺めてゐられる。このやうなあどけない子の樣子を見ながら愈々この子供とも分れねばならぬとなると、帝は普通の場合でさへも親子の別れは悲しいことであるのに、今は御息所の死別の嘆きの上に更にこの忘形見

帝と御子の別れをさす。即ち親子の別れをいふ。
○わざ――業の意でなくして、このやうなときは單に事といふやうな意。
○言ふ甲斐なし――言ふまでもない。言ふ張り合ひが無い。

○ッ有れば――死骸はまでも、そのやうに直くわけには行かぬ。
○り果には葬られればな

の御子との生別となつたので、一層悲しまれてゐられたことは言ふまでもない。

補　このあたりの記事は歴史上の事實をモデルとして書いたものもだといはれてゐる。玉の小櫛はに本居宣長曰く、

宣長云續日本後紀「承和六年六月庚戌朔己卯、女御從四位下藤原朝臣澤子卒、故紀伊守從五位下總繼之女也、天皇納レ之、誕二三皇子一皇女一也。寵愛之隆、獨冠二後宮一、俄病而困篤、載二之小車一出レ自二禁中一、纔到二里第一便絶矣。天皇聞レ之哀悼、遣二中使一贈二從三位一也。」桐壺更衣の事、是に據つて書けるなるべし。似たる事おほし」

評　帝をして絶えず悶えの中に苦しませ奉りながら、御息所をして急に死なせて仕舞ふところ讀者をして更に驚かしめるのである。吾人は遠き昔の作品に接しながら今更の如くに、強き同情の念と悲哀に打たしめられる。

「怪しと見奉り給へるを、」の下に脱文があつたのではなかろうかと先人も言つてゐるが、或は脱文があつたのかも知れぬ。又この儘であつたとしても、言ひさして省略したものとして意味の通ぜぬことは無い。

限り有れば例の作法に納め奉るを、母北の方、「同じ煙にも上りなむ」と泣き焦れ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乘り給ひて、愛宕といふ所にい

○例の作法に――舊來の例に從つた葬儀での意。
○納め奉る――死骸を葬り奉るをいふ。
○同じ煙に云々――御息所の死骸を燒くと共に、我身も燒いて貰つて、同じ一片の煙となつて消えてしまひたいといふ意。
○焦れ――惱みもだくこと。焦心焦慮の意。
○御送り――死骸を火葬所に送ること。
○女房――房は局のことで部室の事をいふ。仕へてゐる女の房の事からして、仕へてゐる女をすべて女房といふ。
○愛宕――今の山城國愛宕郡中村修學院村にあたる。桓武帝平安遷都のとき、ここに諸人の葬所と定られた。
○いと嚴しう――甚だ壯嚴に。
○其の作法――葬禮をいふ。

嚴しう其の作法したるに、在し着きたる心地如何ばかりかはありけむ。「空しき御骸を見る〳〵、なほ在ずるものと思ふが、いと甲斐なければ灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなむ。」と賢しう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、「さは思ひつかし」と人々持煩ひ聞ゆ。内裏より御使あり。三位の位贈り給ふ由、勅使來て其の宣命讀むなる悲しき事なりける。女御とだに云はせずなりぬるが、飽かず口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと贈らせ給ふなりけり。

評　御息所の死骸は何時までも、その儘にし、それを眺めては悲しんでゐるわけには行かない。果ては慣例の葬儀に從つて葬り奉ることとなつた。すると母北の方は、一時に悲しさが增し、「娘の死骸も遂に火葬の煙となされるが、妾も娘と同じやうに燒かれて同一の煙となつて立ち消えたい。」と泣き〳〵ながらあせりもだえて、家に召し使つてゐた女房どもが送葬の爲めに車で出て行くが、母北の方は遂に是非その車に一緒に乘せて行つてくれと後を慕つて乘りなさつた。偖て葬地である愛宕と云ふ土地で、大變立派な御息所の葬禮を擧行せられたが、そこへ御著きになつて、娘の壯麗な御葬儀を御覽になつたときの母北の方の御心持はどんなであつただらうか。それは非常に悲しかつたでありませう。母北の方は先に「娘の死に果てた死骸を見て

○在し着きたる――愛宕の葬場にお着きになつた御息所の心中の思ひ。
○見る〳〵――見ながら。
○なほ在するもの――御息所はなほ此の世に生きてゐるものと母北の方が思ひなさること。
○ひたぶるに――ひたすらに、一途に。
○賢しう宣ひ――道理らしく賢しく仰せられること。
○車より落ちぬべう――母北の方がいよ〳〵、灰になつた御息所の有様を見ては、心もひつくり返へる程、思ひ惑ふこと。
○べうはべくの音便。
○さは思ひつかし――そのやうになるだらうと豫期してゐたといふことで、他の女房どもの言ふのである。
○持煩ひ聞ゆ――他の人々が持てあましてゐること。

ゐながら、どうもこのやうに死骸を見てゐると、まだ娘はこの世に生きて居るものゝやうに思はれて、どうも仕方がないから、死骸の火葬に附せられて、灰となつて仕舞ふのを見奉つて、それでこそ始めて、もう娘はこの世にはゐないと一途に思ひあきらめませう。」と如何にも理智に富んだ人のやうに仰せなさつては居られたけれども、愈々火葬の現場を御覽になると、あきらめるどころか、心も困惑し果てゝ車から落ちなさるやうに泣きくづれて悲しみなさつたからその傍に居た女房共は「どうせきつと斯うなるだらうと思つてゐた。」と言ひながら、その處置はどうしてよいかと持てあましてゐた。偖て葬儀は終ると、内裏から御息所の里へ勅使が下つて、故御息所に三位を追贈するといふ旨の宣命を讀みあげたことはまあ、これを聞く人にとつてそゞろ故御息所のことが思ひ出されて悲しいことであつた。帝は御息所が更衣の地位で死んでしまつたので、遂に女御の位まで上せられなかつたのを深く殘念に思召しになり、せめて位一階だけなりとも進めてやらうと思召しになつて贈位の沙汰があつたわけである。

補　○三位のくらゐ――三位のよみについては源氏細流抄に「三つのくらゐと讀也。」とあるが、源注餘滴には眞淵の說を引いて曰く、「眞淵云此三位は音にてさんみと唱ふべし。みつの位と訓むべしといふは宣命などよむ時の詞にていふらめど、物語にていふ平語なれば音にて書きたり。みつのくらゐとよまんならば三位おくり給ふと書くべし。三位のくらゐとかきたるをいかでかしかよまんや、宣命祝詞序文そのほかの類みな訓なり、物語りは音もまじれり。」とあるのに從つて置いた。○宣命――公文書の一で、邦語を以つて天皇の言を宣布するものである。その中で神事に關係のあるものは祝詞（ノリト）といふ。歷朝詔詞解に、「世に所謂宣命は、卽ち古の詔勅にして上代の詔勅は此外なかりしを萬の事、漢ざまにならひ給ふ御世となりては、詔勅も漢文を用ひらるゝこと多くなりて、後の世に至りては遂に、其の漢文なる方を詔書詔勅といひて、もとよりの皇國語のをば分けて遂に宣命とぞいひならへける云々。」とある。

○宣命――贈位の旨を書かれた勅語である。大臣勅を奉じ、内記に命じてその旨を文に作らしめ、少納言をして讀ましめるのが例である。
○女御とだに云はせ――御息所は更衣であつたため、女御の位にまで昇せなかつたのを帝が悔いなさるのである。

○これにつけても――三位に追贈なさつたことをいふ。
○物思ひ知り――物の情のわかつた人といふことで、女官中の人をさす。

評　御息所の死骸を見てゐると、どうしてもまだこの世に生きてゐられるやうに思はれてならぬ。どことなくその聲が聞えるやうである。然し御息所は既に此世に亡き人である。亡き人を亡き人とあきらめられずに、苦しんでゐられる母北の方は、遂に空しき娘の無骸を灰にし奉る事實をながめて、さてこそいよ〳〵この世に無き人と思はうと。心强くも決心はしなさつたものゝ火葬の現場に臨んでは、心氣混亂なさるあたりの描寫は、眞に立派なものである。冷靜な母北の方の理性も、情の奔流には勝たれなかつた。

「空しき御骸を見る〳〵なほ在するものと思ふが……賢しう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば云々」のところ千古のもとまでも否永久に、吾人をして痛く感激に打たしめるものがある。

これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは、人品容貌などの愛でたかりし事、心ばせのなだらかに目安く、憎み難かりしことなど、今ぞ思し出づる。樣惡き御待遇故こそすげなう嫉み給ひしか。人柄のあはれ

○人品容貌――御息所即ち桐壺の更衣なさす。
○愛でたかりしこと――好かつたこと。立派であつたこと。
○なだらか――おだやかにやさしきこと。
○目安く――見よいこと。見苦しくいやな感じを與へないこと。
○様悪しき――他目にも見苦しい程に、更衣御息所が寵愛なさつたことをいふ。
○すくなう――無愛想にの意。日本紀に「無二人望」とある。
○人柄のあはれ――御息所の人柄が、人なつかしい所があり、愛情に富ませ給ふたことをいふ。
○上の女房――帝の御傍近くに仕へてゐた女房達をいふ。すべて上（うへ）とは帝のあたり近きをいふ。うへつぼね。うへみやづかへの如し。

に情（なさけ）ありし御心を、上（うへ）の女房なども戀ひしのびあへり。「なくてぞ」とは斯（か）る折にやと見えたり。

評　この御息所に、帝が三位のくらゐを追贈なされたことに關しては、あまり極端なことだとして、女官共の中には憎惡する人が隨分多かつた。然し女官中で物の情趣を辨へ知つてゐる方々は、死なれた御息所は、その人品といひ、容貌といひ、實に好い立派な方であつた事や、その性質氣だての溫和でさつぱりと見苦しいところの無くて、憎まうとしても憎まれなかつた事などを、亡くなつて仕舞ひなさつた今日となつてから、始めて慕はしく追想なされた。帝が他目も憚り悪い程極端に、寵愛なさつたからしてこそ、御息所は他人から無愛想に嫉妬を受けなさつたのである。御息所その人は、人柄も人なつかしい所があり。愛情に富んだ方であつたことは、今でも帝の御傍近く仕候してゐる上宮仕のものまでが、故人を戀ひ慕つてゐる。「人間といふものはお互ひに生きてゐるときは、まだ世に永く居るものとして、氣の荒らくなるときは憎いこともあるが、いざその人が故人となつてしまふと始めて戀しくなるものである。」といふ古歌もあるが、この古歌の意は、今の故御息所の如き場合を言つたのであらうかと思はれた。

補　○なくてぞ――この句は古來、藤原伊行の著である源氏物語奥入に出てゐる「ある時はありのすさみににくかりきなくてぞ人の戀しかりける」とある古歌を引いたものとしてある。古來多くこの注を用ひてゐるのに從つて置いたが、僧契沖は「奥入にひかれたる歌六帖卷五に「ある時はありのすさみにかたらはで戀しきものとわかれてぞ知る」此歌はありて奥入の歌なし何に出たるにか」とある。參考のために掲げて置く。

○なくてぞ――源氏物語奥入にある「ある時はありのすさびににくかりきなくてぞ人の戀しかりける」とある歌によつて書いたものかといふ。この歌出處不詳。
○斯る折にや――このやうな場合に言つたものであらうかといふこと。
○果敢なく――力無くの意。
○後の業――七日七日の法事とか、百日の法事などをいふ。これ等のことを帝が使を遣しておとづれなさるをいふ。
○程經る儘に――日數の經過するにつれて。
○詮方なう――どうしてよいか、爲すべき方法もなくして。
○御方々の云々――女御更衣など女官どもの、帝へ御番に參るをいふ。
○爲給はず――このところ正しくはせしめ給はずといふべきを、ぼんやり

果敢なく日頃過ぎて、後の業（わざ）などにも細（こま）かに訪（とぶら）はせ給ふ。程經（ほどふ）る儘に詮方（せんかた）なう悲しう思（おぼ）さるるに、御方々（おんかたがた）の御宿直（おんとのゐ）なども絶えて爲給（したまは）はず、唯涙にひぢて明（あ）かし暮らさせ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡（な）き後（あと）まで人の胸明（あ）くまじかりける人の御覺え哉」とぞ、弘徽殿（こきでん）などにはなほ許し無う宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみ思（おも）ほし出でつつ、親しき女房御乳母（おんめのと）などを遣（つか）はしつつ有様を聞し召す。

譯　御息所の死後は帝も、がつかり力を落されて何といふこともなく月日を過されてゐられる。七日七日の法事にはその度毎に御使を御息所の里へお遣しになり、親切に亡後をお弔ひになる。かうして日數を經るに從つて、どうしようもない程悲しく思ひなされるので、女官達の御勤めなどもさせられず、唯だ毎日涙にくれてゐられるので、それを傍で見てゐるお附き人でさへも同

とぼかしてゐる。
○ひぢて――ひたつての意。
○明かし暮らす――夜を明かし日を暮らすことで月日を過すことないふ。
○鍵げき秋――涙が出て袖がしめつぽい悲しい秋である。
○亡き後まで云々――死になさつた後までも、人の胸を晴々しくさせないで、却つていら〳〵させる程に帝は甚だしく死後までも愛してゐられることであると、桐壺の更衣のことを弘徽殿などの嫉み思ひなさるのである。
○弘徽殿――一の皇子の生母。
○一の宮――一の皇子。
○若宮――今まで屢に「御子」と言ひ来つた「源氏の君」のこと。
○親しき女房――若宮の親しくしてゐられる女房。
○御乳母――母に代つて小兒に乳を呑ませ育だつる女をいふ。ここでは若宮の乳母である。
○野分――秋になつて野原の草を吹き分ける強い風。
○宿よりも云々――折からの秋の風物に感慨を催されたのである。
○親負の命婦――女官の名、詳細は補欄に詳し。
○夕月夜――夕方ばかり月があつて光のまだ薄時き頃。
○なかし――面白く。
○やがて――そのまま。

補説

情の涙に濡れ、何となく物悲しい秋であつた。御息所は殁せられても帝は矢張故人のことばかりを思ひなされ、他の女官のことは考へられないから、弘徽殿の女御などは大に憤つて、「死んだあとまでも帝の寵遇をひたすら受けるとは、吾々をしていらいらさせる程のあまりな寵愛である哉」と、なほも嫉みなさつた。帝は弘徽殿の腹に生れなさつた一宮を御覧になるについても、里に歸つて忌服中の若宮はどうしてゐるだらうと、戀しう思ひ出されて、若宮と御馴染深い女房や御乳母などを、里の方へお遣しになつて、いろいろと若宮の様子をお聞きになる。

補 ○弘徽殿――内裡中の宮殿の一、後宮で皇后、中宮、女御などの住みなさるところである。至尊の御座所である清涼殿の北隣にあたる。こゝにいふ弘徽殿とは、一の皇子(後に朱雀院)の生母で、弘徽殿に住んでゐられた弘徽殿の女御を申すのである。○見奉る人さへ――眺江入楚に「或抄云村上の御時中宮安子應和四年四月十八日にかくれさせ給へる頃、女御みやす所の御とのゐたえてしほたれくたさせ給ふ。其としの秋せんざいに露のおきたるを風の吹きなびかしたるを御覽じて、拾「秋風になびく草葉の露よりも消にし人をなににたとへん」桐壺の巻夏の頃うせ給て秋の御思ひ切なる御ありさま宮城野の露ふきむすぶなど詠じ給ふ御前のつぼせんざいなど御覽ずるやうにとかけるかた〳〵思ひよそへらるゝにや云々」と。

註 前段には、御息所の生前は御息所をあれやこれやと嫉みあつてゐた女官どもも、今となると故人のすぐれた容姿や心ばせに思ひ入つて慕つてゐると述べてあつたが、この所では更に帝にとつては何ともせんすべのない程追慕の情に暮れてゐられると一歩を進めて強く叙してゐる。

「亡き後まで人の胸明くまじける人の御覺え哉。」と憤つてゐられる弘徽殿の一語によつて、「御方々の御宿直なども絶えて爲給はず。唯涙にひぢて明かし暮らさせ給へば見奉る人さへ露けき秋なり。」の句も引き立ち、悲嘆追慕の情に暮れてゐられる當時の帝の御有様もよく窺はれるのである。

元來源氏物語全篇の文章には、先づ初めに、さつとその大概を述べ、讀者をして偖てこれはどうなるのか知らといふ、漠然とした疑問の中に落し入れて置きながら、その次に詳細なる叙述をなし、記事を進ませて行くといふ書き振りになつてゐる。是れ讀むものが始終心を引かれ強き印象を受くる所以である。紫式部の凡ならざる筆致の一端とも言ふべきであらう。「見奉る人さへ露けき秋なり。」の一句は古來名句として擬古文家の常に用ふるところである。

野分立ちて俄に肌寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靭負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしき程に出だし立てさせ給ひて、やかて眺め在します。斯うやうの折は御遊などせさせ給ひしに、心異なる物の音を搔き鳴らし、果敢なく聞え出づる言の葉も人よりは異なりし、けはひ容貌の、おもかげにつと添ひて思さるるも、「闇の現」にはなほ劣りける。

補説 野には野分の風が強う吹いて、肌も俄にぞつと冷氣を感ずる夕暮頃、帝は平常より特に強く故人のことを偲びなさつたので、靭負の女婦といふ女官を御使として故御息所の家を訪ふなき

○眺め――深く思ひ込む事があつて、茫然と見てゐること。悵望。
○御遊――管絃の御遊びないふ。
○心異なる――聞いてゐても、心持が普通とは違ふやうなよいこと。
○物の音――樂器の音である。
○果敢なく――一寸言ふやうな何でもない言葉。
○聞え――申す。
○けはひ――そぶり、樣子。
○おもかげのつと――「おもかげ」は人の姿を心の中に思ひ浮べる幻像をいふ。帝の御身に故御息所の幻像がづうと始終つきまとふてゐること。
○闇の現――現（ウツツ）は夢に對する語で、實際なるをいふ。闇い場所で人に逢つたのは姿が見えないからつまらないものであるが、それを「闇の現」といつたのである。

れた。恰度その時は夕暮方出る月が面白く照つてゐる頃であつたので、命婦が出て行
見送りながら、帝はその儘、部屋へも御入りにならないで、唯茫然と何を見るともなく物思
に沈んで眺めてゐられた。嘗てはこのやうな面白い夕月夜の晩に、御息所を呼召しになつて管
絃の遊びを催されたこともあつたが、その時は故人が搔きならす樂器の音は、いつもいてゐても一
種格別なゆかしい音を立てなさつた。又何といふこともなく一寸言ひなさる言葉も普通の女
官共よりは、異つてゐて趣のあつたことや、その平素の素振、容姿などが、ありく〳〵と帝の眼
前に思ひ浮ばれて、その幻は始終帝の身邊を去ることがない。かうしたやうなことを思
ひなさるについても、「ぬばたまの闇の現はさだかなる夢にいくらも增さらざり
今集にある歌の、所謂「闇の現」といふものよりも、なほ一層はかないのは、この
であると思召された。

補 ○靫負の命婦――靫負とは衛門府の武官の別名である。衛門府の官人は行幸の時、供奉する官で常に靫（矢を入れる具）を負ひ弓を持つてゐることからしてかく名付く。ユゲヒとよむが、これはユゲオヒの約。「命婦」とは後宮女官の稱で、大寶令の制によると五位以上を帶せる婦人を「內命婦」といひ、五位以上の官人の妻を「外命婦」と云ふ。共に朝參することがあるから事務省にてその考課を勘するのである。又王孫の命婦は「王命婦」といひ、內外同稱である。物語文に「わかんどをりの命婦」と記してあるのはこれである。中古以後となつては、中臈の女房を命婦といふ。多くの場合は父又は夫君の官名につけて呼ぶのである。こゝの場合も外命婦の稱

○彼處にまかんで――宮中から退出して、御息所の里へ着くのである。
○人一人のかしづき――媽御息所一人を大切にするために。
○闇に――後撰集雜部にある兼輔の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬる哉」の歌の心で書いてゐる。
○八重葎にぞ――「とふ

であつて、父か兄が衛門府に仕へてゐたところからして、斯く靫負の命婦と言つたものであらう。細流抄に「當時も禁中に侍ふ女房の中に、內侍より次に御下とて侍ふ其中に命婦女藏人とてある也。」と出てゐる。○闇の現――古今集戀歌第三にある「ぬば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり。」とある歌の意によつて書いたものである。歌の意は闇夜にひそかに相逢ふた現實の樂しさは、これまで思ひ寢に見た確かな夢の果敢なさに比べても何ほども勝らなかつたわいといふのである。

評 「野分立ちて俄に肌寒き夕暮の程云々」「夕月夜のをかしき程に出だし立てさせ給ひてやがて眺め在します。」といふやうに、幽寂な自然の景を引きだしてゐるところ妙趣の限りないを覺ゆる。

命婦彼處にまかで着きて、門引き入るるよりけはひあはれなり。寡住なれど人一人の御かしづきに、とかく繕ひ立てて、目安き程にて過し給へるを「闇」に暮れて伏し沈み給へる程に、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ「八重葎にも障らず」さし入りたる。南面に下ろして、母君頓にえ物も宣はず、「今まで留まり侍るがいと憂きを斯る御使の蓬生の露分け入り給ふにつけても、いと恥かしうなむ」とて、實にえ堪ふ

人もなき宿なれど来る春は八重葎にもまばらざりけり」といふ新勅撰集の貫之の歌によつて書かれてゐる。
○南面――家の玄關口をいふ。昔時の家は大抵南向に建てられたからである。
○下ろして――母君が命婦を玄關口に落ろし奉つたのである。
○蓬生――ヨモギフとよむ、蓬の生えてゐるところ。芝生、淺茅生の如し。
○内侍のすけ――内侍司の中の次官である。この度命婦が里へ訪ひ尋れた以前に、内侍のすけがここへ一度御使に來たことがあつた。そのことをいふ。
○物思ひ知らぬ――物の情趣の理解せられないやうな自分にさへもの憂。命婦卑下の詞である。

まじく泣い給ふ。「參りてはいとど心苦しう、心肝も盡くるやうになむ」と、内侍のすけの奏し給ひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいと悲び難う侍りけれ、」とて、稍躊躇ひて仰言傳へ聞ゆ。

評 命婦が御息所の里に至り着いて、門から車で乘り入ると、打見たるあたりの情景は涙を哀なものである。母北の方は寡婦で暮らしてゐられるが、嘗ては宮仕へしてゐた我が娘で御息所の世間に對する外聞のために、娘を大切になさる眞心から、里の住居もいろ〳〵と取繕ひなされ、見苦しい所のないやうにして暮らしてゐられたが、御息所が亡くなられてからは子を思ふ親の涙に何時と分たず沈み勝ちにしてゐらつしやつた。その間に庭の草はすん〳〵と延びて行き、今日の野分で、あたりが一層甚だしく荒れ亂れてゐるやうに思はれる。この荒れた住居には誰も訪ねる人もあるまい。然し月の光りだけはあたりに茂つてゐる八重葎にも何の差支へることなく、家にさし込んでゐる。母北の方は命婦の車を玄關口に下ろしなさつて、さて對面なさつたが、母君はお使の命婦を見るにつき感極つて暫しは何事も仰せられることが出來なかつた。やや心が落着いてから「娘の御息所が亡くなつてから後、年老いた自分が、斯うしてこの世に生き殘つてゐるのは甚だ心苦しいことであります。それに今又、恐れ多くも帝の御使が、かうした草の生え茂つて荒れ果てた家へ、草葉の露を押分けて御訪ね下さるについても甚だ、この老の身の程が恥しうございます。」と言つて如何にも堪へられぬ程悲しんで泣かれる。そこでお使の命婦が言ふには「先日内侍のすけがこの邸へ帝のお使へとして參られたときも、内裏に歸へられてから帝に申されるには、「御息所の御里邸へ參りますと、淋しくなさけないことは大變氣の毒に思はれて、心も肝も消え入るやうであります。」と申しとげられたが、只今かうして暮方に私(命婦)がここへ參りまして、あたりの樣子を御窺ひいたしますと、何にも物の情趣を辨へ知らぬ私共の心地でも、内侍のすけの仰こられた通りに哀れさが泌み〳〵と感ぜられて甚だ心苦しう耐へられぬ氣がいたします。」と言ひ、暫しあつてから、帝の仰を申しては母北の方も、悲しみを更に新しく感ぜられはしないかと心に恐れながら、それでも申さぬわけにも行かぬので遂に帝の仰言をお傳ひ申した。

通 ○内侍のすけ――後宮十二司の一に、内侍司といふのがあり、天皇に供奉し、奏請宣傳、及び禁中の禮式を掌り、女孺を檢することなどを司る。その職員に、尚侍二人、典侍四人、掌侍四人、女孺百人とある。禁秘抄によると、公卿侍臣の女が任ぜられ、天皇の御乳母なる人は、諸大夫の女にても典侍に任ぜられた。單にすけともいひ、ここの「内侍のすけ」もそれをいふのである。又音讀してテンジともいふ。陪膳に侍して禁色を許さる。その職掌は大賣令には、尚侍と同じけれどもただ奏請傳宣するを得ないとあるが、尚侍藤原藥子枕席に侍してよりは、常に枕席に侍し尚侍の職掌はすつかり、典侍のつとめることになつた。典侍は多くの場合父の官名を附す、大納言典侍、宰相典侍の如きそれである。

評 御息所の生母にあたる母北の方が、八重葎茂る中に侘びしい暮らしをしながら、亡くなつた

○暫しは云々――これから帝の仰言を命婦が傳へるのである。
○たどられ――あれやこれやと思はれるのが、皆夢のやうに思はれること。
○さむべき方なく――御息所の死が夢のやうにつてゐたがそれは事實だからさめるやうなことはない。
○忍びては云々――こつそりと内裏に參上なさらぬか。
○霧けき中に――皆の悲しんでゐる草深き里に。
○疾く――早く。
○はかゞしう――しつかりと。
○咽せかへらせ――涙にむせびながら。
○且つは――一方では、他の方では。
○人も心弱く見奉る――

娘のことを思ひ、折に觸れ事に逢ふては老の涙に咽んでゐられる。

「暫しは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひ鎭まるにしも、さむべき方なく堪へ難きは、如何にすべき業にかとも、問ひ合はすべき人だに無きを、忍びては參り給ひなむや。若宮のいと覺束なく露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるるを、疾く參り給へ」「など、はかゞしうも宣はせやらず、咽せかへらせ給ひつつ、且つは人も心弱く見奉るらむと、思し包まぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、承りも果てぬやうにてなむまか出侍りぬる、」とて御文奉る。「目も見え侍らぬに、斯く畏き仰言を光にてなむ」とて見給ふ。

評　命婦が帝の御言葉を傳へて言ふには、「帝は御息所が亡くなられた暫くの當時は、唯だ夢のやうに總べてが思はれてゐたが、だん〳〵と時日が經過するにつれ心も沈靜になると、御息所の死は決して夢ではなかつたどうすることも出來ぬ事實であつたから、この悲しみから醒めるといふやうなわけにもゆかず、いよ〳〵かうなると悲しさ一層增して、どうしてこの惱みから遁られるのかと、問ひ尋ねる人さへも無いので淋しく思ひ、母北の方こそ御息所にも同情を持ち、朕にも厚い同情を持つてゐるからこそ、御身こそ今は帝の話の相手となるべき人である。何卒こつそりと宮中に參內し給はぬか。又若宮のことも今頃

○暫しは云々――これから帝の仰言を命婦が傳へるのである。
○たどられ――あれやこれやと思はれるのが、皆夢のやうに思はれること。
○さむべき方なく――御息所の死が夢のやうにつてゐたがそれは事實だからさめるやうなことはない。
○忍びては云々――こつそりと内裏に參上なさらぬか。
○霧けき中に――皆の悲しんでゐる草深き里に。
○疾く――早く。
○はかゞしう――しつかりと。
○咽せかへらせ――涙にむせびながら。
○且つは――一方では、他の方では。
○人も心弱く見奉る――弱い人と見るであらう。
○包まぬ――包むは隱すこと。隱さないといふところも無く。
○心苦しさに――帝の樣子を見てゐると御氣毒で仕方がなかつた。
○承りも果てぬ――仰せをみんな承らないやうにして。
○御文奉る――御息所の母へ、命婦が勅書を奉るのである。
○目も見え侍らぬに――永き間の悲嘆の結果、目も見えないやうになつた。
○光にてなむ――今悉き帝の仰せ言を賜つたからこの光榮を光として勅書を拜見いたしませう。

は心配になつてならぬ。田舍の草繁き庵の中の忌服の日暮しは、さぞ心淋しく涙に暮れてゐるだらう。それ等も思ひ出すと心苦しいから、どうか母北の方は早く參內してくれ。」「などと帝は悲しさに胸が一杯となり、しかりとも仰せられず、涙に沈んでゐられるが、然し又一方ではさう心弱い所を人に見られてはならぬと、悲しさを無理に隱さうとしてゐられるやうな御樣子などを、妾ども(命婦)が見奉るのも、心苦しく氣毒な感じが、ひし〳〵といたしまたので、帝の仰せ言を全部承らぬ中にまあ、帝の御手許を下りました。」とかく命婦は言ひ傳へながら、勅書を母北の方に奉つた。母北の方は「私はながらくの間、娘の死を悲しみ、悲嘆の涙に暮れて目には何を見ても見えぬやうな有樣であつたが、今、帝から戴いたかたじけない仰言は非常な光榮であります。この尊い光をたよりといたして勅書を拜見いたしませう。」と仰せられて、悲しい思ひを抑へながら勅書を御覽になつた。

補　○暫しは夢かとのみ――このところ後撰集戀歌四の「かげろうのほのめきつれば夕暮の夢かとのみぞ身をたどりける」の歌の下の句によつて書かれたものであらう。
○問ひ合はすべき人だに無き――眞江入楚に「或抄に「思ふこと言はでただにややみぬべき我とひとしき人しなければ」のこころなり。自餘の女御更衣たちは桐壺更衣をそねみ給ひし人だちなれば語り合せ給はん人なき也。」とある。

評　「問ひ合はすべき人だに無きを、忍びては參り給ひなむや」との句は、この時の帝の心中がよくあらはれてゐる。「忍びて參り給ひなむや」とここに仰せられながら、心の進むにつれて「疾

く参り給へ」と躁急に仰せられる所、帝の心理の移り方がよく窺はれる。又「目も見ぬに、斯る畏き仰言を光にてなむとて見給ふ。」といふ母北の方の言葉には老母としての心持がよくあらはれてゐる。斯く個人的色彩の描寫がよく出されてゐるのは作者の技倆の勝れた所である。

「程經ば少しうち紛るる事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きはわりなき業になむ。幼き人も如何にと思ひ遣りつつ、諸共に育まぬ覺束なさを、今はなほ昔の形見に准へて物し給へ」など、細やかに書かせ給へり。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそ遣れ

とあれど、え見給ひ果てず。「命長さの、いと辛う思ひ給へ知らるるに「松の思はむ事だに恥しう」思ひ給へ侍れば、百敷に往きかひ侍らむ事は、況していと憚多くなむ。畏き仰言を度々承りながら、自らはえなむ思ひ給へ立つまじき。若宮は如何に思ほし知るにか、參り給はむ事をのみなむ思し急ぐめれば、道理に悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給へ。

ゆゆしき身に侍れば、斯くて在しますも忌

○うち紛るる――うちは接頭語で、紛るるは亂れて分らなくなること。心が他の事に移つて悲しみを忘るること。

○わりなき――あまりに甚だしい。

○諸共に育まぬ――帝が御息所の母と一緒に忘形見の若宮を育てないことをいふ。

○覺束なさを――この語の下に「察し給へ」の語を補ふて解くべきである。

○物し給へ――母北の方に内裏へ參上したまへの意。

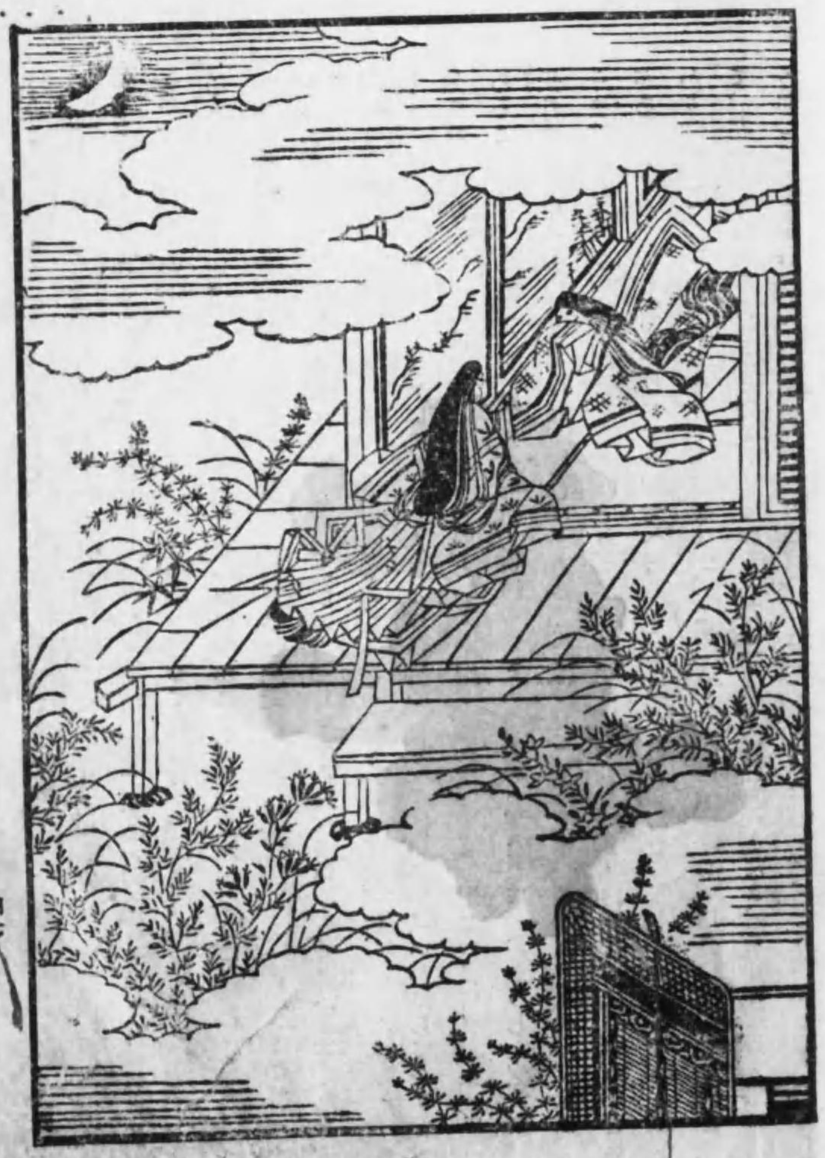
○宮城野――奥州萩の名所である宮城野に宮城の意をかけ、露吹き結ぶに帝の涙の頻りなるをいひ小萩がもとに若宮を譬へたので、歌の表の意は、「奥州宮城野の吹き荒れてゐる風の音を聞けば、小萩はどうなつたかと心配になる。」といふのだが裏の意は「宮中にゐる帝は野分の風に驚かされて涙を催されるが、この風の音のあら〳〵しいのについても、里にゐる若宮源氏君のことが心配になるの意。

○命長さの――莊子曰壽則多辱と。

○松の思はむこと――六帖にある「いかにしてありと知られじ高砂の松の思はん事も恥し」の歌によつて、母北の方の人に知られるのも恥しいといふのである。

○百敷の――大宮(宮中)の枕詞であつたのが、遂に宮中そのものの意となつたのである。

○況して云々――かうして年老いてながらへてゐることさへも恥しいのに



宮中に參内することは猶更恥しいとの母北の方の心。
○自らはえなむ云々――自分から參内することは思ひたたぬ。
○思し急ぐめれ――めれは見えありの約。……のやうだ。……のやうに見える。
○内々に思ひ――公に言ふべきではないが、私は内々に思つてゐる内情。
○ゆゆしき身――忌服にゐて、身けがれた、縁起のよくない身といふこと

れられることもあるだらうかと待つてゐたが、月日の過ぎるのにつれて、却つて故人のことが強く慕はれて、どうにも出來ないのは、甚だ困つたことである。年若い若宮は今日此頃は田舍の家にどうしてゐられるかと思ひやられてならぬ。朕も御前(母北の方)と共に宮中で一緒に若宮を育てられないのが不安でたまらない。どうか今となつては若宮を故御息所の形見とし[illegible]て宮中へ參内しなさい。」など詳細なことが勅書の中に書かれてある。なほ末の方に、

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそ遣れ

といふ御製まで書き添へられてあるが、母北の方は悲しいやら畏れ多いやらで[illegible]一杯になり十分に熟讀なさることも出來なかつた。暫くたつてから仰せられるには、「娘の[illegible]こしまつた後に、かうして徒らに永く世にゐるといふことは甚だ心苦しうございます。」「いかにして在りと知られじ高砂の松の思はむことも恥かし」といふ歌のやうに年老いては、この世にまだ生きてゐることさへ、他人に知られるのが恥かしいのでございますから、まして、かうした老人が畏れ多い宮中へ參内するやうなことは、恐れ多くてどうしても遠慮申さねばなりません。私は今まで屢々恐れ多い帝の仰言を承るのであるが、自分としてはとて[illegible]することがありません。併し若宮だけはどう御考へなさるのであるか、幼た[illegible]かり急ぎなさつてゐられるやうでありますが、このやうな草深く霜繁しい田舍の住居に厭きて、花やかな内裏に行かうと仰せられるのも、なる程道理のあることだと、若宮を見ても悲しう思つてゐますなどと、老の身の心の内に思つてゐ[illegible]私事のかず〳〵を、どうかよろしく奇に

御傳へ下さい。私がこのやうに忌服にあり、穢れた身であるから、ここに若宮のお住みになるのも大變謹しまねばならぬことであります。」など命婦にこま〳〵と言はれた。

補　○宮城野――奥州陸前國宮城郡原町の南、國分寺の北あたりを言つたもので、萩の名所であつた。無名抄に「さてこの爲仲(陸奥守橘爲仲をいふ)任はててのぼりけるとき。宮城野の萩をほりとりて、長櫃十二合に入れてもてのぼる。都にて盛なるべき比をはかりてけり。京へいりける日は、貴賤白河邊より二條大路に車をたてゆゆしき見ものなり。みゆきしのびてなりけるとぞ。」とある。前の頭注のところでは、この宮城野を宮中の意にかけたと解いたが、源注餘滴には契沖の說を引いて、「契云按赤染衞門家集に、のわきしたるあしたに、幼き人をいかにともいはぬ男にやる人に代りて「あらし吹く風はいかにと宮城野の小萩がうへを人のとへかし」此類歌によれば、宮城野はただ小萩をのたまはむ料にて宮中にかくるまでは有るまじきか」ともある。○松の思はむ事だに――六帖にある「いかにしてありと知られじ高砂の松の思はむ事も恥し」とある歌から取つた句であることは前に一言して置いたがこの歌の意は、老者の一生涯何の爲すこともなかつたものが詠んだ歌で、どうでもして自已の存在を人に知られないやうにしたいものである。年老いながら何等世の爲めに盡されなかつたのは恥しいことである。自分が幼いときからあるあの高砂の松は、自分の幼兒からの事をよく知つてゐるだらうが、今あの松に知られたら、松はどう思ふだらう。きつとくだらない奴と思ふだらう。ああ高砂の松に對しても顏を合はすのが恥しい。○諸共に育まぬ覺束なさを――本居宣長はこの句は「諸共に育

○大殿籠り――御寝になる。
○昏れ惑ふ――途方に暮れてゐる。
○面立たしき――面目のあがる。
○つれなき情――無情な命。
○生れし時より――故御息所は生れた幼少のときから思慮のある人であつた。
○故大納言――御息所の父ないふ。
○この人の宮仕――父が娘(御息所)を是非宮仕に出してくれ、さうして父の希望を果してくれとの意。
○口惜しう思ひ類るな――父が死んだやうなことがあつても、ガツカリと落膽などしてくれるな。
○はか〳〵しう――しつかりと、確固とした。
○後見思ふ人なき交らひ――御息所には、しつかりとしたうしろだてし世話する人がなくて、たよりなくも女官方と交際なさることは。
○なか〳〵なる――御息所にとつては却つてよくないこと。
○出だし立て――宮仕に出して仕へさせたこと。
○人氣無き――御息所は身分がいやしかつたからして、女官達からは、人とも思れないで、いやしめられたが、その苦しみをも我慢して宮仕しなさつたことないふ。
○横様なるやう――あまりに帝の寵愛が甚しかつた爲めに、人の妬みがつもつて死になさつたといふ。横死の意。

評釋　帝の勅書の「宮城野の露吹き云々」の歌といひ、母北の方の「松の思はむ事だに恥かしう」といつて歌が引き出されてゐるのを見ても當時の上流社會の交際には、和歌が必ずつきものであつたことが察せられる。

まぬが覺束なきを」の誤脫だと言つてゐるが、或はさうかも知れぬ。

（命婦）「宮は大殿籠りにけり。見奉りて詳しく御有樣も奏し侍らまほしきを、待ち在しますらむを、夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。「昏れ惑ふ心の闇も、堪へがたきかたはしをだに、晴るくばかりに、聞えまほしう侍るを、私にも心長閑にまかで給へ。年頃嬉しく面立たしき序にのみ、立寄り給ひしものを、斯る御消息にて見奉る、返す〳〵つれなき命にも侍る哉。生れし時より思ふ心ありし人にて、故大納言臨終となるまで、唯「この人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ、我亡くなりぬとて、口惜しう思ひ類るな」と、返す〳〵戒め置かれ侍りしかば、はか〳〵しう後見思ふ人なき交らひは、なか〳〵なるべき事と、思ひ給へながら、唯彼の遺言を違へじとばかりに、出だし立て侍りしを、身に餘るまでの御志の、萬に忝きに、人氣なき恥を隱しつつ、交らひ給ふめりつるを、人の嫉深く積り、安からぬ事多く成りて、横樣なるやうにて、遂に斯くなり侍りぬれば、却りては辛くなむ、畏き御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心の闇になむ」と、いひもやらず咽せかへり給ふ程に、夜も更けぬ。

評釋　命婦が云ふには「若宮には最早御寝でゐらせられるだらう。實は若宮にも對面し、御樣子をも拜見して、帝に若宮の御樣子を申し上げたくは存じますが、然し帝は私(命婦)の歸つて早く御返事申し上げるを、御待ち兼ねでゐらせられるだらうから、それを思つても氣毒でありますし、今晩は夜も隨分遲くなつたやうでありますからこれで御暇を申します。」と言つて急いでゐる。すると母北の方は「私は娘が死んでからは、心も闇になつて途方に暮れてゐますが、この心の片方なりとも晴れるほどに、思ふ存分心の中を申し上げたうございますから、どうか命婦には、かうした公の用事でなくして、ゆくりと心靜かに御出で下さい。嗚呼、さても思ひ返して見れば玆處數年は、何かと面目ある喜ばしい事のある時にばかり、帝の使が御出で下さいましたのに、今はかうした悲しい御便を戴いて、御目にかゝるとは、くれ〳〵もなさけない自分の生命であるかなあ。何となく死にたいやうな氣もいたします。亡くなつた娘、御息所は幼少の頃から思慮分別のある聰明な方であつたので、亡くなつた父大納言は、この娘を是非とも宮仕させたいと考へ、もう臨終といふ際になつても遺言をして曰ふには、どうか「この娘だけは

○わりなき心――道理にはづれた甚しい。
○いひもやらず――いひも終らぬ。

宮仕させたい希望だけは、どういふことがあつても爲し遂げてくれ、父が亡くなつたからと、つて、ガツカリと落膽して口惜しいことになつてはならぬぞ。」と繰返し〳〵言ひ置いて行かれましたから、宮仕はさせました。併し御息所の背後には、權勢のある堂々とした後見人がなからして、「宮仕することは却つてよくないとは思ひましたが、唯だ父であつた故大納言の遺言に違ふことのないやうにといふ一途の心で、内裏に出して宮仕をいたさせました。ところがにあまる程の帝の親切な御寵愛を蔵いたその畏れ多い御恩のためには、自分の身分卑しくして女官方からは並みの人とも思はれぬ程に恥かしめられても、それを我慢しながら、帝の愛の御心一筋をたよりとして、女官達と交際はしてゐられました。ところが極端な帝の愛を受けたため、他の女官達の嫉妬を受けることが多く、一方ならぬ苦しみも加つてきたので、遂に天寿を得て死ぬことも出來ず、人々の嫉妬で死ぬといふやうな横死をなされて世を終へなさつたから、これを思ふと帝の有難かつた御寵愛も、今は却つて恨めしう思はれます。まあこのやうに帝を恨み奉るといふのも、子のためにはすべての道理も分らぬ愚かな親の闇心といふものでありませう。」と言ひも終らない内に、又涙をはら〳〵と落してゐられる。いうとこころ

註　母北の方が御息所の幼少の時から聰明でゐらせられたことや、亡父のことを述べてゐるあたり、老母としての愚痴があり〳〵とあらはれてゐる。特に後段に至つては老母らしい愚痴が眞によく書かれてゐる。「年頃は面立たしきを……」といひ、「御志の萬に忝きに、人氣なき恥を隱しつゝ」と述べ、遂に「横様なるやうにて……却りて辛くなむ長き御志を思ひ……これもわりなき心の闇になむ。」といふあたり、老母の心理の移りかたが如何にもよく自然であり、眞をうがつてゐる。

○上も云々――これ命婦の言ふ詞であ。上は帝をさす。
○我が心ながら――眼が心からとはいへ。
○あながちに――無理に。
○人目驚くばかり――世人の目を驚かす程に御息所が寵愛なされたのも、緣の短かつた爲めであつた。
○人の契――人の宇は輕く置かれたもので、御息所をさしてゐる。
○聊か――少しも。
○人の心を曲げたる――世の人達の感情を害したやうなことはないだらう。
○唯此人故に――御息所の愛に心が引かれた爲め

「上も然なむ。「我が御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今は辛かりける人の契になむ。世に聊か人の心を曲げたる事はあらじと思ふを、唯此人故にて、數多さるまじき人の恨を負ひし果々は、斯う打棄てられて、心治めむ方無きに、いとど人わろく頑になり果つるも、前の世ゆかしうなむ。」と打反しつつ、御潮垂勝にのみ在します」と語りて盡きせず。泣く〳〵「夜いたう更けぬれば、今宵過さず、御返り奏せむ。」とて急ぎまゐる。月は入り方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々、催し顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴蟲の聲の限りを盡しても長き夜あかずふる涙かな

得も乘りやらず。

に。
○心治めむ――心の思ひ亂れてゐるのを靜めること。
○人惡く――體裁の惡いこと。
○頑に――無智で意地强いこと。偏屈なことをいふ。
○前の世ゆかしう――前世に於いてどういふ契があつたのかと、知りたいと思ふこと。ゆかしは知りたいと心が引かれること。
○御髮垂勝――漁夫の袖が潮に濡れて、雫のしたたるをいふ。それからして涙の落ちて袖のぬれるをいふ。
○催し顔――蟲の哀れに泣く聲が、涙を催させるやうである。
○鈴蟲の云々の歌――鈴蟲のは聲の枕詞である。なほ下のふるの緣語でもある。鈴蟲のやうに、自分は悲しさに聲の限りをつくして、秋の長夜を泣き通しても、まだ足らないで、何時までも雨のやうに涙が落ちるわい。
○得も乘りやらず――命婦が母北の方の家に名殘が惜まれて、直に車に乘られないのである。
○いとどしくの歌――いとどしくは甚だの意、蟲の音繁きは自分の泣かれることの甚だしい哀れさをあらはし、淺茅生はちがやのまばらに生えてゐるところで、荒れたるこの宿をあらはし。露おき添ふるは涙を流し添へること。雲の上人は勅使である命婦をさしてゐる。つまり哀れを感じられて、悲しく泣かされるこの宿に來ては、勅使である命婦も、涙を催されます。
○かごと――小言。

桐壺

（帝）いとどしく蟲の音繁き淺茅生に露置き添ふる雲の上人
かごとも聞えつべくなむ」と云はせ給ふ。

講 そこで命婦が言ふには、「帝も母北の方が悲しんでゐられるやうな御心でゐられます。心からとはいへ、あのやうに無理にまでも、御息所を愛し、その爲めに他の人達をして怨かせ、遂に嫉妬せしめるまでに思ひ込んだのも、彼女との緣が短かい前世であつたのであつた。今となつて考ると、この契りは樂しいものではなくして、却つて心苦しい契りであつた。聲は元來少しも世人の感情を害することなどやつた思ひはないだらうと思つてゐるが、唯だ一つ、この御息所が可愛かつた爲めに、その愛に引かれ、怨まれるべきでない多くの人々にまでも悲されるやうになり、その末にはかうして只管愛を注いでゐた御息所には死に分れてしまつたが、かゝる人心は取り亂されて靜かにもゐられず。世間體も惡く、偏屈なものとなつてしまつたが、かゝした運命にならねばならぬとは、さても〳〵自分の前世の宿業は一體どうであつたのかと知りたい氣持がする。」と繰返し〳〵仰せられて、涙に袖をぬらされてゐらせられます。」と申しながら、互に語る言葉は盡きなかつたが、命婦は泣く〳〵申すには、「もう隨分夜も更けました。夜も明け渡らない先きに、帝に御返事を申し上げませう。帝も私命婦の歸るのを待つてゐられますから、と言ひ急いで內裏に歸つた。折しも月は西に傾いて今にも沈みさうになり、空は淸く澄み渡つてゐる所に、風が涼しく吹き、草叢に鳴く蟲の聲は何となく悲しげに聞きなされ、人をして哀を催しさうであるのも、此の際命婦にとつては、この宿を立ち離れ難いものであつた。命婦はいよ〳〵里家を立ち去るに臨んで、

鈴蟲の聲の限りを盡しても長き夜あかずふる涙かな

と一首お詠みになり、よくも車に乘られず、ためらつてゐられると、見送りに出られた母北の方は、命婦の車に近附いて、

いとどしく蟲の音繁き淺茅生に露置き添ふる雲の上人

の一首を返歌なされ、斯く親切に片田舍の庵を御尋ね下さるのは嬉しくはございますが、又かうして御出で下されることによつて、忘れ去らうとしてゐる娘のことが、今更に思ひ出され、悲しを增すので寧ろ小言を申し上げたい氣もいたします。」と老の愚痴も言ひなされる。

講 ○人の心を曲げたる云々――帝も御息所故にいろ〳〵と心を惱まされたのであるが、この御息所のモデルとしては、眞江入楚に曰く「箋云九條右丞相師輔公の息女七人のうち嫡女は村上中宮安子、第二の女重明親王北の方の中宮へ參り給ふ。ついでかいまみあり、中宮なかだちとして宮中にめし入て密通の事有て連續せしむ。其後中宮ならびに重明親王うせ給ひて後、終に召して尙侍と申して貞觀殿にさぶらひ其寵の甚だし事よるひるをわかず、世人なげきていはく聖主の當代において萬民これを稱す。然るに登子の尙侍朝に入つて萬機是が爲めに廢すと云々此末に皆此義を含んでこれを書く。」とある。○いとどしく蟲の音云々の歌――後撰秋中に、母の服にて里に侍りけるに先帝（延喜の帝）の御文給へりける御返事に「五月雨にぬれにし袖にい

とどしく露おきそふる秋のわびしさ」とある。作者は近江更衣（源周子右大辨唱の女、時明並に内親王三人を生む。）となつてゐるが、この歌などに由つたものかと思はれる。

評　「夜いたう更けぬれば今宵過さず云々」と美しい自然の景を點綴したところ何とも言はれぬ情趣がある。又前段には「夜更け侍りぬべし」といひ、「夜も更けぬ」と續け、この段となつては「夜いたう更けぬれば」と出し「今宵過さず」と受けてゐるところ、時の流れの漸次經過するところを微細に描寫してゐる作者の細心な注意は推稱する價値がある。

をかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、唯彼の御形見にとて、斯る用もやと殘し置き給へりける、御裝束一領、御上髪の調度めく物添へ給ふ。若き人々悲しき事は更にもいはず、内わたりを朝夕に慣らひて、いとさうぐしく、上の御有樣など思ひ出で聞ゆれば、疾く參り給はむ事を唆し聞ゆれど、斯く忌々しき身の、添ひ奉らむも、いと人聞憂かるべし。又見奉らで暫しもあらむは、いと後めたう思ひ聞え給ひて、すがすがともえ參らせ奉り給はぬなりけり。

釋　かうして邊鄙な片田舎にまで、命婦が勅書を持つて御訪ね下されたのであるから、何かその御禮として贈物をささげなければならぬのでありますが、恰度只今は斯うした喪服の悲しい折

○をかしき――おもむきのある。
○斯る用もや――このやうな入用なときもあるかと。
○御裝束――着物。衣服。
○御髪上――髪上とは髪を結ぶことである。調度めく物とは、髪上のときに用ひる釵子とか、櫛のやうなものといふ意で、往昔は、平日は女は髪を長く垂れてゐたものであるが、儀式などの場合には、髪を結んだものである。
○若き人々――若宮即ち源氏の君につき從つて、この里家に來てゐる若い女房どもをいふ。
○忌しき事――御息所に死に別れた悲しさに、片田舎であるこの家の淋しさとを含む。
○内わたり――内裏かさす。
○さうぐし――淋しいこと。寂莫。
○思ひ出で聞ゆ――女房ども、若宮の家にゐながら、帝のことなどを、うはさ申してゐるのである。
○疾く參り給はむ事を――里の女房どもが、宮中をなつかしく思ひ、母北の方を誘ひすすめて、早く參内いたしませうといふのである。
○斯く忌々しき身――母北の方の仰せられるには斯く老衰してしまひ、喪にゐるけがらはしい身はといふ意。
○人聞憂かる――世人が

柄でありますから、格別に趣のある贈物もいたされません。ただこのやうな機會に必要なことを加へて、故人の御形見として御覽下さいと命婦に贈りなされた。命婦は遂に内裏に歸つてしまつた。さて母北の方の家にゐて、若宮に仕へてゐる年若い女房どもは故御息所に死に分れた悲しみはさることとして、今又かうした淋しい片田舎に侘住居をしてゐなければならぬので、嘗ては華やかであつた内裏に住み慣れたことからして、寂寞の感に耐へられず。互に帝の御樣子などを思ひだしては語り合つてゐられる。このやうな有樣であつたからして、母北の方に早く參内あそばしてはどうだと勸めるのであるが、母北の方では、このやうに厭ふべき不吉な老婆の身で、若宮に附き添ふて參内することは甚だ世間體の惡いことである。又それならば母北の方だけはこの家に殘つて、若宮だけを參内させてはどうかといふと、若宮が居なくては母北の方は大變心許なく不安に思はれて仕方がないと仰せられるので、女房達が參内のことを仰せられても若宮を參内させなさることはなかつた。

補　帝が母北の方の家へ遣しなさつた勅書に「程經ば少し打紛るゝ事もやと待ち過す月日に添へて、いと忍び難きはわりなき業になむ。幼き人は如何にと思ひ遣りつゝ、諸共に育まぬ覺束なさを、今はなほ昔の形見になぞらへて物し給へ」などと書いてあつたことは前段にも述べたところであるが、この勅書の趣旨だけで考へると、帝は喪服に籠つてゐられる若宮に、强いて參内せよと仰せられるのであるから、無法なやり方の如く思はれるが、之れは決して無法なので

聞いても、體裁がわるい。
○見奉らで――若宮を宮中に參内させ、自分だけ里に殘つてゐること。
○後めたう――不安であり、氣づかはしい。
○すが〳〵ともし――ズン〳〵事を運びなすたいふ

○壺前栽――壺は小庭。前栽は前庭に草木を栽えたるをいふ。
○御覽ずるやうにて――帝は前庭の秋草を御覽になつてゐるやうであるが、その實御心の中では命婦の歸りを御待ちになり、又故御息所の事を思つてゐられるのである。

ない。當時の忌服の定めでは、父母の喪には服一年暇五十日であつた。それで若宮である源氏の君も五十日間だけ、亡母の里家に退いてゐられるならばよいので、あとは内裏に參内なつて喪に服してゐられてもよいのである。ところがこの物語の前後の書き工合から推察すると、更衣(御息所)の死去なされたのは五六月の頃であつた。又命婦が母北の方の里に勅使として出立なさつたのは、七月の末か八月の上旬である。それでその間は既に五十日以上經過してゐたものと思はれる。故に暇五十日の終つた後である故に、若宮は宮中に參内してもよい時であつたから、帝がお召しになつたのである。又若宮に仕へてゐる女房共も參内しようと母北の方に進めたのもこの爲めである故に、帝や女房なども若宮の參内をすすめるのは決して無理なことでない。

評 帝を始め、若宮の女房達に至るまで一途に若宮の參内を勸めたが、老いたる母北の方だけは亡き娘のことが慕はれ、たゞその忘形見である若宮を手離すに忍びなかつたのである。

命婦はまだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。御前の壺前栽のいと面白き盛りなるを、御覽ずるやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人侍らはせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。此頃日暮御覽ずる長恨歌の御繪、亭子院の書かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和言の葉をも、唐の詩をも、唯其の筋をぞ枕言にせさせ給ふ。いと細やかに有樣を問はせ給ふ。哀れなりつる事忍びやかに奏す。

○心にくき限りの女房――奥ゆかしいところがあつて、何となく遠慮せられるやうな女房をいふ。
○長恨歌――唐の詩人白樂天が作るところの名詩である。唐の玄宗皇帝楊貴妃を寵し政を顧みず。遂に安祿山の大亂起る、帝蒙塵をなす、從ふ所の將士楊貴妃を以つて、この騷亂の一原因となし、帝に迫り遂に馬嵬の地にて貴妃を縊殺す。帝位を肅宗に讓つて都に還られたが、貴妃を思ふ心切で、貴妃の靈魂の在り所を求めらる。一道士蓬萊山に至つて貴妃に逢ふ。貴妃金釵鈿合を道士に與へなほ昔玄宗帝と誓ふ詞に、「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一。」と私語を告げる筋道を詩にしたものが長恨歌である。今桐壺の帝が、御息所との別れを、玄宗の貴妃を慕ふになぞらへて御覽に

解 命婦は内裏に歸つてきた。さて帝は御寢かと見ると意外にもまだ御寢にならずにゐられたので、私が使からの歸りを待ち、故御息所のことを考へて眠られずゐられたのかしらと、命婦はひたすら帝の御心をあはれなものと同情した。折りから御廊の前の小庭には秋草の萩、女郎花、尾花、刈萱、すみれなどが、大變面白く今が盛りの見物である景色を、帝は御覽になつてゐるやうであるが、その實は故御息所のことから、若宮の身の上を思ひ、さては今晩勅使として行つてゐる命婦の歸りを待つてゐられたのである。御前には侍床しい女房四五人を侍はせなさつてひつそりと長恨歌のことについて物語つてゐられた。この頃の帝は晝も夜も常に長恨歌の趣旨を繪にあらはしたものを御覽になつてゐられる。この御覽になつてゐられる繪は、宇多天皇が長恨歌のおもむきを畫家に描かせになり、伊勢や紀貫之の歌人に歌を詠ませて書かしめられたものである。帝はこれを御覽じあそばされながら、和歌でも漢詩でも總て、唯だこの長恨歌に關係のあるものばかりを、話題として口癖のやうに言つてゐられる。今心ゆかしい四五人の女房を相手として話してゐられるのも矢張りこのことどもである。偖て勅使として若宮の里に行つてゐた命婦が歸つて來たので、早速命婦を召して、彼の里の樣子などを御尋ねになる。命婦はこれに對へて、彼の田舍の侘び住居の哀れなものであつたことなどを、こつそりと聲を低くして、こま〳〵と申し上げた。

なつてゐるのである。
○御物語かさせ給ふなりけり――帝がこの長恨歌のことばかりを、話題として話してゐられるのである。
○亭子院――宇多天皇のことをいふ。
○その筋かぞ――長恨歌の事ばかりを言ひ草にするをいふ。
○枕言――あけくれ口癖のやうにして語る話題をいふ。

補 ○壺前栽――河海抄　「清涼殿東庭并同西庭朝綱井桐壺前栽被前栽延喜元年左右衛門栽草樹。」と、このあたりは拾遺集卷二十にある「中宮かくれ給ひての年の秋、御前の前栽に露の置きたるを、風の吹きなびかしけるを御覽じて、天暦御製「秋風になびく草葉の露よりもきえにし人を何にとへむ」とあるのに依つて想を構へたものではないかと思はれる。この中宮といふのは九條右大臣師輔公の御娘安子で、應和四年四月廿九日に隱れなさつたよし榮華物語卷一に出てゐる。古來、「壺前栽」は此の桐壺の卷の一名なりともいふ。○亭子院の書かせ給へる――亭子院は河海抄に「七條以南油小路以東一町」とある。又、伊勢集には「長恨歌の御屏風亭子院のかかせ給ひて所々よませ給ひける帝の御手にて、「紅葉はの色に見えわかでふる物はものおもふ秋の涙なりけり。」とある。又花鳥餘情には「長恨歌のうた紅葉はの色にわかれずの一首は御門の御手にてかかせ給へると伊勢集にのせ侍れば、亭子院の御製にて有べきにや、今一首玉たれのおくるもしらでねしものを（夢にも見しと思ひかけきや）といへるは伊勢がよめる也。貫之は見はべり未見出侍らずたづぬべし。長恨歌の繪は亭子院の御時かかせ給へるよしみえ侍れど、その繪とて末の代につたはりたることも侍らず。しかるを通憲法印法名信西唐書楊妃外傳など云書を勘て新しく繪に書しをこそ今世には是を長恨歌の繪とは申侍れ。」とある。この繪は平治元年十一月十五日寶蓮花院に施入されたとあるがその後の詳細なことは知るに由がない、このときの貫之の歌は不明。○伊勢、貫之――伊勢は藤原繼蔭の女、三十六歌仙の一人、宇多天皇の寵を得て行明親王を生む、歌集に伊勢歌集がある。貫之は紀貫之で、宇多、醍醐、朱雀に歷仕す。大内記、

○かしこきは置所――帝からの畏れ多い言葉を戴いたが、それは置き所がない程に有難く思つた。
○かき昏らす云々――心が途方に迷ふて亂れる。
○荒き風防ぎの歌――帝の「宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ。」の御製に對する返歌である。蔭は木蔭で、蔭を作るやうな大木で御息所を意味し、小萩は若宮をさす。即ち今まで大きな木が蔭を作つ

土佐守、木工權頭等の官に任ぜられた。古今集の撰者で土佐日記の著もある。○枕草――源氏物語奥入に「明け暮れのことぐさのよし也。」○女房――源氏官職故實秘抄に「女房とは限りある號なり。上臈小上臈中臈下臈是を女房といふ。其外の仕女は女房とは申さぬと也。女房のうち上臈小上臈は典侍掌侍の格にてよろしきなり。中臈は外命婦、下臈は女藏人也。」と注してゐる。

評 帝は御自身の境遇と比べられて、長恨歌のことを始終仰せられてゐるが、これを聞かせられてゐられる女房達の心の中は果してどうであつたらうか。

御返り御覽ずれば、「いともかしこきは置所も侍らず。斯る仰上につけても、かき昏らす亂り心地になむ。」

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞ靜心なき」

などやうに亂れがはしきを、心治めざりける程と、御覽じ許すべし。「いと斯うしも見えじ」と、思ししづむれど、更にえしのび敢へさせ給はず、御覽じ始めし年月の事さへ搔集め、萬に思し續けられて、「時の間も覺束なかりしを、斯くても月日は經にけり」と、あさましう思召さる。

評 命婦が、御息所の母北の方からの御返書を捧げ奉ると、帝はこれを披いて御覽になる、その

てゐてくれたのでその下にゐた小萩は强風にも保護せられてゐたが、今や大木が枯れてしまつてからといふものは小萩も心配になつた。即ち若宮の世話をしてゐられた御息所の歿後は、小萩が身の上が不安となつてきた。

○亂りがはしき――帝に對しても、亂暴な言ひ方は。

○心治めざり――悲しみのため心の混亂してゐるためである。

○いと斯うしも――帝が斯くまで嘆き悲しむ樣子を他人に見られまいと思はれるのである。

○御覽じ始めし――帝の始めて御息所(更衣)と相知りなさつたのは何年何月であつたと、その當時のことを仰せられる。

○時の間も――御息所と分れてゐては、暫くの間もゐられなかつたのが、今や死に別れても、かう

文には「斯くわざ〳〵田舍の方をお訪ね下され、忝い勅書さで歎いては、長れ多いことは何としてよいか分らない程であります。斯うした有難い仰言を戴くにつけても、今更のやうに故人のことが思ひ出されて、心も混亂されるばかりであります。

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞ靜心なき

などと、帝に對しても我儘勝手な言ひ分ではありますが、これも悲嘆に暮れ心も亂れ果ててゐるので、靜まらない心で詠んだものだと、御許し下さるでありませうとある。帝は故人の母よりの文を讀むにつき、再び故人のことが思ひ浮ばれて涙を催しなさる。「ああ、このやうな卑怯な有樣を人に見られるのは恥しいから、まあ見られないやう」にと押して悲しみを鎭みなさるが、どうしても我慢なさることが出來ない。御息所の生きゐたときは、あの樣なこともあつた、この樣なこともあつたと追憶をたどられ、遂には故人と始めて相知るやうになつた當初は何時の頃であつたかといふやうな事でも思ひ浮びなされ、萬事に思ひ亂れて「御息所とは暫しの間相見ずにゐるのでさへも心安からず思つてゐたのを、今や故人とは幽明界を異にし、長へに逢ひ見られぬやうになつても、かうしてよくも月日を暮らして行かれるものであるわい。」と、事の意外なのにあきれてゐられる。

補　○亂りがはしき――この語については古來、いろ〳〵と說をなすものがある。先づ參考のためにその重なるものを左に擧げることとしよう。細流抄には「兩義あり、第二三句御門の御うへを云に似たり、仍憚べきと云心也。又義、此程のみだり心に書きざまなどもみだりがはしき

と也。此義可然歟、草子地評して云也。」と、岷江入楚には「抄兩義あり、此歌更衣のなくなりたる事をいはむとてふせぎし陰のかくれしよりと云り、されども父帝おはしませば帝への返歌にははゞかるべき詞なり、さればみだりがはしきと云にや、又は此程のみだり心ちにかきさまもみだりがはしきとなり此義尙可然云々。」と、弄花抄に「兩義ありただ書さまの事にて可然歟、御らんじゆるすべしと云ふまで草子の地に評して云也。」と、源注餘滴には細流抄の說を引いて「此ほどのみだるるこゝろに書きざまもみだりがはしきとなり、ふみの書きざまのにあらじ記者の心に歌のつたなきとて卑下して書けるなるべし。」本居翁云「細流に兩義あり、第二三の句、御門の御うへをいふに似たり、仍て可レ憚といふ心也。又義、此ほどのみだり心地に書きざまなどもみだりがはしきと也。弄花にただ書さまの心にて可然か、今いふ湖月抄には此細流の後の義をのみ擧げたり、二義ともにひがごと也。みだりがはしとは、歌のよろしからざるよし也、などやうにと歌よりつゞきたるにて心得べし。もし書きざまのことならば、上にその書さまのことをいはでは、などやうにとはいふべくもあらず。さて此歌、實にみだりがはしきにはあらず。例の紫式部が卑下の心ばへにて、かく言ひなせるもの也。」とある。

「故大納言の遺言誤たず宮仕の本意深く物したりし喜びは、甲斐ある樣にとこそ思ひ渡りつれ。言ふ甲斐なしや」とうち宣はせて、いと哀に思し遣る。

「斯くても自ら若宮など生ひ出で給はゞ、然るべき序もありなむ。命長くと

して月日を送られるとは不思議なことであると思召しになるのである。

○深く物したりし喜びは――宮仕の本意を遂せしめて母北の方を喜ばさせるには。

○甲斐ある樣にと――御息所の地位を向上せしめ

て、目的を遂げられるようにと。
○然るべき序――母北の方の心も慰められるやうな、よい時機もくるだらう。
○念ぜ――こらへること。我慢するないふ。
○贈物――命婦が御息所から貰ふて來たものないふ。
○亡き人の――楊貴妃の事を云ふ。彼の方士は貴妃に逢ふて證の釵子を得て來たが、命婦は御息所に逢はれなかつたから殘念であるといふ。
○尋ね行く――彼の長恨歌にある方士の如き人もあるならばよい。たとひ言傳ばかりで直接その人に逢ふことが出來なくとも、御息所の魂の在處をそこと知られるからよい。
○幻術士――魔法幻術を行ふ人、方士、道士といふに同じ。

こそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。彼の贈物御覽ぜさす。「亡き人の住處たづね出でたりけむ、證の釵子ならましかば」と思ほすも、いと甲斐なし。

尋ね行く幻術士もがな傳にても魂の在處をそこと知るべく

釋 帝が言はれるには、「母北の方が故大納言の遺言をたがへることのないやうに、どうかして娘(御息所)に宮仕の目的を達せしめようと熱心に望んでゐたが、それを果させて喜ばしめるには、御息所の地位をして今一層立派なものとしてやらうと思つてゐたが、到頭故人となつてしまつたから、斯うなつてはどうとも仕方の無いことである。」と仰せられて、大變氣毒なことであつたと母北の方の身の上を思し召しになつてゐられる。然し又思ひ返して仰せられるには「可愛い娘の御息所は亡くなつたが、その忘形見の若宮が成人なさつた曉には、氣の慰められるやうなよい時機も來るだらう。氣を永くもつて長生するように我慢した方がよい。」などと仰せられる。又命婦が母北の方から貰つて來た故人の形見の品物を御覽になる。「彼の玄宗皇帝が方士をして、亡き楊貴妃の魂のあり場所を尋ねしめられた時に、蓬萊山で貴妃に逢つた方士はその證據として貰つて來た金釵、鈿合のやうに、この品々が故御息所自身から送つてくれたものであるならばよろしい。」とお考へになるけれども、それも仕樣のないことである。

尋ね行く幻術士もがな傳にても魂の在處をそこと知るべく

と、御製をあそばされた。

補 ○贈物――源注餘滴に「おくりものといふは、來たれる人のかへる時に物をやるにいへるよりおくりもの也。然るを今すべて人のもとへやるをもおくりものといへるはたがへる也。」とある。○證の釵子――玄宗皇帝が楊貴妃と死に分れてからは、方士をして楊貴妃の在處を求められた。そのとき方士は蓬萊山で貴妃に逢ふことを得。貴妃に逢つた證として、金釵(カンザシ)鈿合(ハサミ、或は青貝細工の箱ともいふ)の各々その半分を得て歸つたことを言ふ。尙この事に關しては白氏文集の長恨歌の序に詳し、曰く「長恨歌者楊貴妃也、既瘞於馬嵬矣。玄宗却復宮闕、思悼之至、令方士求致其魂魄、昇天入地求之不得、乃於蓬萊山仙宮、忽見姿貌、慘然流淚語使者曰、我本上界諸仙、先與玄宗有恩愛之故、謫居於下世、得爲夫妻、既死之後、恩愛已絶、今汝來求我、恩愛又生、不久却於人世、得爲配偶、以此爲長恨耳、使者曰、天子使我至此、既得相見、願得平生所翫之物、以明不謬、乃授鈿合一扇、金釵一股、與之曰、將此爲驗、使者曰、此常用之物也、不足爲信、曾與至尊平生有何密契、願得以聞、答曰、但七月七日長生殿夜半無人私語時、曾復記否、使者還因以鈿合金釵奏、玄宗笑曰、此世所有、豈得相怡、使者因以貴妃密契以聞、玄宗流淚慟絶、良久語使者曰、方不謬云々。」と。

評 「證の釵子ならましかば」と仰せられてゐるが、此の場合の帝の心中にはかうした氣分が滿ちてゐたことであらう。

○いみじき――立派な。
○筆限りあれば――筆で書いては、或程度までしか描くことの出來ぬかいふ。
○匂――色彩をいふ。
○太液の芙蓉、未央の柳――玄宗皇帝が亂後、京に歸り、死んだ楊貴妃のことを回想なさる所な、「歸來池苑皆依レ舊、太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉、對レ此如何不二淚垂一。」とある。これ楊貴妃の顏を蓮にたとへ、眉を柳に譬へたのである。太液は池の名、芙蓉は蓮の名、未央は唐朝の宮殿の名である。
○けに通ひたりし――楊貴妃の姿は柳や芙蓉にとくに似たところはあつただらうが。
○うるはし――綺麗なこと。立派。
○なつかしう――人を引きつけるやうな慕はしさ。

繪に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき繪師と雖ども、筆限ありければ、いと匂少し。太液の芙蓉、未央の柳も、けに通ひたりしかたちを、唐めいたる粧ひは、うるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを、思し出づるに、花鳥の色にも音にも、擬ふべき方そなき。朝夕の言種に、翼を比べ枝を交さむと契らせ給ひしに、かなはざりける命の程ぞ盡きせず恨めしき。

釋 繪に畫かれてゐる楊貴妃の容姿は、美しいことは美しいに違ひはないけれども、遂に繪たるを脫せられない。如何に立派な畫家でも、筆で描く場合には或る程度までしか眞をあらはすことが出來ないものであるから、楊貴妃の繪にはどうしても甚だ艶麗な色彩が少い。楊貴妃の容姿は太液池の芙蓉や、未央宮の柳に似通つた非常な美人であつたとは言ふけれども、その唐樣（支那風の服裝）に着飾つた樣子は、端麗といふ點に於いては優つてゐただらうが、我が朝の御息所は美人でゐらせられた上に人を引きつけるやうな慕しさがあり、可愛らしくいとしい所があつたのである。帝はこの美しかつた御息所のことを思ひ出しなさると、あらゆる美しい花の色にも、珍らしい鳥の音にも比べられない方であつたと追想なさる。嘗て帝は朝夕、御息所に仰せらるには「朕と汝とは彼の支那唐朝の玄宗皇帝が、楊貴妃と契らせ給ひしやうに、二人が天

○らうたげ――あいらしいこと。いとしい。
○言種――言ひ草。
○翼を比べ――長恨歌の「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一。」とある句によつて書いたものである。
○盡きせず恨めし――長恨歌の結句である「天長地久有レ時盡、此恨綿々無二絕期一。」の句の意である。
○上の御局――常の局の外に、御座所近くにある御部屋をいふ。
○遊――管絃の遊びをいふ。
○すさまじう――寂寥と

に上るならば嶮雄羽をつらねて飛ぶ比翼の鳥とならう。又、地にあるならば二樹が空中で、相連つて一樹となつてゐる連理の枝とならうとお契りになつたのに、遂にそれも叶はなかつた天命の程こそ果しもなく殘念である。

補 ○うるはし――源注餘滴に「俗に立派といへる心にあたれり。」と、又宣長云「すべてうるはしといふ言は、古書には美麗にはあらで俗言にきつとしてかたいといふ意、みだれず正しき意にいへり。ここは楊貴妃の唐めいたる粧ひはあまりきつとして、かたくたをやかにはあらざりけむといへるなり。○翼を比べ枝を交さむ――岷江入楚によると、天曆の御集に「いきての世死にての後の後の世も羽をかはせる鳥とならむ」御返し、女御芳子宣耀殿「かくちぎることの葉だにもかはらずば我もかはせる枝となりなむ。」とある。○けに通ひたりし――この所は廣道は「氣に通ひたりし」とよんでゐる。

評 長恨歌の句があまりに續出するので、煩いやうに考へられるところもあるが、この場合の帝の心をあらはすとしては、最もなことである。又當時の宮廷間には長恨歌などが常に言ひ種となつてゐたに違ひがない。

風の音蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しう上の御局にも參う上り給はず。月の面白きに、夜更くるまで遊をぞし給ふなる。「いとすさまじう物し、」と聞し召す。此頃の御氣色を見奉る、上人女

した様にいふ。殺風景なこと。
○上人――殿上人。
○傍痛し――傍から見てゐるのも心苦しいこと。俗にいふ笑止に思ふといふに同じ。
○押し立ち――他人に頓著なく敢て事を爲すないふ。負けぬ氣に他を顧みぬことないふ。
○角々しき――情のない荒々しき。
○物し――この場合は、「なさる」といふこと。
○事にもあらず――御息所の死去などは問題としないで音樂などを奏してゐられるのである。
○思ひ消ち――氣にしないこと。思はないこと。
○雲の上もの歌――雲の上に宮中の意を含め、暮れるにくらがる意、ずむに浸むと、住むの意、淺茅生の宿に御息所邸の意を含ませてある。即ち歌

房などは、「傍痛し」と聞きけり。いと押し立ち角々しき處物し給ふ御方にて、事にもあらず思し消ちて、もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

雲の上も涙に暮るる秋の月いかですむらむ淺茅生の宿

思し遣りつつ、燈火を挑げ盡して起き在します。

解 帝は風の吹く音や、鳴く蟲の聲についても、ただ物悲しう思つてゐられる。折柄弘徽殿は久しく上局にも參上なさつて帝の御機嫌を伺ふやうにもなさらず、帝の悲しまれてゐられるのに少しも同情せずに、却つて今宵の如く月光のゆかしく照つてゐる時は、深更になるまではなやかに管絃の樂を奏し樂しみを催してゐられる。帝は是れを御聞きになると「大變殺風景なことだ」と不愉快に御思召になる。悲嘆に沈んでゐられる今日此頃の帝の樣子を見奉つてゐる殿上人や女房どもは、この弘徽殿の態度を見て、はたから見る目も氣毒だと思つてゐた。元來この弘徽殿と申す方は、物事を押し切つてなさり、やさしさのない荒々しい御方で、御息所の逝去などは悲しいことがあるものかといふやうに、少しも氣にせないで、無遠慮に事をなさるのであらう。さて月も沈まうとするとき、帝は、

雲の上も涙に暮るる秋の月いかですむらむ淺茅の宿

と淺茅生の淋しい若宮の里邸を思ひやりながら、燈火を挑げなさつて深更でありながら未だ御寢にもならずにゐられた。

の意は禁中にて見てゐてさへ憂る秋の月は、淺茅生の宿である御息所の里家では、どうして澄むだらうか、さこそ涙に曇つてゐることだらうの意。
○燈火を挑げ――長恨歌にある「孤燈挑盡未成眠、遲々鐘鼓初長夜、耿々星河欲曙天。」の句によつて書いたもので、燈油のあるだけをかきたててともすこと。
○右近の衛府――丑の一刻即ち今の午前二時に右近衛の武官で當夜宿直であつた者が、各人の名前を高く名乘る習はしであつた。この名乘りを宿直奏といふ。これ主上の御心を安ずるためである。
○夜の御殿――清涼殿内にあつて、帝の御寢になるところ。
○睡む――マドロムとよむ、旦藩むの義。暫時おのづと眠ること。
○明くるも知らで――夜

補 ○傍痛し――宣長云、「傍痛の意にてかたはらよりみるが痛く思ふ意也。俗に笑止に思ふと言ふに當れり。片腹痛と書くはひがごと也。」と。○雲の上も涙に暮るる――拾遺集雜秋の部に、中宮の内におはしますける時月のあかき夜歌よみ侍りけるに菅滋爲政「九重の内だにあかき月影にあれたる宿をおもひやるかな。」とある。

評 弘徽殿のかど〳〵しい態度を叙したので對照の妙がよい。又「月も入りぬ。」の語は、此の場合千斤の重をなすものである。先人もいろ〳〵と褒めてゐるが、實に「月落長安半夜鐘。」の句に劣らぬ名句である。

右近の衛府の宿直奏の聲聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせ給ひても、睡ませ給ふこと難し。朝に起きさせ給ふとても、「明くるも知らで」とおぼし出づるにも、なほ朝政は怠らせ給ひぬべかんめり。物なども聞召さず、朝餉の氣色ばかり觸れさせ給ひて、大床子の御物などは、いと遙に思召したれば、陪膳に侍ふ限りは、心苦しき御氣色を見奉り歎く。總て近う侍ふ限りは、男女、いと「わりなき業哉」といひ合はせつつ歎く。「然るべき契こそは在しましけめ。そこらの人の謗り恨みをも、憚らせ給はず、この御事に觸れたる事をば、道理をも失はせ給ひ、今はた斯

の明けるのも知らないで、寝てゐたのであるにの意。
○朝政――政治。
○物なども――食物などなさす。
○朝餉――帝の朝御飯をいふ。朝餉の間で聞召されるのである。
○大床子の御物――大床子は主上の御膳を載せる机、御物は御食物をいふ。
○遙に思ひ――近づけなさらぬをいふ。
○陪膳――食事のとき、御給仕に伺候するのをいふ。
○そこら――あまたの。
○この事に飽れたる事をば――この御息所に關係したことばかりか。
○今はた――「はたは」者又」の意。
○世の中の事をも――世の中の政治をいふ。
○怠々しき――怠慢な。

く世の中の事をも思し棄てたるやうになり行くは、いと怠々しき業なり。」と、他の朝の例まで引き出でつつ私語き歎きけり。

釋 やがて右近の衛府が宿直奏をする聲が聞えてきたので、もう時間は丑の刻(午前二時)にもなつたのであらう。帝は斯うして深更に至るまでも、起きてゐることは、他人に見られても恥しいことであると御考へになり、遂に夜の御殿にお入りになつたが、それでも亡き御息所のことが偲ばれて少しも眠られることが出來ない。翌朝となつて起き出でなさるにも、かの伊勢の歌の「玉すだれあくるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひかけきや。」といふ歌の如く、御息所の生存中は、明くるをも知らないで、睦しくしてゐたものを、今は斯う淋しくなつてはと御思召しになるについても、彼の長恨歌にある「君王不二早朝一」とあるのは、思ふ人のまだ生存中であり、今の帝の場合は最早、思ふ人は亡い場合であるが、それでもやはり朝政は怠りなさるやうである。今此頃は召上りなさる食事も少く、極く簡單に略式の朝餉だけをほんの形ばかり召上るばかりで、正式に大床子について食事を召上ることなどは、うるさく思召しになるので、陪膳として伺候する女房なり殿上人達は、帝の心苦しく思召してゐられる哀れな樣子を御覽になつては、これはどうなることかと嘆いてゐる。總て帝の御傍近く侍ふてゐる人達は、男女共に「これは大變なことになつたものだ。」と語り合ひながら、互にやはり嘆いてゐる。彼等殿上に侍ふ人々は「帝が斯うしてゐられるのも、桐壺の更衣(御息所)とは前世から深い因緣のあつたことであらう。許多の人が謗つたり嫉妬したりするものがあつても、それ等には少しも遠慮なさらず、只だ更衣に關係したことになると、理も非も忘れてしまひなされて隨分無理なことまでなされた。さうして今日となり更衣の逝去後も又、その悲みの爲めに天下の政をもすつかり捨てたやうになさるのは、甚だよろしからぬ事である。」などといひ、果は唐の玄宗皇帝のことまでも引合にだして、こそ〳〵とささやき嘆いてゐる。

補 ○右近の衛府の宿直奏――源氏物語奥入に「亥一刻、左近衛夜行官人初奏レ時、終二于四刻一。丑一刻、右近衛宿申時、至二卯一刻一。内豎亥一刻奏二宿簡一」と、又、「或秘抄云、近衛の夜行として左右の近衛宮中をめぐりて警衛をいたす。亥の一刻よりはじまりて卯の一刻に終る也。丑の一刻より右近の宿直奏なれば夜のふけたるさまを書きあらはせり。」と。○夜の御殿――天皇の御寢所でヨンノオトドとよむ由、名目抄に見ゆ。清涼殿の北の間で、朝餉の東、二間の西にある。禁秘抄に「四方有二妻戸一南大妻戸一間也、帳同二清涼殿一、東疊御座敷也、御枕有二二階一、奉レ安二御劍神璽一也、持有二護藏芳御劍東南帳四角有二燈樓一。又帳西南北敷レ疊、爲二女房座一。」とある。○明くるも知らで――伊勢が長恨歌の趣を詠んだもので、伊勢集上に「玉すだれ明るも知らで寢しものを夢にも見じと思ひかけきや。」とある語を取つたもので、歌の意は、玉すだれは明るにかかる枕詞である。即ち楊貴妃の生存中は、夜の明けるのも知らないで、ともねしてゐたのに、今はかうして夢にさへも見ることが出來ないやうにならうとは思もよらなかつたとの意。長恨歌中の「芙蓉帳暖度二春宵一、春宵苦レ短日高起、」の句と、「悠々生死別經レ年、魂魄不二曾來

○おとなびけ――成人なさること。
○ゆゆしう――大切な。
○坊――皇太子をいふ。

入夢」の句によつて詠んだものである。○なほ朝政は怠らせ――長恨歌の「從此君王不早朝」の句のおもむきである。○朝餉――清涼殿中、臺盤所の北にある天皇の供御を備ふる所である。上は朝八時頃に御食事をなさるのを、朝餉の御膳といふ。朝餉の御膳は粥で大床子が飯である。昔粥といふのは今の飯のことである。今日の粥のことは往時は汁粥と言つた。朝餉の御膳は女房が陪膳するので、大床子の御膳は儀式ばかりで藏人が陪膳するのである。大床子の御膳といふのは、天皇正式の御膳で、清涼殿の身屋の大床子の上に著座しなさつて、御膳を聞し召すのである。○怠々しき――普通怠慢の意に解するが、宣長翁云「こはもとたみ〳〵しといひけむを、音便にてみをいといひなせる詞也。たみ〳〵しとは、舌たみて詞たみてなどいふたみにて、直からず、横さまにゆがめるやうの意也。萬葉に回轉など書きて、まがれる道を、たみたる道などよめり、註皆かなはず。」とある。この意によると、たい〳〵しきは、まがつたとか、惡いといふ意になる。

評 帝の悲みは極端に達し、夜も眠られず、食事も十分に取られず、ひたすら悲みに沈んでゐられると叙し、近侍の人から陪膳に仕る人に至るまで、唐朝の玄宗帝の故事までを引いて心配してゐると述べ、以つて御息所に關する記事は一段落となつたのである。

月日經て若宮參り給ひぬ。いとど此世の物ならず、清らにおよずけ給へれば、いとどゆゆしう思したり。あくる年の春、坊定まり給ふにも、いと引き越さまほしう思せど、御後見すべき人も無く、又世の承引くまじき事なれば、なか〳〵危く思し憚りて、色にも出ださせ給はずなりぬるを、「さばかり思したれど、限りこそありけれ」と、世の人も聞え、女御も御心落ち居給ひぬ。彼の御祖母北の方、慰む方無く思し沈みて、「在すらむ所にだに尋ね行かむ」と願ひ給ひし驗にや、終に亡せ給ひぬれば、又これを悲しみ思す事限り無し。御子六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。年頃馴れ睦び聞え給へるを、見奉り置く悲しびをなむ、返す〳〵のたまひける。

○引き越さまほしう――一の皇子を引越して若宮の皇太子に立たれるやうに思はれた。
○世の承引く――そのやうな無理なことは、世人が承知せない。
○なか〳〵――却つて。
○色にも出ださせ――顏色にも出されない。
○さばかり――あれほど若宮が寵愛なされたけれどもやはりそれには果があつた。皇太子になさるやうなことはなかつた。
○女御も、御心落ち居――弘徽殿も、皇太子の位が若宮に奪はれることのなかつたのを安心なさつたのである。
○彼の御祖母――若宮(光るの源氏の君)の御祖母で、更衣(御息所)の母である。
○在すらむ所――せめて御息所のゐる所へなりとも尋ねて行かうと仰せられるのである。

評 その後月日が經過して若宮がいよ〳〵參内なされた。帝は久し振りで御覽になると、實に人間界の人とは思はれない程に、美しく御成人なさつてゐらつしやるので、帝は以前より一層大切に思召しなさつた。翌年の春、一宮が皇太子に立ちあそばされた。この時にも若宮を一の皇子より引越えて皇太子にしたいとは思召しになつたけれども、若宮には、後見申すやうな立派な外戚もなく、又そのやうな無法なことがあつては、世人も承知すべきでないだらうと思召しになり、若宮は皇太子にしたいが、皇太子にすることは却つて若宮に對し危險であると遠慮なさつて、若宮を皇太子になしたいといふやうな素振りは、口に申されぬは勿論のことで、顏色に

○癒しみ思す――帝が悲しんでゐる。
○この度は――若宮は御息所の死のときは、まだ三歳で何の辨へもなかつたが、祖母の死なれたこの度は既に六歳でゐられるから、よくわけが分つて、戀ひ嘆きなさつたのである。
○年頃――祖母が臨終になつて、若宮とは數年來馴れ親んでゐたのを殘して行く心淋しさを仰せられるのである。
○今は内裏――若宮のこと。御祖母もなくなれたから内裏に行かれた。
○讀始――皇子七歳で御讀書始めなさるので、博士を召して玄宗注の孝經又は貞觀政要を讀み始めなさるのである。
○世に知らず――このやうな人が、世間に二人とゐられるとは思はれない程。
○母君無くてだに――母君御息所の在世の時は、ともかくもとして、母君の亡くなつた今日だけはせめて可愛がりなさい。
○らうたう――可愛ゆる。
○渡らせ――帝が。
○やがて――すぐに。
○えさし放ち――弘徽殿が若宮(源氏の君)を傷に置いて、始終愛しなさるのである。
○准へ給ふ――弘徽殿の腹に、二人の女の御子があつたが、とても源氏の君と比べものにならぬ。
○隱れ給はず――當時の風習では、女が男に對す

さへも出されなかつた。それで「帝はあれほどばかり故御息所を寵愛し、果てはその忘形見の若宮までも寵愛なさつてゐられたが、如何に愛してゐらつしやつても、皇太子にまでもなすといふまでにはならなかつた。」と、世間の人も言ひ、一の宮の母でゐらせられる弘徽殿の女御も、まあ、我が子が皇太子になられたので、一安心遊ばされた。彼の若宮の御祖母でゐられる方は、我が娘であつた御息所には先立たれ、可愛孫の若宮とは生き別れとなり、毎日〳〵心の慰められることもなく、幽鬱として「嗚呼、娘御息所のゐる彼の冥土へでも、せめて誘ねて行きたいものだ。」と顧つてゐられたその効驗であつたか、終に逝去してしまひなされた。さて帝はこれをお聞きになると悲嘆に暮れなさること限り無い。若宮は當時既に六歳になりなさつて、あるから、御息所の御逝去の場合とは違ひ、今度は死別の悲しみを辨へなさつて、ひ慕ひなされた。御祖母臨終のときは、數年來若宮馴れ親しみ申したのに、今斯うして若宮を此世に殘して死なねばならぬ悲しさを、繰返し〳〵仰せられてゐた。

補 ○坊さだまり給ふ――細流抄に「朱雀院の御事也。醍醐御時代には東宮文彦太子保明薨の後、其子慶賴王立坊、又早世其後朱雀院立坊也。」と注してゐる。

評 清らに成人あそばす若宮は、母にも死別れ、祖母にも死別れなさつた。この孤影寂然としてゐられるべき若宮が、今後宮中で花やかに榮えなさるので、この物語は益々面白くなつてくる。

今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、書始などせさせ給ひて、世に知らず敏う賢く在すれば、餘りに怖しきまで御覽ず。「今は誰も〳〵えぬ思み給はじ。母君無くてだに、らうたうし給へ。」とて、弘徽殿などにも、渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじき武士、讐敵なりとも、見てはうち笑まれぬべき樣のし給へれば、えさし放ち給はず。女御子達二所、この腹に在しませど、准ひ給ふべきだにぞ無かりける。御方々も隱れ給はず。今よりなまめかしう恥かしげに在すれば、いとをかしう打解けぬ翫び種に、誰も〳〵思ひ聞え給へり。わざとの御學問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、總て言ひ續けば、事々しううたてそなりぬべき、人の御樣なりける。

鑑 御祖母が亡くなられてからは、宮は始終宮中にばかりお住みあそばされた。七歳にもお成りになつたので書始の式をあげなさる。實に世に比べる方のない程に明敏でゐられたので、帝も若宮の明敏過ぎてゐられるのを、寧ろ怖しいとまで思召しになつた。さて帝は他の女官に仰せられるには「この若宮の愛らしいのには誰も憎むものはあるまい。故御息所の生存はともかくもとして、母君の無くなつた今日だけは、どうか可愛つてやり給へ。」と言はれて、弘徽殿などへ渡御の折は若宮を引き連れて出かけなさる。さうして早速女御の御部屋の御簾の中へまで

る時、几帳なり扇で顔を隠すのが常であつたのに、あまりに源氏の君は美しくゐられたので、女官どもはこの君と顔を見合せなさつたのである。

○なまめかしう——艶ぽいこと。

○いとなかしう——源氏の君は、いと面白いもてなぐさめものとされてゐられたが、餘り怜悧でゐられるので、氣樂がせられた。

○わざとの御學問——特別に習ひなさる學問。

○さるものにて——もとより言ふに及ばぬこと。

○雲居を驚かし——琴曲の妙は空にも響き渡るといふことと、雲居が宮中として、宮中の人々までも驚かしたとの意がある。

○琴々しうたてぞ——うたては物の餘りに重なり過ぎて惡くなるといふ。ここでは若宮の才能のすぐれてゐるのを一つづつあげるならば、却つて仰々しくなり人も信ぜないだらう。

○相人——人相を見る人。

○宇多の帝の御戒——補綱參照。

○鴻臚館——玄蕃寮をいふ。外人と接見する所。

○だちて——何々のやうになつて。

○めきての意。

○仕うまつる——お仕へ申した。

○右大辨——太政官に屬する官。左右に分れて、各々大中少がある。

○許多たび——幾度も幾度も。

連れて入られる。いかに剛情な武士や讎敵であつても、若宮の姿を見ては、自然と微笑を漏らさるを得ない程可愛しき方であつたから、弘徽殿の女御でさへも手離さないで、可愛つてゐられた。元來弘徽殿の御腹には女の御子樣が二人もゐらせられたが、源氏の君(若宮)は男子であるとはいへ、とてもこの源氏の宮には比べものにならぬ程であつた。嘗ては若宮の母を讎仇として嫉んでゐられた弘徽殿でさへも若宮を可愛つてゐられるのであるからして、ましてやその他の普通の女御更衣達は非常に若宮を可愛りなさる。普通ならば、女は几帳なり、扇で顔を隱して男には逢はぬ習慣であるのに、女官達は若宮があまりに美しい方であるので少しも、自分の顔を隱すといふやうなこともなく、素顔でお逢ひなされた。源氏の君はまだ[illegible]られるとはいへ、早や既に艶ぽくゐられるので、大人があつても恥かしいやうな[illegible]女官どもは皆よい遊び相手とされたが、若宮があまり怜悧であられたので打解けるわけにはいかなかつた。若宮が特別に御學びになる學問は言ふまでもなく上手でゐられたが、その他、普通に習つてゐられる琴や笛などの音樂の道でも、大空にも響き渡るといふ妙音をだしなさるので、内裏に住む大宮人も驚嘆した程である。斯うして若宮の總てに就いて優れてゐられることを數へ擧げて行けば、仰山らしいことになり、果は人も信用せないやうになるだらうと思はれる程に、優れた立派な方でありました。

補 ○七つになり給へば書始——紙江入楚に「皇子七歳御書始例、村上天皇承平二年三月廿一日、一條院寛和二年十二月八日、花御書始には御註孝經或は貞觀政要を讀始たまふなり。御註孝經は玄宗の註なり。」と。

○女御子たち二所——同書に註して曰く「源氏のあね宮たちなり。朱雀院御一腹なり。朱雀院御母弘徽殿女一宮同女二宮御腹別人前齋宮御母弘徽殿」とある。

評 故御息所をして死に至らしめる程に、猛烈な嫉妬をなされた弘徽殿の女御までも、その忘形見の若宮に對しては「えさし放ち給はず。」といふやうになつた。如何に若宮の美しき男子にてましませしかが、この一句によりて鮮やかに描かれてゐる。更に「御方々も隱れ給はず。」の句に至つては若宮の後年に於ける境遇がほのめかされてゐる。今や帝の身邊は長閑な春のやうにのんびりとした氣分が漂ひだした。

其頃高麗人の參れるが中に、かしこき相人ありけるを、聞召して、宮の中に召さむ事は、宇多の帝の御戒あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる、右大辨の子のやうに思はせて、率て奉る。相人驚きて許多たび傾き怪しぶ。「國の親となりて、帝王の上無き位に昇るべき相在します人の、其方にて見れば亂れ憂ふる事やあらむ。おほやけの固めとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、又其の相違ふべし。」といふ。

評 恰度其頃高麗から來朝して來た人が外人を接見する鴻臚館に居たが、その外人の中に非常に

○傾き怪しぶ――首を傾けて不思議に思ふこと。
○上無き位――この上無い最上の位をいふ。
○其方にて見れば――若宮が帝王になりなさる相がありなさるのかと、その方で見ると、少し亂れたところがあつて、帝王になられぬやうな心配なところもある。
○おほやけ――朝廷。
○かため――重鎮といふことで、國家を保護する藩屏となり、輔佐となること。
○天の下――世の中。國家。

優れた人相見が居るといふことを、帝がお聞きになり、この容姿才能共に絶世の若宮（源氏の君）の將來は一體どうであらうかと、この人相見に見せたく思召しになつた。けれどもこの高麗の人相見を宮中に召すといふことは、嘗て宇多帝の寛平遺誡に、輕卒に外人に見えてはならぬとあるから、ましてや若宮の人相を見せるといふやうな私事のために、外人を宮中に召すわけにはゆかない。それで非常にこつそりと、この若宮を鴻臚館の方へお遣しになつた。このときは皇子の資格でゐらせられると、やかましくなるので、當時若宮の後見人として御世話申してゐた右大辨の子でゐられるが如くにして、右大辨がこつそりと我が子を率ゐて行く體裁として高麗人の許に行かれた。相人の高麗人が若宮をチラリと一見するや否や、幾度も幾度も首を傾けて不思議がる。「一體この若宮は國家の父母ともいふべき帝王の立派な位に昇りなさる人相があるやうだが、さてそれならばその方で眞に帝王となりなさる人相でゐられるかと思へば、少し亂れたところがあつて心配すべき事があるかも知れない。それでは國家の重鎮、藩屏となつて天下の政治を補佐なさるやうな人物になりなさるのかと見ると、それも又、どうも全然と臣下となりなさるやうにも思はれない。」と言つてゐた。

補　○宇多の帝の御戒――寛平御遺誡に「外蕃之人必可召見者、在簾中見之、下可[illegible]耳。」とあるのをいふ。勿論この文の中には必可召見者とあるのだから絶對に外人を宮中に召見するを禁じたのではなくして、亂りに外人を宮中に召すことはならぬといふ意である。
○鴻臚館――岷江入楚に「日本の玄蕃寮なり。職員令曰鴻臚館は玄蕃寮にあり。河寮頭を鴻

○辨――右大辨。
○才――學才をいふ。
○博士――學者。
○言ひ交したる――右大辨が高麗の相人と語りあつたのをいふ。
○有り難き――有りにくいこと。
○あはれるな句――趣のある句。面白い句。句は絶句。
○贈り物――高麗より差

卿と號す。玄は遠也、蕃は藩也、遠藩より來朝の客に接する所なり。古來此所にて渤客に餞する詩句多し、漢朝の鴻臚寺又此義也。此館延暦遷都の始、東西の大宮に是をおかる。然るに弘仁に東の鴻臚館をもつて東寺として弘法大師に賜ひ、西の鴻臚寺館をもつて西寺として修因僧都に賜ひ、其後七條朱雀に鴻臚館を立て三韓の官舎をその中に置く、今のかつ塚の邊云々。」とある。

評　作者はここに高麗の相人を持ち來つて、この作の主人公である若宮（源氏の君）の前途を、おぼろげながら豫言せしめたのは頗る面白い。もしこのところで高麗の相人をださずに平凡に主人公の記事を進めたならば、實に單調になるであらうに、相人の豫言があるので讀者は一種の好奇に誘はれて讀ましめられる。作者の老筆のいたすところである。

辨もいと才かしこき博士にて、言ひ交したる事どもなむ、いと興ありける。文など作り交して、今日明日歸り去りなむとするに、斯く有り難き人に對面したる喜び、却りては悲しかるべき心ばへを、面白く作りたるに、御子もいとあはれなる句を作り給へるを、限り無う愛で奉りて、いみじき贈り物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はす。

譯　右大辨はなか〳〵の學才のある學者であつたからして、高麗の相人といろ〳〵と語り合つた

上げた贈り物、

○自ら事廣ごりて――若宮の人相を高麗人に見せられたことが世間に廣がつて。
○洩らせ――春宮の祖父右大臣等は口に出して露骨には言はないが。
○如何なるにか――どういふのであらうか。春宮をたてかへて若宮になさるのではないかと。
○大和相――帝が嘗て御心に、この子が若し親王にもなしたならば、人の疑ひなども出來て、却つて若宮のためにもよくないと考へなさつたことを高麗の相人の言つたのに對して、大和相といつたのである。
○親王にも――親王は春宮の缺けた際には候補者となるものであるから、若宮の帝位につきなさるのが不可であつたので、親王とはしなかつたのである。
○思し合せて――高麗人の言と、帝の考とを考へ合して。
○無品親王――幼少で親王宣下になつた場合には親王の位である品に叙せられぬのであるから、無品親王といふ。
○外戚の寄せ――外戚中で然るべき勢力ある人のあつてよりどころとなる

り、詩文を作つて交換した事には、非常に興味のある事があつた。高麗人の作つた詩には、「吾等は今日歸らうか、明日歸らうかといふ際に臨んで突然にも、斯くまで立派な、世にも稀なる若宮の如き人に對面するを得たのは喜ばしい。然し又、すぐ別れねばならぬかと思ふと却つて悲しい思がいたしますといふ趣を、面白く作つたので、若宮も甚だ面白く趣のある絶句をお作りになつた。すると高麗人は若宮の絶句を見て果てしなく喜び、立派な贈り物を奉つた。朝廷では又、高麗人に對して澤山の贈物があつた。

評 ここに右大辨の子を相した高麗人が朝廷から贈り物を戴くといふのは、一寸變に見えるけれども、これは高麗人が朝廷に對する公用に來たのである故、朝廷からの贈り物も、國家として使節に對する禮遇の贈り物であつたに違ひがない。然しその中には若宮の相を見た爲めの禮も含まれてゐたと思はれる。

自ら事廣ごりて、洩らさせ給はねど、春宮の祖父大臣など、「如何なる事にか」と思し疑ひてなむありける。帝かしこき御心に、大和相を仰せて、思し寄りにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせ給はざりけるを、「相人は實に賢かりけり、」と思し合はせて、「無品親王の外戚の寄せ無きにては、漂はさじ、わが御世も、いと定め無きを、唯人にておほやけの御後見をするなむ、行く先も頼もしげなる事、」と思し定めて、愈々道々の才を習はさせ給ふ。際殊に賢くて、唯人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば、世の疑ひ負ひ給ひぬべく物し給へば、宿曜の賢き道の人に、考へさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべく、思し掟てたり。

解 若宮が高麗の相人に就いて占ひなさつたといふことが、それとなく自然の間に世間に廣まつて來た。すると春宮の祖父である右大臣の如きは「この際特に春宮の人相を外人にまでついて占ひなさるのは、一體どういふのであらうか。或は今の春宮と立て代へようとなさるお考へではなからうか」と疑ひ思つてゐられた。元來、帝はこれ以前に於て、この若宮を親王にしようか、それともしない方がよいかと、いろ〳〵と帝親ら賢くお考へなさつたとき、帝は大和流の相見に見せられたが、若宮は親王に爲さない方がよいといふことであつて、遂に親王にもなさらないでゐられたのが、今度、鴻臚館に於て高麗の人相見に見せた所が、その言ふ所も帝の考へてゐられた所と合致するので「まことに彼の高麗の相人の言ふ所は悧好であつた。」と感服しなさつた。又「この若宮を親王とした所で、まだ幼少でゐられるからして親王の位がつかずして無品である。無品親王でゐて、その上に若宮には外戚の中に相當の權力ある後楯がないとなると實になさけないものである。そのやうな哀れなものとしてこの世に漂はせて置くには忍びない。朕が存世の間はどうなりとも世話はするだらうが、朕が生命も何時亡くなるとも分らない果敢い身

こと。
○わが御世――帝が自分の餘命のいくばくもないのをいふ。
○唯人――帝位に對して臣下をいふ。
○おほやけ――朝廷。
○道々の才――各種の學問。
○際殊に――學問の程度が、普通の人よりは勝つて。
○あたらし――惜しいこと。
○世の疑ひ――他を引越えて帝位に上るのではないかといふ世人の疑ひ。
○宿曜――星占の事である。廿八宿九曜の行度にて人の運命を判斷するのである。
○源氏に――源氏の姓を賜ふことに定めなされた。氏姓を賜るのは臣下となることである。
○思し捻て――考ひ定める。

であるから、若宮の身の上については、今日何とか取り計らなければならぬ。それには親王などとはせず、臣下として朝廷の輔佐せしめるやうにするならば、行末永く安全なことである。」とお考へになつた。さうして政治輔佐の任に當るときの用意として、いよ／＼その道／＼の學問を修業させられた。すると學問に對しては、特に飛び切つて賢明でおられたので、斯うした優れた才能のある方を、臣下とするのは、甚だ以つて惜しいことであるけれども、それならば と言つて親王にすれば、必ず世間からは野心があるのではないかといふ疑を受けるかも知れない方でおらつしやつたので、その後再び宿曜（星占）の道に勝れてゐる者に、若宮の將來を占はせなさつたが、これも矢張、高麗の相人が言つたと同じやうなことを言つたので、帝もいよ／＼若宮に源氏の姓を賜ひ、臣下することに考へ定められた。

補　○祖父大臣――朱雀院の御外祖、弘徽殿の父二條の太政大臣である。この時は右大臣であつた。○愈々道々の才――眤江入楚に「前にふみはじめの事、わざとの御學問など有り、仍ていよ／＼と書けり、弄天下を輔くべき人は、博學ならではあしかるべきよし見えたり。無學行レ政猶ニ無レ燭夜行ニ云々人不レ學不レ知レ道ともいへり、抄同河是を略之。私云西宮云凡奉公之輩可使備文書、

禮儀事　十一部
江都集禮　百廿六卷　江革禮　十卷　己上唐書
年中行事　外記廳例　唐書　內裏式　三卷　式曆儀式　十卷
辨官記　叙位例

除目例　外記等文書目錄

政理事　十部
群書治要　五十卷　貞觀政要　十卷　己上唐書但若臣之間事在此書也　諸司式
延喜式　五十卷　三代格　各三十卷今案式有百十二卷　天長格抄官奏報　申文例等　宣旨目錄
交替式　三卷但新式一卷　勘解由使勘判　新定法式
罪法事　三部
律　十二卷　令　十卷相兼政理方也　類聚檢非違使宣旨勅記事
諸雜事
類聚國史　二百卷

これ等は臣下の學ぶべき物どもなり。」とある。
○宿曜――眤江入楚に「宿曜道の事廿八宿九曜の行度をもちて運命を勘るなり。弘法大師入唐之時宿曜經六十卷渡レ之近代絶レ之。○源氏になし奉るべく――源氏官職故實祕抄に「源氏は王氏流れて源氏となるといへり。是皆皇子皇孫に源の姓を賜はる也。姓氏錄にいへる皇別とは是也、夫源の姓を賜はることは嵯峨天皇の御宇に始りて、仁明文德淸和陽成光孝宇多醍醐村上花山以下の御後の源氏あり、たとひ當代の天子の御子たりとも源の姓を賜りては、諸官の例に加はり其座席は位次にまかせ給へり。天子の御子は一世の源氏といひ、御孫は二世の源氏といふ也。餘亦是に準じて知るべし。」と、河海抄に「嵯峨天皇弘仁五年五月八日男女都（すべて）三十人賜レ姓是源

氏の始也。」とある。

評　當時皇子でまだ幼少でゐられる方が親王となるときは、親王の位がつかない慣例であつた。元來親王の位階には一品から四品まであるが、その中に入らぬのである。故に玆處に無品親王といつてゐる。無品である上に外戚のしつかりした所がなくては、若宮の將來も案じられるといふので、桐壺の帝は、遂に源氏の姓を賜ひて、輔佐の臣となされたのである。「源氏になし奉るべく思し掟てたり。」と書かれてゐる所は、單に源氏となさらうとの帝の御考へのみで、その實行されたか否かは不明であるが、源氏物語全篇に通じて、このやうに書いてゐながら、事實は實行されたことをあらはしたものが多い。この場合も實行されたのである。

年月に添へて、御息所の御事を思し忘るる折無し。「慰むや」と然るべき人々を參らせ給へど、「准ひに思さるるだに、いと難き世かな。」と疎ましうのみ、よろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌勝れ給へる聞え、高くおはします。母后世に無くかしづき聞え給ふを、上に侍ふ典侍は、先帝の御時の人にて、彼の宮にも親しう參り馴れたりければ、幼くおはしましし時より見奉り、今もほの見奉りて、「失せ給ひにし御息所の御容貌に似給へる人を、三代の宮仕に傳はりぬるに、得見奉りつけぬに、后の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせ給へりけれ。有り難き御かたち人になむ。」と奏しけるに、「實にや」と御心留まりて、懇に聞えさせ給ひけり。

○慰むや――亡き御息所を悼ふ悲しき心を慰むることが出來るか知らと、相當綺麗な女御更衣などを召されて御覽になるのである。
○准ひに思さるる――御息所の容姿に似通ふた人だと思はる人も、なかなか有りにくい世の中であるかな。
○疎ましうのみ――世の中のすべての事が厭になること。
○聞え――評判。噂。
○母后――四の宮の母で先帝の后。
○傳き――大切に養育す。
○彼の宮――母后の居られた御殿。
○幼く御座しましし時より――四の宮の幼少でゐられた時より、典侍は見奉つてゐた。
○今もほの――四の宮は今は成人してゐられるから、あまり人に對面なさらないが、それでも典侍は仄に見奉ることがある。
○三代の宮仕――光孝字多醍醐の三代といふ。
○いとようおぼえて――大變よく似給ひて。
○生え出で――成長なさる。
○御かたち人――容姿のよき人。即ち美人であることをいふ。
○實にや――眞實のことであるかなあ。

評　歲月はいくら經過しても、帝はやはり故御息所のことが思ひ出されて、どうしても忘れるわけには行かない。「この悲しい思ひは、どうしたら慰められるのだらう。」とお考へになり、相當美しい女御だとか更衣の方々をお召し寄せになつたが、亡き御息所のやうに美しくて、お氣に叶ふのは一人もゐられなかつたので、「さて〳〵世の中には、故御息所に比較する位のものでも、却々無いものであるわい。まして故御息所とそつくりの美しい方は、猶更無いことだ。」と、帝は世の中の事が何も彼も總べて厭になつてしまひなされた。ところが先帝の第四の姫宮で、御容姿の美しく、美人として評判の高い方がゐられる。その母君は先帝のお后でゐられたが、この母君が姫宮を非常に大切にして養育なされた。このとき帝にお仕へしてゐた古い典侍があつたが、それは先帝にもお仕へしてゐた者で、彼の母君の御殿にも親しく馴れて出入をしてゐたから、彼の四の宮は幼少でゐらせられる時からよく見知つて居た。又、四の姫宮の御成人あそばされた今日では、あまり他人に御對面をなさらないが、典侍だけは時々仄かに見奉るのである。この典侍が桐壺の帝に申すには「私は今まで三代の帝にお仕へ申してゐますが、この永い間に於いて、故御息所の御容姿に似通ふてゐられる方は、なか〳〵見奉ることも出來なかつたのに、只だ彼の先帝の后の宮の姫宮こそは、大變よく故御息所に似通ふて成人なさつてゐら

○聞えさせ――帝が四の宮に入内を勸められたのである。

○さがなくて――善からぬこと。不詳の字の意にあたる。
○あらはに――露骨の意である。
○果敢なくもてなされ――卑しめもてなされた先例があるから厭だ。
○ゆゆしう――いまゝしいこと。藤壺の心である。

れる。このやうな美しい方は世の中になか〳〵有りにくいもの[illegible]。」と申し上げたので、帝はこれをお聞きになり、「それは眞實のことか、」とお氣に召し[illegible]特を使として早速母后の許へ遣され、姫宮の入内なさるやうにと懇切なおたよりがあつた。

補 ○三代の宮仕――本居宣長は光孝宇多醍醐の三代と言つてゐる。或はさう[illegible]知れない。たゞここに「三代の宮仕」と漠然と書かれたのは、この物語の書きだしに、「いづれの御時にか云々」とあるのと同じ書き方である。弄花抄に「只久しく宮仕したると云心可然歟」とあるか、この說はよろしくないと思ふ。○后の宮の姫宮――是れ藤壺のことである。

評 帝の御心はまだ悶々の狀にある。故御息所のことも一段落を終へ、その御子である若宮も源氏の姓を賜りて一安心すべき時になつたが、作者はここに更に藤壺を持ち出して、事件の展開を計るのである。實に條理整然と筆が運ばれてゐる。

母后「あな怖しや。春宮の女御の、いとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはに果敢なくもてなされし例もゆゆしう」と思しつつみて、すが〳〵しうも思し立たざりける程に、后も亡せ給ひぬ。心細き樣にて御座しますに、「唯我が女御子達と、同じ列に思ひ聞えむ」と、いと懇に聞えさせ給ふ。侍ふ人々、御後見達、御兄の兵部卿の親王など「斯く心ぼそくておはしまさまむよりは、内裏住せさせ給ひて、御心も慰むべく」など思しなりて、參らせ奉り給へり。藤壺と聞ゆ。實に御容貌有樣、怪しきまでぞ覺え給へる。これは人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人も得貶しめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬ事無し。彼は人も許し聞えざりしに、御志の生憎なりしぞかし。思し紛るとは無けれど、自ら御心移ろひて、こよなく思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

○すが〳〵しう――はつきりと、きつぱりと。
○思し立つ――藤壺の入内を決心なさるをいふ。
○兵部卿の親王――兵部卿とは兵部省の長官をいふ。
○思しなりて――兵部卿親王其他の方々もその考になつて。
○參らせ――藤壺を入内せしめられたのである。
○藤壺――清涼殿の西北にあり、本名を飛香舍といふ。庭に藤が植ゑられてゐるところからして藤壺といふ。
○怪しきまで――不思議な程。
○覺え給へる――桐壺の更衣に似てゐられること。
○人の御際まさり――桐壺の更衣は氏族がさほどでもなかつたので人も族んだが、この藤壺は族姓、人品共に人の嫉みいふべ

評 帝から藤壺入内の勸めがあつたのをお聞きになつた母后は「あゝこわいことだ。あの春宮の御母女御は御性質の好くない方である。嘗て桐壺の更衣が、この春宮の女御から露骨に卑しめられなさつたといふ厭ふべき先例もある。」と、娘藤壺の入内を憚りなさつて、まだきつぱりと入内の決心も出來ない間に、母后は遂に崩ぜられてしまつた。四の宮即ち藤壺は母の逝去に逢ひ心細い樣子でゐらつしやつた。すると帝からは、「汝を女官として呼ぶのではなくして、唯だ朕が皇女共と同等に見てゐよう、何はともあれ、早く參内したまへ。」と甚だ親切に仰せなさる。四の宮の身邊にゐられる御附の人々、御後見の人達、御兄の兵部卿の親王などは「このやうに母の逝去後は心淋しく家に居るよりは、帝のおすすめに從ひ、宮中に入内してお住みなさる方が、氣が晴々として悲しい思ひも慰められるだらう。」などとお考へになつて、四の宮を遂

き方がない。
○思ひなしめでたく――世人の思ひなしめでたくの意で、即ち世の人望のあるをいふ。
○うけばりて――遠慮なく自由自在に事をなすをいふ。「諾」の字の意で、我一身に事を引き受けて處置するところからしていふのである。
○飽かぬ事――不満足に思ふ事。
○彼ば――桐壺の更衣は世人が許さながつたのに帝の寵愛が生憎にも深かつた。
○思し紛る――更衣の事を。
○こよなく――この上なく、格別に。

に参内せしめられた。恰度御部屋が藤壺となつたので、これより四の宮のことを藤壺と申し上げてゐる。この藤壺はまことにその容貌といひ、御様子といひ、不思議な程亡き桐壺の更衣に似てゐられる。又この方は桐壺とは事かはり、身分も高くゐらつしやるので、世人の人望もよろしく、決して批難するものなどはないから、藤壺は自然何等遠慮なさるところもなく自由勝手に振舞れ、不満足に思召さることもない。彼の桐壺は世人がよくも言はなかつたのに、帝だけは思ひの外に御寵愛なさつたのである。今でも帝は亡き桐壺をお忘れなさるやうなことは無いけれども、藤壺と逢ふてゐられる間に、何時となく自然と帝の御心は藤壺の一身上に注がれた。その爲め亡き桐壺の事を全く御忘れになり、只だ藤壺と樂しく日を送り非常に御心を慰めなさるやうになりなさつたが、思へば感慨無量なことであるわい。

補　○こよなく――この語は單獨に用ひられることはなくして、必ず他に比べて、格別なる場合に用ひる語である。

評　「あな怖しや。春宮の女御の、いとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはに果敢なくもてなされける云々」の句は藤壺の母后としては、可愛い娘の將來を思ふ眞情の流露である。又「思し紛るとは無けれど、自ら御心移ろひて、こよなく思し慰むやうなるもあはれなるわざなりけり。」の文を讀む時、ぞつと冷汗を覺えるのである。文選の古詩にある「去者日以疎、生者日以親。」の語句が、今更のやうに泌み〴〵と思はれる。

○御邊――帝の身邊をいふ。
○況して繁く云々――帝が繁く通ひなさる女御、更衣などは、帝のお伴をする源氏の君とも慣れて少しも恥かしいなどとは思ひなさらぬをいふ。
○とり〴〵に――それぞれに。
○めでたけれ――非常に美しい。
○うち大人び――うち接頭語、大人びは成人らしく年のふけること。
○いと若う美しげ――藤壺のことをさす。
○自ら漏れ見奉る――源氏の君が、藤壺の美しい姿を折々に御覽ぜられる。
○母御息所――源氏の母御息所は源氏の三歳の時亡くなられたので、少しも記憶してゐられない。
○若さ御心地――幼さ御心地。
○なづさひ見奉らに――

源氏の君は、御邊去り給はぬを、況して繁く渡らせ給ふ御方は、え恥ぢ敢へ給はず。いづれの御方も、「我れ人に劣らむ」と思ひたるやはある。とり〴〵にいとめでたけれど、うち大人び給へるに、いと若う美しげにて、切に隠れ給へど、自ら漏り見奉る。母御息所は、影だに覺え給はぬを、「いとよう似給へり」と典侍の聞えけるを、若き御心地に「いとあはれ」と思ひ聞え給ひて、「常に参らまほしう、なづさひ見奉らばや」と覺え給ふ。上も限り無き御思ひどちにて、「な疎み給ひそ。怪しく擬へ聞えつべき心地なむする。無禮と思さで、らうたうし給へ。面つき目みなどはいとよう似たりし故、通ひて見え給ふも似げなからずなむ。」など聞え付け給へれば、幼心地にも、果敢なき花紅葉につけても、志を見え奉り、こよなう心寄せ聞え給へれば、弘徽殿の女御、又この宮とも御中側々しき故、打添へて、もとよりの憎さも立ち出でて、物しと思したり。

解　源氏の君は常に、帝の身邊を離れず運れ立つてゐられるので、普通の女官共でも帝に逢ひなさる方々は、何れも皆、源氏の君と馴染なさるわけであるが、その中でも取り分けて帝が繁し

馴染むこと、馴れ親む意。
○思ひどち――思ひなかま。
○な疎み給ひそ――疎み給ふな。
○らうたう――可愛がる。
○通ひて――似通ひて。
○似げなからず――似つかはしくないことはない。似てゐる。
○志を見え奉り――花紅葉の折々について、歌を送つたりなどして、源氏が藤壺を慕ひなさる意を見せなさつたのである。
○この宮――藤壺をさす。
○側々しき――相疎んずる様子。
○もとよりの憎さ――桐壺の更衣の御子であるために、もとから源氏をにくんでゐられたことも又あらはれて。
○物し――物々しく厭はしいこと。

く御渡りなさる女官共になると、すつかり源氏の君と馴染んでしまひ、遂には顔を合すことも恥づかしくないやうにまでなつた。偖てどの女官でも、「自分の容姿は他人に對して劣つて居るだらう」などと思つてゐる方があるだらうか、否々、どの方も自惚れてゐる方ばかりで、それ〴〵に美しい方でゐらつしやつたが、皆年老いた方であつた。然るに藤壺だけはまだ年若い美しい方で、源氏の君に對しても、うら恥しくなされ、非常に逢ふことを恥ぢて、出來得る限り隱れ忍んでゐられたが、元來源氏の君は常々帝のお伴をしてゐられること故、自然それとなく藤壺の姿を御覽になつた。源氏の君の母御息所の亡くなられたのは、君が未だ僅に三歳のときのことであつたからして、母上の容姿は少しも御存じでなかつたのを、典侍が今の藤壺は「大變よく、あなたの母御息所と似通ふてゐられます。」と申し上げたので、源氏の君はまだ幼い十一二歳の御心地に「あゝ、そうであるか、感慨無量である」と感じられて、「どうかその藤壺の方へ常に參上いたしお逢ひ申し、馴染たいものだなあ、」と思召しになつた。源氏と藤壺は帝にとつては限りなく寵愛してゐられる仲であつたので、帝は藤壺に「源氏の君は決して疎んじてはならぬ。よく親しく爲給へ。お前は不思議な程に源氏の亡き母に似てゐる心地がする。それで源氏の君がお前を母のやうにして慕はれても、それは失禮なことだとは思はないで、可愛がつてやりなさい。母更衣の顔つき目つきなどは、大變よく源氏の君に似てゐるし、お前と源氏の君ともよく似通ふてゐるので、親子として見ても似つかはしいことである。」など仰せられる。そこで源氏の君はまだ幼い心地にも、花や紅葉などのその折〴〵については、藤壺を慕ひ

○世に類なし――帝が藤壺の美しいことは世の中に比べられるものがないと思はれる。
○名高う御座する――美人としての評判が天下に高い。
○なほにほはしさ――その藤壺よりも更に美しき源氏の君は、何とも譬へやうがない。
○光る君――世人が源氏の君につけた渾名で、照り光るやうな美しい君といふこと。
○とり〴〵に――それも

奉る歌を差し上げて、他の女官とは違ひ格別に慕ひなさつたからして、性來嫉妬心の強い弘徽殿の女御は、この頃藤壺とは相疎んじてゐられる矢先に、藤壺と源氏の君が親しくなさるので一層嫉妬心が增長し、加ふるに桐壺の更衣の子である故で源氏を憎んでゐられた古い憎さが出て來て、うるさく氣に障ることだと立腹してゐられた。

評 帝と藤壺、藤壺と源氏の君の間柄は益々親昵の程を增し、こまやかな情が釀されてゐるに反して、弘徽殿の女御は獨り嫉妬の炎に燃えてゐられるところは、どこまでも餘韻嫋々たるものがある。

「世に類なし」と見奉り給ひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさは、譬へむ方なく、美しげなるを、世の人「光る君」と聞ゆ。藤壺並びに給ひて、御覺えもとり〴〵なれば、「赫く日の宮」と聞ゆ。

解 帝は藤壺の美しい御容姿は、世の中に於いて比類すべきものがない程美しいと御覽になつてゐる。世間でも藤壺は美人であるといふ評判は高かつたが、それでも源氏の君の艶麗なる美しさは藤壺以上で何とも譬へようがない程の美人でゐらつしやつた。故に世人は源氏の君のことを「光る君」と言つて褒めた。又藤壺は源氏の君と並んで美しい方でもあり、帝の寵愛もそれ〴〵によかつたので、世人はこの方を「赫く日の宮」と稱へてゐる。

補 ○光る君――河海抄に「亭子院第四の皇子敦慶親王號ニ玉光君ト、好色無雙之美人也、又光孝

これもよい。
○赫く日の宮――世人が藤壺につけた名で、赫く太陽のやうな美しい宮といふ意。

○此の君――源氏の君。
○變へま憂く――帝が源氏の君が元服せしめるのがつらい。美しい童姿がなくなるからである。
○元服――冠を頭にいただいて、大人の姿になるといふ。
○居起ち――源氏の元服の世話の爲めに立つたり坐つたりして、落着きなさる暇もなく。
○思し營みて――世話をして。
○限りある事は――一定した先例のある事に。
○一年――先年。
○南殿――紫宸殿。
○樂しかりし――見事であつた。立派であつた。
○御響き――世の言ひ囃ぎ。
○おとさせ給はず――劣らないやうに。
○穀倉院――補綱參照。
○内藏寮――既出。
○清らを盡し――美麗のありだけを致して。
○仕うまつれり――内藏寮の人々が仕ひたのである。

天皇の御子式部卿是忠親王、はじめは源氏にて光源中納言と云、又仁明天皇の皇子西三條の右大臣を光と云、又日野の系圖と云ふものに左大臣高明公を光源氏と書く。これらを下にふくみて書ける也」と。○赫く日の宮――花鳥餘情に「一條院の御時上東門院の御入内ありて藤壺にまし〳〵しを、かがやく藤壺と世の人申し侍り、薄雲の女院同殿にまし〳〵し故に、かがやく日の宮と申し侍り、當代の事をもよりきたれる事は此物がたりにかきたる事おほきなり。」とある。

評　前には源氏の君の艶麗なるは、弘徽殿の御娘よりも美しいと書いたのが、今や「世に類なしと見奉り給ひ、名高う御座する宮の御容貌にも、なほ艶しさは譬へむ方無く云々」と言つて、この美しい藤壺よりも更に美しいと、筆を極めて源氏の君の美男子におはしますを力說してゐる。

此の君の御童姿、いと變へま憂く思せど、十二にて御元服し給ふ。居起ち思し營みて、限ある事に、事を添へさせ給ふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、樂しかりし御響きにおとさせ給はず。所々の饗など、内藏寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、疎かなる事もこそと、取り分き仰せ言ありて、清らを盡して仕うまつれり。

譯　源氏の君の童子姿は、まことに可愛らしいところがあつて、これを元服せしめて大人の風にするのは、甚だ殘念なことであると帝はお考へになつたけれども、人生としては一つの定つた式であるからして、止むなく源氏の十二歳の時、元服の式をあげなさつた。この時帝は落ち着きなさる暇もなく、元服のことに就いて世話をなされ、「定の事は言ふまでもなく、猶その上にいろ〳〵と賑しく事を付け加へになる。先年春宮が御元服なさつた時、紫宸殿で儀式があつたが、その時は華やかな騷ぎであつた。今度の源氏の君の元服の式も、その春宮の盛大な元服の式にも劣ないやうになさつた。又所々で御祝の饗宴などなさるに就いても内藏寮や穀倉院などに仰せられて出來るだけの事をなされた。偖て源氏の君には立派な外戚がない。それで今の場合萬事萬端につき注意して世話するものがない。只だ帝が一切の事を命ぜられてなさるのであるから、公然たる公の仕事となつた。公の仕事と言へば兎角一つの儀式になり終つて、疎略になり勝ちなものである。帝はこの事を心配なされ、格別にあれやこれやと細心の御注意をなさつて、一一勅命があつた。それで群臣はあらゆる善美を盡して元服の儀式の爲めに努力した。

補　○十二にして御元服――河海抄に「禮記曰天子之子十二而冠云々、人生れて十二を一周と云ふ。此年冠する和漢の例なり。」と、元服とは男子始めて頭首に冠を加へ、大人の服をつけ、成人となる禮を云ふ。元とは頭首といひ、服とは冠をさす、始冠（ウヒカウブリ）冠禮（ヲトコニナル）ともいふ。貞丈雜記には「元はハジメ、服はキモノとよみ、幼き者成長して始めて、おとなの衣服を着るを云ふ。」とある。古昔、男兒は幼時頭髮を露はして垂下するを常とし、これ

○おはします殿――紫宸殿をいふ。
○庇――補欄參照。
○御椅子――天子着坐の席として、椅子を置いたのである。
○冠者――元服する人、即ち源氏の君をいふ。
○ひきいれの大臣――冠を加へる大臣である。冠を加へるときは、もとどりを引き入れる。この大臣は奏の上の父、左大臣である。
○申の刻――午後四時。
○みづら――頭髪を眉中より分けて、兩耳の上にわがれたるをいふ。
○面つき――からだ全體の容姿をいふ。
○顔の匂ひ――容貌をいふ。
○大藏卿――大藏省の長官。
○藏人――藏人頭をいふ。
○そぐ程――切る時。
○心苦しげ――見てゐると苦しい氣持になるをいふ。
○見ましかば――見たならば。
○耐へ難き――亡き人を思ひ出して悲しさに忍へがたいのである。
○念じ――我慢すること。眼の場合であるから不吉な涙を忌むのである。

を童といひ、長じても未だ冠せざるをば大童と稱し、猶成人と認めなかつた。なほ元服のことについては、西宮抄、江家次第などに詳し。○所々の饗――故實秘抄に「親王大臣大中納言參議散二三位以下に饗を賜ふ所々をいへり。内藏寮、穀倉院儲レ之。」と。○穀倉院――古寫本はゴクサウキンとよんでゐるが、近世はコクサウキンとよむ。平城天皇の大同三年の創置にかかる。大内裡内大學寮の西、朱雀大路の西、二條の南に在り、方二町の地を占む。王朝時代畿内諸國の調錢、諸國の無主の位田職田沒官田等の收穀等を保管する所で、朝廷に於ける年中の饗物賑給の料、諸官人の賻物、學生の學問料等一切此所より支出す。

評　帝はどこまでも親切に源氏の君を愛してゐられる。その細心な描寫振りはさすが婦人の筆致の爲す所か。

おはします殿の、東の庇、東向に御椅子立てて、冠者の御座、ひきいれの大臣の御座、御前にあり。申の時にぞ源氏參り給ふ。角髪結ひ給へる面つき、顔の匂ひ、樣變へ給はむことをしげなり。大藏卿藏人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐ程、心苦しげなるを、上は「御息所の見ましかば」と思し出づるに、耐へ難きを、心強く念じかへさせ給ふ。

評　源氏の君の元服なさる式場は、帝が常々居らせられる清涼殿で、その東方の庇の間に、東向

きに玉座の御椅子を据え、その前方に、元服の當人である源氏の君の坐席と、加冠の役である大臣の席とが設備せられた。午後四時となつて源氏の君が御出でなされた。頭髪をみづらに結びなさつてゐられる若々しい美しい容姿、愛しい顔の色など、今これを元服せしめて、大人の姿とすることは、實に惜しい樣子である。大藏卿兼藏人頭が理髮の役で、美しい髮の端を切りなさるその樣子は、如何にも惜しく思召されて心苦しいやうであつた。この樣子を眺めてゐられた帝は、源氏の君もいよ〳〵成人して、堂々たる元服の式をあげたが、「この有樣を母なる故御息所に見せたならば、どれ程喜ぶことであらうか。」と故人を追想なさるに就いても、涙を御して耐へ難くなつた。そこでかうした祝ふべき折柄、涙は不吉であると、心強く我慢してゐられる。

補　○庇――ヒサシとよむ。寢殿造の四面に在る細長き一間の稱である。寢殿の本屋を母屋といひ、此の母屋の四方上下に長押があつて、母屋は庇よりもやや高く、四方とも柱と柱との間には格子、妻戸を入れて庇との限界をなす。庇は天井を張らず、裏板のままとしてゐる。稀には天井を張るものもあるといふ。庇の四方は大抵格子であつて四隅には妻戸がある。庇のことは又廣廂、廣緣、大床ともいふ。庇の外側は簀子である。○ひきいれ――元服の時に冠を被らせる役。後には加冠ともいふ。近世には烏帽子親ともいふ。尤もその人を重んじたもので、天子の御元服には太政大臣がつとめる。○大藏卿藏人――この解については古來いろ〳〵あるが故實秘抄などによると、大藏卿の職掌は元服のことに關係しない。理髮にあづかるのは藏人の職掌であるから、ここは大藏卿兼藏人頭が理髮を仕うまつたといふのであらうといふ說である。この場合は大藏卿藏人の下に理髮にあたるべきみぐし上げなどの語が誤脫したものと見るのである。花鳥餘情も右の說によつてゐる。ところが本居宣長は「これはみぐし上げとありけんを、くら人とは寫し誤れる歟、理髮を、御くし上げといふべき物也。云々」と言つてゐるのが第二の說である。その何れが是なるか未だ判然しない。吾人は暫く前說によつて說いて置いた。

評　帝は折に觸れ、事に逢ふ毎に、亡き御息所のことが、夢か幻のやうに思ひ浮ばせられるのである。今日吾人がここを讀んでゐながらも、御息所が慕しくなる。作者の妙筆の致す魅力か。

○冠し給ひて――加冠の儀式が終つて。
○御衣奉り――奉りはこの場合召すの意。詳しくは補説參照。
○下りて拜し――清涼殿の東庭に下りて、玉座に向つて拜せられるのである。
○思し紛るる折もあり――帝は桐壺の更衣のことをすつかり御忘れになることもあるが、只今源氏の元服姿を見ると、そぞろに思ひ出されるのであ

譯　加冠の儀式が終ると、源氏の君は御休憩所に退かれて、ここで御衣を召更へなさり、大人の服である黃色の縫腋の袍のお姿となり、清涼殿の東庭に下りて、帝に對し拜をなされた。この樣子を見奉るものは、誰も彼も感に堪えずして涙を落した。帝はなほ更强い感慨に打たれて涙

冠し給ひて、御休所にまかで出給ひて、御衣奉り更へて、下りて拜し奉り給ふさまに、皆人涙落し給ふ。帝、將た況してえ忍び敢へ給はず、思し紛るる折もありつるを、昔の事取りかへし、悲しく思さる。「いと斯う幼弱なる程は、上げ劣りや」と疑はしく思されつるを、あさましう美しげさ添ひ給へり。

る。
○上げ劣りや――下にぜむの語を補ふて解くべし。元服した爲めに、今まで下げてゐた髪を上へ梳りあげたので、容姿が見劣りはしないかといふのである。
○あさましっ――思ひの外に、呆れる程に。
○美しげさ――美しさといふに同じ。

桐壺

を禁じられぬ樣である。亡き御息所のことは桐壺の事に紛れて思ひ忘れてゐられたが、この元服姿の源氏の君を見なさるについても、ありし昔の御息所の事どもが、あり〳〵と追想せられて、悲しい思ひに沈みなさる。帝は「この源氏の君は斯う幼く弱々しい童子でゐられる間は美しい方であるが、髪を梳り上げて元服したならば、さぞ器量は見劣りがするだらう。」と心配なさつてゐられたが、存外にも元服なされた爲めに、層一層と美しさが增し加つた。

補 ○御休所――花鳥餘情には「康保二年八月御記下侍東第一間、旋立二屏風一其中敷二土敷二枚茵一枚一、今案一世源氏元服にも下侍をもつて休所とす西宮抄に見えたり。「抄」に下侍とは殿上の次を云なり。」とある。○御衣――童姿のときは、赤色の闕腋、腋のあいてゐるもの)の袍(束帶のときの上着)を着るのであるが、元服の後は、黃色の縫腋(腋の縫ひ合せたもの)を着なさつたのである。元服令に無位は黃袍とある。源氏の君は無位なるが故に黃袍を用ひなさつたわけである。○下りて拜し奉り給ふ――春宮の元服は南殿にて行はれ、堂上で拜をなさるのであるが、親王以下は清涼殿の東庭にて拜をなさる。細流抄に「春宮の御元服は南殿堂上にて拜あり、是は堂下にてある故に皆涙おとすと云義あり。されども只源氏の容儀進退を感ずる心可然歟」と記してゐる。何れの義も通ずると思ふ。

評 この「下りて拜し奉り給ふ樣に、皆人涙落し給ふ。」のところを、當時の人々は感情の高潮に達してゐた時代であつたから、傍の人々が、その美しい源氏の君の美そのものに感動しての涙だといふ人もあるが、そのやうにも取れる。然し必ずしもさう解かねばならぬとも限るまい。

○ひきいれの大臣――既出。
○御子腹に――大臣の妻は、桐壺の帝の妹である。故に御子腹といふのである。
○御女――葵の上。
○春宮より御氣色あるを――春宮から葵の上を奉れと仰せがあつたのである。
○思し煩ふ――大臣が春宮にささげる氣がしないので、春宮からの申し込みを、うるさがつてゐられた。
○内裏にも云々――ここでは内裏は帝のことをさす。大臣が帝に葵の上を源氏に參らせたいといふ意志を申し上げたので。
○無かめり――事實は無いのであるのを、それとなくぼんやりといふのは當時のならはしである。
○副臥――添寢の女である。

ひきいれの大臣の御子腹に、唯一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御氣色あるを、思し煩ふ事ありけるは、「この君に奉らむ」の御心なりけり。内裏にも御氣色給はらせ給ひければ、「然らば此の折の御後見無かめるを、副臥にも」と催させ給ひければ、然思したり。

譯 今日の儀式に於いて、源氏の君に加冠したる大臣の妻は、桐壺の帝の御妹でゐらせられたがその腹に生れなさつた只だ一人の娘で、大切に育てられた葵の上といふ方がある。この葵の上を春宮の方からは、是非奉れよとの仰せ言があつたけれども、大臣はそれを承諾なさらないでうるさがつてゐられた。これといふのもこの源氏の君に奉りたいとの考であつたからである。大臣は嘗てこの元服の際に、源氏の君にも申し上げて、内々の承諾を賜つてゐたので今日は帝が大臣に「それでは此の元服の際に、源氏の君には、後見申す方もないからして、汝の娘、葵の上を今日からは副臥にしたらよからう。又汝も源氏の君のしつかとしたよい後見となつてよい。」と促しなさつたので、大臣も左樣仕らうと決心してゐた。

補 ○ひきいれの大臣――眠江入楚に葵の上の父左大臣後には攝政太政大臣、葵上の母は桐壺の帝の御妹三宮と申しし也。仍てみこはらといふなり。葵上の兄致仕大臣をも、帝木の卷に宮腹の中將とあり。」と。仙源抄によると「引入大臣の女十六、其夜やがてそひぶしに成給。」とある。○副臥――ソヒブシとよむ。平安朝の貴族社會では幼年で既に元服し、直ちに添寢の女

を定めて妻とする習慣であつた。

評 平安朝時代は我が國の國史全體を通じても最も早婚な時代であつた。故に源氏の君の如きは十二歳にして最早副臥が出來たのである。

侍にまかづ給ひて、人々大御酒など參る程、親王達の御座の末に、源氏着き給へり。大臣氣色ばみ聞え給ふ事あれど、物の愼しき程にて、ともかくもあへしらひ聞へ給はず。御前より、内侍宣旨承り傳へて、大臣參り給ふべき召あれば參り給ふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大袿に御衣一領、例の事なり。

釋 源氏の君は御拜の事が終つてしまふと、列席してゐた人達は、帝の御前を退いて下侍に出なされ、そこで帝から御酒を賜り、お祝ひの宴が開かれた。普通ならば源氏の君は、無位の方でゐられるからして、臣の三位の方の次に着座なさるのが當然であつたけれども、帝の寵愛が深つたので今日は特別に親王の次で、大臣の上に着坐なされた。酒宴の間に於いて、大臣は始終自分の娘のことを、源氏の君に對して折々ほのめかしなされたけれども、然し源氏はまだ御年齢も若く、恥しい時であつたからして、兎にも角にも何とも御返事を申さらない。さうしてゐる間に、内侍は「大臣に帝の御前に參候すべし。」との宣旨を傳したので、大臣は直ちに上

○侍――下侍のことをいふ。
○大御酒――御下賜の酒を敬つていつたのである。
○大臣氣色ばむ――氣色ばむとは意志をほのめかすことである。大臣が娘のことをそれとなく源氏の君にほのめかしてゐられるをいふ。
○愼しき程にて――源氏はまだ女などについては恥しい時であつたから。
○ともかくもあへしらひ――源氏は大臣のほのめかしに對して何とも挨拶をしなさらなかつた。あへしらふは挨拶すると。
○内侍――内侍司の女官中で、掌侍專ら内侍といふ。
○御祿の物――祿とは御下賜品をいふ。
○上の命婦――帝の御前に侍する命婦をいふ。
○大袿――袿とは裝束の下着、大袿とは袿を大きく縫ひたるもので、人に賜ふために、見て立派さうに大きく殊更作つたもの。着るときは、これを縮めて着る。
○御衣一領――表衣、下襲、表袴の三つをいふと。
○例の事なり――常に定つたことである。
○御盃の序――帝が、ひきいれの大臣に盃を下さる時に御製をお作りになつたのだ。

に伺候した。すると今日加冠の御禮として、帝から御下賜の品があり、上の命婦が取次をなして大臣に渡した。それは何時もの例の通りに、白き大袿一領を賜つたのである。

補 ○侍に退出給ひて――源注餘滴の說、最も宜しと思はる次に掲ぐれば、「西宮抄の親王元服を考るに、加冠の儀終つて皆褰く御前を退き、冠者舞踏など有て後に引入と理髮とを御前にめして祿引出物など賜り退く。後に元服せし親王の曹司に引入を召して宜陽殿の西庇にて饗を設けさせらる。此時は王卿も御前の孫庇に候ふて酒肴を賜ひ舞樂など有也。是を以てみればここに侍に退て大御酒などまゐるといふは、此度は曹司へ召して酒祿はなくて下侍にて酒まゐるとせしなるべし。曹子にての酒祿は不定とあるからは、此度は無きよしなるべし。扨下侍にて杯酒例有と見ゆ。或說に天皇もおはしまして饗あるやうにいへるは誤也。此次に引入を内侍御前へ召すといひ、又光君へ左大臣殿のけしきばみ給ふと云ふなど御前にてのさまならず。新釋○雅望按ずるに禁祕抄、「下侍三間、有二炭櫃一、四面敷レ疊、號二侍臣亂舞所一也。如二折松一此所也、或又酒宴等於二此所一行レ之。淸華人近代不レ著レ之。」と言つてゐる。

評 大臣の氣色ばみに對し、「物の愼しき程にて云々」と書いて、源氏の君の有樣をあらはしたのは、この場合の源氏の君の姿をよく表現したものである。

御盃の序に

いときなき初元結に長き世を契る心は結び籠めつや

○いときなき初元結云々の歌――補欄參照。
○御心ばへ――奏の上の意を含ませて。
○おどろかせ――注意をされること。
○結びつる云々の歌――補欄參照。
○長橋――清涼殿から紫宸殿に架した長廊である。この廊から東庭に下る階段があるので、大臣が東庭に下りたのである。
○舞踏――喜悅の情をあらはす唐風の作法である。
○左のつかさ――左馬寮のこと。
○藏人所の鷹――以前には主鷹司があつて鷹のことを司つてゐたが、此頃は藏人所にて司つてゐた。
○屬据ゑて――藏人が鷹を肘にとまらせて持ち出したのである。
○御階――階段。

御心ばへありて、おどろかさせ給ふ。

結びつる心も深き元結に濃き紫の色し褪せずは

と奏して、長橋より下りて舞踏し給ふ。左のつかさの御馬、藏人所の鷹据ゑて、賜はり給ふ。御階の下に、親王ちた上達部列ねて、祿どもしなに賜り給ふ。其の日の御前の折櫃物、籠物など、右大辨なむ承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど、所狹きまで、春宮の御元服の折にも數增されり。なか〳〵限りも無く嚴しうなむ。

講　帝はひきいれの大臣に酒盃を賜る序に、

幼き初元結に長き世を契る心は結び籠めつや

と大臣の御娘を、源氏の君に捧げないかとの御注意があつた。すると大臣は直ちに、

結びつる心も深き元結に濃き紫の色し褪せずは

と御返歌を申し上げ、それからこの清涼殿と紫宸殿との間に架してある長廊の階段から下りて東庭に立ち、玉座に對し、喜悅の情をあらはす舞踏をなしなさつた。すると帝は更に左馬寮の馬と藏人所が持ち出した鷹とを大臣に賜ふた。又清涼殿の階下に親王や公卿を列ねて、それぞれの差等に應じて帝から御下賜品を賜つた。この元服當日、當人の源氏の君から朝廷に奉り、

○しなに――それぞれの等差をつけて。
○折櫃物籠物――元服者より果物などを入れて朝廷に奉るもの。折櫃は檜の薄板を折り曲げて作つた箱で、餅や肴などを入れる。俗に折といふ。籠物はカゴである。
○屯食――下萬に賜ふ飯の名。
○祿の唐櫃――諸官に祝儀として賜るべき品物を入れた唐櫃。
○所狹きまで――そのあたりの場所が狹くなる程。
○嚴し――堂々としてゐるといふ。

帝の御前に並べ立てた折櫃に入つた物や、籠に入つた果物などは、一切右大辨が仰せを承つて調へたものである。下々の者に賜ふ屯食といふ御飯や、諸臣に賜はる祝儀の下賜品を入れた唐櫃など、置かれぬほどあゝりに滿ち〳〵て置かれた。その數は春宮が御元服の當時よりも更に數多く、この度の盛大なことは却つて春宮の當時よりも堂々たるものでまああつた。

補　○幼き初元結に云々の歌――初元結とは元服の際、紫の組紐で始めて髻を結ぶをいふ。長き世を契るとは行末長く大臣の娘と源氏とが夫婦になることをいふ。卽ち歌の意は、理髮の役ではないが、加冠の役をつとめた卿は、かの幼い源氏の君の初元結を結んだ中に、汝の娘と源氏の君とが末長く夫婦となるやうにとの心を結び込んで置いたかの意。○結びつる心もの歌――仰せの如く娘が夫婦となるやうにとの緣組の心を、深く元結の中に結び込んで置きましたが、かの紫の元結の色がさめないならば（つまり源氏の君が心移りがせないならば）喜ばしいことだと將來が祈られます。○舞踏――敬禮の一種、朝賀、御儀式の時、群臣の行ふ拜禮の作法である。拾芥抄に「舞踏事再拜、置笏立左右左、居左右左、取笏小拜立再拜。」とある。卽ち手を袖中に入れて先づ立ちて左右左、また居て左右左とさし延べ、舞ふやうな擧動をなして沓を踏みならすので、喜びのあまり手の舞ひ、足の踏むを知らぬ意を示すものである。草木子に「舞踏唐制也、自ニ武后賜ニ宋之問一始一」と。○屯食――孟津抄に「つつみいひともいふ、下萬に給はる强飯鳥の子なり。」と、仙源抄もこれに同じ。然し昔は下萬に限らずよき人にも出したらしい。台記春日詣の條「屯食幾十具、異飯幾百」とあるから今の世の二重の臺といふものが、その遺

○作法――源氏の君と葵の上との婚禮の儀式をいふ。
○もてかしづき――大臣が大切に世話するをいふ。
○ゆゆしう――非常に、甚だ。
○女君――葵の上。
○過し給へる――年が源氏の君よりも四つばかり増してゐられるをいふ。
○程に――年齢でゐられるのに。
○いと若う――源氏の君が。
○似氣なく云々――葵の上の思ひくである。
○御覺え――大臣が帝から親愛されてゐられるをいふ。
○母宮――葵の上の母で

制であらう。貞丈雜記に「强飯を握りかためて、鳥の玉子の如く丸く少し長くしたるを云ふなり、今も公家方にては、握飯をどんじきといふ由、京都の人物語せり。」とは近世のことと思はる。

その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせ給ふ。作法世に珍しきまで、もてかしづき聞え給へり。いと幼弱にて御座したるを、ゆゆしう美しと思ひ聞え給へり。女君は少し過し給へる程に、いと若う御座すれば、「似氣なく、恥かし」と思いたり。此の大臣の御覺え、いとやむごとなきに、母宮、内のひとつ后腹になむ御座しければ、何方につけても、物鮮なるに、この君さへ斯くおはし添へぬれば、春宮の御祖父にて、遂に世の中を知り給ふべき、右の大臣の御勢は物にもあらず壓され給へり。御子ども數多腹々に物し給ふ。宮の御腹は、藏人の少將にて、いと若うをかしきを、右の大臣の御中はいと好からねど、得見過し給はで、かしづき給ふ四の君に配せ奉り、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御間どもになむ。

譯 源氏の君は元服の式が終つたその晩は直ちに、ひきいれの左大臣の里邸に御出でになり、鼓

○内のひとつ后腹――大臣の北の方は、先帝の后宮の御子で、今の帝の妹にあたる。
○世の中を知り給ふ――春宮御即位後は攝關となつて、天下の政をとるべき。
○右の大臣――弘徽殿の父、春宮の御祖父で、二條の大臣といふ。
○御子どもあまた腹々――ひきいれの大臣の御子は、正妻の外の宮々の腹にも澤山あつた。
○宮の御腹は――大臣の北の方の腹では葵の上の兄で藏人の少將なる方が今一人あつた。
○藏人の少將――近衛の少將で藏人を兼ねたのである。
○右の大臣の御中――右大臣がひきいれの左大臣とは、仲が善くはなかつたが。
○得見過し給はで――右大臣の妻にあたる。

處で大臣の娘である葵の上と結婚の式をあげられる。この時大臣は世にも稀な程立派に世話をなされた。なほ源氏の君が甚だ幼い樣子でゐられるのを、非常に美しい方だと感心してゐられる。女君の葵の上は少し年増しであるために、このやうに甚だ若い源氏の君と夫婦になるのは「何となく不釣合で、世間に對しても恥しい」と思ひなさる。このひきいれの左大臣は、帝から信任を受けられることも甚だ立派であり、なほその上に、葵の上の母宮で即ち大臣の北の方にあたる方は、先帝の后宮の御子で、今の帝とは同一の腹に生れなさつた方であるからして、帝の妹に當り、大臣といひ北の方といひ、何れも堂々たる立派な方であるのに、今はその上、帝の愛子である源氏の君までが、當家の婿として親戚に加りなさつたのである。從つて彼の春宮の御祖父であつて、即位後は攝政關白となり世の中の政治を掌中に握り給ふべき右大臣の威勢でも、今となつてはひきいれの左大臣に比べては物の數にも入らぬやうに壓倒された。この左大臣の御子樣は正妻の腹に生れた方の以外に、他の宮々の腹にもあまたゐらつしやつた。北の方の宮には、この葵の上の他に、もう一人兄で藏人の少將でゐられる大變若くて美しい方がある。右大臣がひきいれの左大臣との平素の御仲は、あまりよい方ではなかつたけれども、この藏人の少將が美しくよい方であるのを見逃さないで、遂に自分が平素大切に養育してゐる娘四の君の配偶者と定めなさつた。さうして左大臣が葵の上の婿である源氏の君を大切になさるのに負けない程に、四の君の婿である藏人の少將を大切にしてゐられた。兩大臣の間はまことに望ましきことである。

大臣が藏人の少將の美しくゐられるのに目をつけて。

○かしづき給ふ――右大臣は藏人の少將を大切に養育してゐられた四の姫の婿とされた。この姫君は弘徽殿の妹。

補　○その夜大臣の御里に――元服の當夜嫁娶なさつたのであるが、岷江入楚の記する所によると「村上第四皇子爲平親王御寵愛甚し、仍高明公女を元服の夜進せらる。河延喜十二年十月廿二日保明親王私云時十二歳歟元服夜故左大臣時平女參る俗に謂二副臥一李部王記寛和二年七月十八日三條院于時親王御元服同日皇太子十一歳法興院大相國女尙侍俘子副臥見大饒」とあるから元服して直ちに嫁娶の事は、當時の習慣であつたものと思はれる。

○御子ども數多――ひきいれの左大臣に御子供の多かつたのを言つたのである。岷江入楚には次の如く記してゐる。

致仕太政大臣　母桐帝御妹　藏人少將也
葵上　母同じ　夕霧大臣母
藤大納言
春宮大夫　以上二人母見えず
左中辨　同藏人少將

評　源氏の君と左大臣とを結び、春宮の御祖父にあたる右大臣と左大臣の息藏人少將とを結びつけ、事件をして益々紛糾せしめながら、それからそれへと展開せしめて行く筆振りは、さすがに作者の老練な筆の運ばし方と言はねばならぬ。桐壺の前半は哀愁で充たされてゐたが、後半からは少しづつ陽氣な氣分が現はれてゐる。

○里住――左大臣の邸にあるたいふ。當時の結婚は女の許にて結婚式をあげ、その後も女の家に通ふのであつて、女を自分の家に入れることはない。

○然樣ならむ人――斯樣なる人(藤壺)をば、我が物として、明暮眺めてゐたいといふ意。

○似る人無く――藤壺のやうな美しい人に似てゐるものはない。

○大殿の君――大殿は大臣の尊稱。葵の上をさす。

○をかしげに――美しい者として、養育せられたが。

○心にも着かず――源氏の君の心には合はぬのである。

○御ひとへごころ――思ひつめた一心で。

○苦しきまで――藤壺を慕つて心苦ましめられるのである。

源氏の君は、上の常に召し纏せば、心安く里住も得し給はず。心の中には、ただ藤壺の御有樣を類なしと思ひ聞えて「然樣ならむ人をこそ見め。似る人無くも御座しける哉。大殿の君、いとをかしげに、かしづかれたる人とは見ゆれど、心にも着かず覺え」給ひて、幼き程の御ひとへごころにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

釋　帝は源氏の君を常に、自分の身邊に引き連れてゐられる爲めに、源氏は兎角內裏にお住みなさることが多い。從つて氣をのんびりさせて葵の上の邸に居られることが少い。然し源氏の君はそのために心苦しいとは思はれないで、彼の藤壺の美しい姿は、比類すべきものが無い程であると思召しになり、「斯樣な美しい方を明暮眺めてゐたいものである。あの藤壺の美しさに似てゐる人はさても世には無いものである哉。左大臣の娘である葵の上は、大變美しく大切に育てられた方のやうに見えるが、どうも自分の氣に入らぬことだ。」など仰せられ、まだ年若い時の片意地な心として、藤壺のことがひたすら氣になり、遂には苦痛を感ずる許りに慕つてゐられる。

補　○心にも着かず覺え――ここに脫文があるのでないかと本居宣長は言つてゐる。卽ち「此上に詞足らず。脫ちたるにや、其故は「然樣ならむ人を」といふより「人とは見ゆれど」といふまでは、源氏の君の心を直にいへる語、「心にもつかず」云々は、物語の地よりいへる語なれば、

必ずその界に云々といふ詞無くては整はず、さるを後の人の寫すとて落したるものか、はたもとより紫式部が、取り外して誤れるものか、此類なること卷々にをりをりあるなり。」と言つてゐるが、必ずしもそれとは限るまい。

評 いよ〳〵源氏の君の上にも、何か事が起らねばならぬやうな豫感がせられさうに書かれてゐる。

大人になり給ひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れ給はず。御遊の折々、琴笛の音に聞き通ひ、仄なる御聲を慰めにて、内裏住のみ好ましう覺え給ふ。五六日侍ひ給ひて、大殿に二三日など、絶え〴〵にまかで給へど、唯今は幼き御程に、罪無くおぼしなして、營みかしづき聞え給ふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを選り調へすぐりて侍はせ給ふ。御心に着くべき御遊びをし、おふなおふな思いたづく。

解 源氏の君が元服なさつてから後は、帝は今までのやうに源氏を連れて、藤壺の御簾の中さへ入れることはなさらない。從つて源氏の君と藤壺とは直接顏を合せなさる機會が無くなつた。只だ音樂の催しのあるときは、源氏は笛の音に托して己が情を通じ、又藤壺の琴の音を漏れ聞いて慰みとしてゐられる。かうしたことを樂しみとしてゐられる源氏の君は、内裏にゐればこそ斯く慰めもあるのだから、自然内裏にばかり住むことをお好みになり、五六日も引き續き内裏にお泊りになつて、大臣の娘葵の上のところへは二三日位に一度御歸りになるなど、ほんの僅か歸られるばかりである。然し大臣の方では決してあやしまず、まだ御幼少の折だから何等惡意あつての仕業でも無いと御考へになり、いろ〳〵と骨を折つて大切に源氏の君の世話をなされる。又源氏の君にも、女君の葵の上にも、當時では並々ならぬ勝れた立派な方を選拔して女房役につけられた。それから源氏の歡心を求めようとして、源氏の御心に叶ふやうな御遊びごとを催し、大臣の身分として出來るだけの努力をなし、源氏の御機嫌を取つてゐられる。

補 平安朝の風習として、元服した男子は女子の部屋に入ることが絶對に禁ぜられてゐた。故に源氏も元服以前には、帝のお伴をして藤壺の部屋の中に入つてゐられたのが、元服なさつた今日はもう、御簾の中に入ることが出來なくなつたのである。又當時の結婚の風習は、結婚後は男子が女子の家に毎夜通ふのである。若し厭になつたり、他に女が出來たときは男子はすつかり通ふことを止めてしまふ。それで結婚した女は勿論のこと、娘の兩親は男の歡心を求める爲にいろ〳〵と努力し、以つて男女間の契りを完うしようとした。

評 源氏の君は當時僅か十二歳でゐられながら、既に戀に苦しんでゐられるところは如何にも平安朝式である。

内裏にはもとの淑景舍を御曹子にて、母御息所の御方々の人々、まかで散

ぬ――世間普通でなく勝れた人ばかりを。
○すぐりし――選拔。
○御心に着くべき御遊び――源氏の君の御心に叶ふやうないろ〳〵な遊びごと、ここの遊びは音樂のみでない。
○おふな〳〵――我が身の程に從つて。
○いたづく――れんごろに世話する。

○大人になり――元服しなさつた後は。
○ありしやうに――今迄のやうに、もとのやうに。
○御遊――管絃の遊びをいふ。音樂。
○音に聞き通ひ――音樂によつて、藤壺と情を通じなさつた。
○仄なる御聲――かすかに御簾の中から漏れてくる藤壺の御聲をいふ。
○骨みかしづく――骨を折つて世話をなし大切にすること。
○御方々の人々――源氏の君、葵上に仕ふる女房ども。
○世の中のおしなべたら

○淑景舍――桐壺の事。
○御曹子――宮中に於け

る部室をいふ。
○母御息所――桐壺の更衣及びその母君に仕へてゐた方々。
○まかで散らず――その仕へてゐた人々は散らずに。
○里の殿――更衣の母の住んでゐた里家。
○修理職――宮中修理のことを司る役所。
○内匠寮――中務省に屬し、工匠を司る役所。
○二無う――比べものなく。
○木立――樹木。
○山――築山である。
○たたずまひ――立つてゐる樣子。恰好。
○池の心――漢語で池心といふ。心はすべてうちといふ。池の中といふ意。
○めでたく――立派に。
○ののしる――言ひ騷ぐ。
○思ふやう――源氏が理想の藤壺などと住みたいとの意。
○思し渡る――ずつと思つてゐられる。
○愛で聞えて――ほめたたえて。
○言ひ傳へたるとなむ――言ひ傳へたのだといふことだ。

らず侍はせ給ふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二無う改め造らせ給ふ。もとの木立、山のたたずまひ面白き所なるを、池の心廣く爲なして、めでたく造りののしる。「斯る所に、思ふやうならむ人を居ゑて住まばや」とのみ歎かしう思し渡る。「光る君」といふ名は、高麗人の愛で聞えて附け奉りけるとぞ、言ひ傳へたるとなむ。

解　源氏の君が内裏に於ける御自身の部屋としては、御生母の住んでゐられた淑景舍卽ち桐壺と定められ、又桐壺の更衣並に更衣の母君に嘗てお仕へしてゐた女房達はそのまま留められて源氏の君にお仕へするのになつた。更衣の母君の住んでゐられた源氏の里御殿は、修理職や内匠寮に勅命を賜つて、この上もない立派なものに改築せられた。もとからあつた樹木や築山の樣子はなか〳〵面白く出來てゐたのを、今度は更に池を廣く廣められ、人夫どもは立派に造りあげようと言ひ騷ぎながら働いてゐる。これを御覽になる源氏の君は思召すやう「斯樣な立派に出來た住家に、理想的と思はれる藤壺などを住ませて一緒に居たならばよいだらう。」と藤壺のことばかりを慕ひながら苦しんでゐられる。

さきに源氏の君のことを「光る君」と言つたが、この名前は、彼の鴻臚館で源氏の君に逢ひ、人相見をした高麗人が、源氏の容姿のすぐれて美しきを、ほめたたへて名付け奉つた名であると言ひ傳へられてゐる。

補　○里の殿云々――このところは榮華物語卷二「樣々の悅」の條にある「かくて大殿、十五の宮の住ませ給ひし二條院を、いみじう造らせ給ひて、もとより世におもしろき所を、御心のゆくかぎり造り磨かせたまへば、いとどしう目も及ばぬまでめでたきを御覽ずるままに、御心もいといみじう思されて云々」とある事から思ひついて書かれたものと思はれる。○内匠寮――故實秘抄に「これは内匠寮をいふにはあらず。木工寮の和訓にたくみの司といへる名目によれる也。彼内匠寮は殿舍作る事にはあづからぬ官なればなり。」と。○光る君――「秘光源氏の名の事を爰にて書きあらはせり。西三條の右大臣源光は無雙の才人なり。その名を思ひよそへて嘗けるにや。」と、岷江入楚に言つてゐる。

評　これでいよ〳〵桐壺の卷も終つたのである。偖て結末になつて、だしぬけに「光る君といふ名は云々」の句を引き出してゐるのは頗る奇拔な書き方である。これは要するに、一はこの物語を單なる物語とせず、事實もののやう見せるためと、二は光る源氏の名を讀者に深く印象せしめるため、三は次の帚木の冒頭に「光る源氏、名のみ事々しう言ひ消たれ給ふ云々」の句に連らねる爲めであると古來言はれてゐる。

桐壺終

帚木

人物

左大臣　葵の上の父である。

頭中將　左大臣の子で葵の上の兄である。

左馬頭　雨夜の品定に御物忌に籠らうとして參上した人。

中納言の君　葵上に召使はれてゐる女房。

藤式部　左馬頭と共に品定の晩に參上した人。

中務　葵上に召使はれてゐる女房。

紀の守　伊豫の介の子で、空蟬の繼子である。

伊豫の介の妻　空蟬といひ、小君の姉である。

小君　故衞門督衆中納言の子で、空蟬の弟である。

中將の君　空蟬に召使はれてゐる女房。

木枯の女　左馬頭と殿上人との知つてゐた女。

四の宮　左大臣の娘　葵の上

年立

十七歳　夏　雨夜の物語品定の事

頭中將源氏の君の艷書實見の事

左馬頭藤式部丞參籠御物忌の事

女房の品定の事

左馬頭物語る兩女の事

頭中將物語の女の事（夕顔のこと）

式部丞物語の女の事

翌日源氏君葵上宿所に退出なされる事

當夜中神の方違のために紀伊守中川の家に一宿の事

同夜空蟬を始めて見給ふ事

小君初めて源氏君に參る事

小君源氏の君の手紙を空蟬に傳ふる事

源氏君又方違をなして中川の宿に泊りなさる事

（空蟬は源氏に見えない。）

梗概

源氏の君も十七歳になられた夏のことである。五月雨がしめやかに降りつづいてゐる宵の頃、内裏に詰めてゐた宿直の人々は滯しさのあまりに源氏の部屋を尋ねた。その中には源氏の岳父左大臣の子息である頭中將もゐる。この頭中將はなか〳〵の通人で閑分浮氣なことをして歩いてゐたのであるが、源氏も浮氣をしてゐられし時のこととして、艶書なども澤山齋子に貯へてゐられた。頭中將は突然この源氏の艶書を見出し、それから話が進んで當世女の月旦となつた。さて頭中將は評して曰く「女は大體區別して上中下の三つに分つが、その中で上の部類に屬する女は、大方の疵を隠すからその女の本性は現はれない。又下の部類に屬する下品な女になると、批評の範圍外である。ただ中の部類に屬する女にこそ、眞に捨て難いよい女がある。」と話をすすめる。このとき左馬頭、藤式部の丞といふその道の風流人がやつて來て、又々その議論に加はる。左馬頭は曰く「女といふものは澤山あるが、さていよ〳〵自分の妻となるものを搜すと、なか〳〵あるものではない。妻の務めといふものは男子の官に在るときの務めよりも更にむづかしいものである。妻を選擇するときは容貌の美醜、門閥の如何によらない。ただ忠實温和なるを以つて理想とする。それから自已の經驗談に入つて「昔、我が妻としてゐた女に只一つの缺點として、嫉妬深い點があつた。この缺點を直してやらうと思つて、お前が嫉妬を直さないならば緣を切つて仕舞うと言つておどした、すると彼女は遂に私の指に喰ひ付いたのでそれきり二人は緣を切つてしまひました。この女は嫉妬こそいたしましたが、裁縫の道にもたけて實によい女でありました。その後又他の一人の女の許に通ひましたが、この女は書道は勿論、琴や歌の道についてもすぐれた女でありましたが、或る晩この女の許に或る殿上人が行つて、女と共に琴笛の合奏をやつてゐるのを見つけ、それからは交りを絶ちました。」と二人の女のことを語つた。次に中將曰く「私が通つてゐた女は、極く靜かな、しとやかな女でありました。決して恨みがましいことは少しも言ひませんでした。私が何にも知らない間に私の正妻のところから、餘程すごいことをその女の許に言ひ送つたやうです。私はそれとは氣付かず、少し通はずにゐましたところが、その女は恐ろしい手紙のことから、私の寄れずに暢氣でゐたことを、すつかり捨てられたらのと思ひ、遂に私の胤である一人の女の子と共に、どこかに委を隠してしまひました。」と語る。すると今度は藤式部が曰く「私は儒學者の娘で無茶に學問のある女と交りを結んでゐました。それは私がまだ學生であつた頃先生の博士の許に通つてゐたときのことです。その女が或る時風病といふ病氣になつてゐる頃、私が寄れますと、女は只今は極熱の草藥を服してゐるため、惡臭があるから私に逢はないといひました。」と語つた。すると一座の人々が、そんなことはあるものかと冷笑した。斯くして女に關する批評はどちらとも決定せずに一夜は明けてしまつた。翌日は源氏は久々で左大臣邸の奏の上の邸へ訪づれなさる。ところが急に方違ひをせねばならぬといふことになり、左大臣の邸に行かれるのを止めて、中川の紀伊守の邸に赴きなさる。中川の邸には伊豫の介の妻である空蟬が來てゐるときであつたので、源氏は空蟬と一夜を明しなさつた。その後空蟬のことが念頭を去らないので、弟の小君を自分の方に奏ひ、この小君に消息の文を持たせて、空蟬の許に送られるが、空蟬は決して返事をせない。源氏は遂に又方違にかこつけて紀伊守の家に赴かれ、小君を案内として空蟬の許に接近しようとしたが、空蟬は他の女房のもとに逃れ、病と言つて應じない。

この卷の名なる帚木といふのは、源氏と空蟬との贈答歌中の帚木の語による。

○名のみ事々しう——光る源氏といふ評判だけはやかましいが。
○言ひ消たれ——惡く世人から批評されるをいふ。
○皆おほかなる——情愛を好まれるとの譯。
○いとどかかる——源氏自身の考へである。
○忍び給へる——隱してゐられる。
○隱ろへ事——世人に對して隱してゐる秘事。
○さがなさよ——よからぬこと。
○世を憚り——世間に對して遠慮すること。
○まめだち給ひ——眞面目な風をしてゐること。
○なよびかに——やはらかと弱々しきさいふ。
○をかしき——趣のある事。
○交野の少將——補闕參照。

光る源氏、名のみ事々しう、言ひ消たれ給ふ咎おほかなるに、「いとどかかる好色事どもを、末の世にも聞き傳へて輕びたる名をや流さむ。」と、忍び給ひける隱ろへ事をさへ、語り傳へけむ人の、物言ひさがなさよ。さるはいといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしき事は無くて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。

講 源氏の君は美しい立派な方であるといふ評判だけは「光る源氏」などと言ひはやされてゐらつしやるがそれは名ばかりで、情愛のことに就いては、いろ〳〵と世間から批難の罪を受けられる事が多いのである。（これから帚木、空蟬、夕顏の三卷に亘つて、空蟬や夕顏などの女を中心に情愛のことがあるが、）源氏の君は「是等情愛の事どもは、世人に聞かれてあれやこれやと噂せられ、源氏の君は浮薄な人であつたなどと、末代にまでも永く、浮き名を流すやうになつてはならぬ。」と非常に世間に對し、包み隱してゐられた。けれどもその秘事をどうして知つたのか、聞きだして後世に傳へた人こそは、口のよからぬ人である。この源氏の君の情愛に關するやり方は、非常に世間に對して遠慮をなさり、表面は眞面目な風をよそふてゐられるのだから他から見たところ、しなやかに風流な趣といふものは少しも無い。このやうなやり方では、彼の物語にある交野の少將といふ風流な遊び男が聞き知つたなら、源氏の風流は眞の風流でないと言つてあざ笑ふことであつただらう。

○まだ中將――源氏の君がまだ中將でゐられた時は宣。
○内裏にのみ――宮中にばかり眞面目に伺候してゐられて。
○忍の亂れ――「陸奥のしのぶもぢずり誰故に、亂れんと思ふ我ならなくに」の歌による。歌の意補欄に詳し。
○然しもあだめき――源氏は際きやすき人に一一心を移すやうな浮氣。
○目馴れかる――世間にありふれたる。
○うちつけの――爲骨な。
○すき〳〵しさ――好色のこと。
○御本性――生れつき。
○あながちに引違へ――無理に前の性質とは變つたことをなさるをいふ。
○心盡しなる事――煩悶すべきこと。
○生憎――意地惡く。
○然るまじき――あつてはならぬ。
○御物忌――何事でも慎まねばならぬことのあるときは、人の出入を留め外出もせずして警戒するをいふ。
○長雨――數日降りつづく雨。
○萬の御裝ひ――源氏の君の召されるいろ〳〵なともあつたが、元來源氏の君は、そのやうなありふれた浮氣なことは、お好みにならぬ性質でゐられたから、强くも疑はれなかつた。然し時とするとそれとはすつかり變つて、無理な戀に煩悶なさる習癖が、意地惡くあるので、その爲めには爲てはならぬやうな事までも押切つて爲さることもあつた。

補　○忍ぶの亂れ――古今和歌集戀歌四にある河原左大臣の「陸奥のしのぶもぢずり誰故に亂れむと思ふ我ならなくに」の歌によつたもので、「陸奥のしのぶもぢずり」は「亂れ」にかかる序詞である。「しのぶもぢずり」とは陸奥國信夫郡から產出する忍草の葉莖を、布帛に種々の色に摺りたるものである。ここの「忍の亂れ」といふのも源氏の君が葵の上以外に愛人などが出來て、そのために心をとり亂されることをさしたのである。

評　「好ましからぬ御本性にて、」の下には何か他の語が入らねばならぬやうに思はれるけれども、かういふやうにぼんやりとした書き方をしたのは、當時の一種の書き振りであつたやうだ。

長雨晴れ間無き頃、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居侍ひ給ふを、大殿には「覺束無く怨めし」と思したれど、萬の御裝ひ何くれと珍しき樣に、調じ出で給ひつつ、御息子の君達、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。

解　連日雨が降りつづいて、すこしも晴れさうもないときに、宮中では慎むべき事が出來て、引續き永く物忌があつた。爲めに宮中に伺候の人々は外出を禁ぜられ、源氏の君も永く宮中に留

つてゐられる。そこで左大臣は源氏の君の參り給はぬのを「何とたく心當りでも無からうかと不安に思はれ、怨めしく思召してゐられた」が、それでも源氏の君のお召しになる御裝束からその他の物に至るまで何れも立派に新調してたてまつり、左大臣の息子の君達は勿論、源氏の内裏にあるお住みの部屋にお仕へ申してゐられる。

補　○物忌――中古陰陽家の說によつて行はれたもので、夢見の惡いとか、怪しい事のあ[illegible]には數日の間、引籠りて人にも會見せず身心共に清淨潔白にして謹愼するをいふ。この間は家には簾をかけ、柳の木を三分程に削りて作つた小札に、物忌と書いて絲をつけ、忍草の莖につけて冠にもつけ、又家の簾にも挿して置く。禁祕抄に「御物忌之時、惣不レ出二御他殿舍中一。諸事於二簾中一有レ之。或出二御廣廂一、不レ固之時例也。云々、物忌不レ加二御字一、以レ柳進レ簡、指二御冠纓上一。御放鳥時、付二左御袖一。」と見ゆ。是れ禁中の物忌の事である。

評　この所からは、世に有名な雨夜の品定めとなるのである。

宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心易く、馴れ〳〵しく振舞ひたり。右の大臣の勞はりかしづき給ふ住家は、この君もいと懶くして、好色がましきあだ人なり。里にても我方の調ひ眩くして、君の出で入りし給ふに、打連れ聞え給ひつつ、夜晝學問をも遊びをも、諸共にしてをさ〳〵立後れず、何處にても纏はれ聞え給ふ程に、自ら

裝束や道具を立派に新調なさるのである。
○御息子の君達――左大臣の息子達である。
○この御宿直所――禁中で源氏のゐられるところ。
○宮腹の中將――左大臣の子で、頭の中將と言はれてゐた方。
○中に親しく――左大臣の息子の中で數多ゐられたが、その中でも特に源氏の君と仲よくしてゐられた。
○勞り――可愛がる。
○此の君も――源氏は正妻の奏の上の方へはあまり好んで行かれないが如くに、この中將も矢張り右大臣の家へ行き四つ君を訪ふことをあまり好まなかつた。
○あだ人――浮氣人。
○里にても――左大臣の家でも。
○我方の調ひ――中將の部屋の飾を美しくして。
○君の出で入り――源氏の君の出で入り。
○打連れ――頭中將がお伴をするのである。
○なさ〳〵――まあ〳〵大體は。
○立後れず――頭中將の才能をみがくこと、源氏の君に負けないで。
○長りも劣かず――何等の遠慮もなく。
○隱し敢へず――隱さうとしても隱されぬないふ。
○睦れ聞え――睦しく仲よくすることをいふ。

畏まりも置かず、心の中に思ふ事をも隱し敢へずなむ睦れ聞え給ひける。

補　左大臣の息子の君達の中でも、帝の御妹の腹に生れなさつた中將（桐壺の卷では藏人の少將といつた人が今は中將になつたのである）は、澤山の源氏の遊び友達の中でも、特に源氏とは親睦であり、馴染んでゐられたからして、何の遊びごとがあつても、この中將は心打ち解けて、馴れ〳〵しく振舞つてゐられた。又この中將は桐壺のところにも出てゐるが如く、右大臣の婿であつたから、中將を大切に可愛り、お世話をしてゐられる右大臣の住家へは、源氏が左大臣の奏の上に於けるが如くに、行くことを大變うるさく思召しになり、他に花を求められるといふやうな浮氣人である。左大臣の邸でもこの中將の部屋の飾りはまばゆい程立派に作つて、源氏の君が左大臣の邸に出入なさるときは、中將共に連れ立つて歩き、夜も晝も區別なく、學問の時だらうが、管絃の遊びのときだらうが一緒になさる。それで才能智識の點では中將はまあ〳〵源氏の君に負けなさることがない。斯く源氏の君が何處に行かれるときでも中將は離れず御伴をなさつてゐられる間に、自らすつかり馴れて仕舞ひ、遂には何等の遠慮も隔てもなくなつて、心の中に思ふことは少しも隱し包まれず、すつかり話してしまふといふ程に仲のよい間柄となられた。

補　○宮腹の中將――父は左大臣、母は桐壺の帝の御妹で、源氏の君の正妻である奏の上の兄にあたる。故に源氏の君から言ふと、從兄弟で小舅にあたる。この中將は桐壺の卷では、藏人少將と申した方が殿進して今は中將となられたので、世に頭中將と申す方である。

○徒然と降り――退屈さうに靜かに。
○しやめかに――氣も沈む程靜かに。
○御宿直所――源氏の。
○例よりは――ふだんよりは。
○長閑やかなる――ゆつたりとしてゐる。
○御殿油――油火の燈火をいふ。
○近き――傍の。
○御厨子――坐の傍に置きて、書畫や調度などを載せ置く物。櫃に似てゐるが、棚もあり鎧戸もある。
○いろ〳〵――色紙なる艶書――艶書は色紙に書くものであるから斯く言つたのである。
○わりなく――わけもなく無性に。
○然りぬべき――差支の

評　ここに頭中將を點出して、その才能の絶倫なるを說き、源氏と相伴つてその擧動を描寫しながら、然も源氏に一步を讓つて、源氏の君の優つてゐられるところを精寫するに力めてゐる。

徒然と降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさ〳〵人少なに、御宿直所も、例よりは長閑かなる心地するに、御殿油近くて、書どもなど見給ふ序に、近き御厨子なる、いろ〳〵の紙なる艶書どもを引出でて、中將わりなく床しがれば、「然りぬべき、少しは見せむ。片端なるべきもこそ、」と許し給はねば、「その打解けて傍痛しと思されむこそ床しけれ。おしなべたる大方のは、數ならねど程々につけて、書き交はしつつも見侍りなむ。各自怨めしき折々、待ち顏ならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ。」と怨ずれば、やむごとなく、切に隱し給ふべきなどは、斯樣に大ざうなる御厨子などに、打置き散らし給ふべくもあらず、深く取り置き給ふべかんめれば、これは二の町の心易きなるべし。

解　雨がしと〳〵と靜かに降つて退屈な、しつとりとした宵の頃、殿上では物忌のためにまあまあ人々も少く、源氏の君の居られる御部屋でも、何時よりはゆつたりとした心地がする時、源

○片端なるべき――見苦しいものもあるだらうがそれは見せられぬ。
○その打解けて――打解けた書き振りで。
○傍痛し――他人に見せると迷惑だ。
○おしなべたる大方のは――普通ありふれた平凡な艶書は。
○數ならねど――私（頭中將）の如きは人數に數へられぬほどのつまらない者だが。
○程々につけて――身分の程度に應じて。
○書き交はしつつ――女と艶書を交換して。
○おのがじし云々――相手の女どもが、それ〴〵に男を怨んでゐる時のものや、或は又、男の來るのを待つてゐる夕暮方に書かれた艶書こそ見ても面白だらう。
○やむごとなく――尋々ならぬ。

氏の君と頭の中將とは、燈火の下で共々に書見をしてゐられた。するとその庚に頭中將は源氏の君の傍近くにある御厨子の中の、いろ〳〵な色紙に書かれた艶書などを引き出し、わけもなく面白がつてゐるので、源氏の君は「見せても差支のないものは、少しは見せてもよいが、見苦しいものもあるだらうが、それは見せられない。」と言つてお許しにならぬと、頭中將が言ふには、「女の方で打解けながら思ひのままを書いた艶書で、他人に見られては甚だ迷惑だと思召しになるものこそ、見せていただきたいものである。普通ありふれた平凡な艶書ならば、私の如き物の數にもならぬつまらない者でも、身分に應じて女と交換して見ることも出來るでせう。相手の女どもが男の冷淡なのを怨んでゐるときの手紙や、或は又、男の來るのを待つてゐる夕暮などに問えながら認めたものこそ、見ても面白いところがありませう。」さあどうぞ隱くさずに見せて下さいとしきりに怨んでゐる。もとより並々ならぬ大切な艶書で、非常に隱しなさるものは、このやうな取り締りのないなほざりな御厨子などに、源氏の君が置きちらかし給ふべきものではない。そのやうな秘密なものは人目の屆かぬ所に隱してゐらるべき筈であるから、この厨子などにある艶書は、まあ第二流位の艶書で人に見られても心配のないものでありませう。

補　○大殿油――御殿油とも書く、オホトナブラとよむ「オホトノアブラ」の約言である。古書、殿上に點じた燈火をいふ。延喜式に「大嘗會悠紀主基二國、進二大殿油二斗一。」とある。
○御厨子――御厨子棚のこと、略して厨子ともいふ。もとは御厨子所にて調理した食物を納め

○切に――非常に。
○大ざう――なほざりで取り締りのない。
○二の町――二流のもの。あまり大切なものでないもの。
○心易き――他人に見られても、差支のないもの。

て置く棚であつたのが、器物や草子などを載せて置くに便利なところからして、後になつてはこれを美しく作つて、貴人の坐側に置くやうになり、二階棚のやうになり、扉があつて両開きのものとなつた。○二の町――二の町と云へば、第一流の繁華な立派な町のことである。二の町はそれにつぐ町といふことで、今日の第二流といふ意にあたる。

評　ここには當時の通人間に用ひられてゐた通語の「大ざう」とか「二の町」の語が出てゐて面白い。「大ざう」の語の解釋については、古來學者間に區々たる説があつて一定しない。詳しくは源注餘滴にあらはれてゐる。

○片端づつ見る――艶書を一一全部讀むなど爲ないで、ほんの一部づつ讀むのである。
○斯く樣々――中將の言である。
○心當に――あて推量で。
○持離れたる――無關係なことまでも、戀に關係があるやうに。
○なかし――源氏の君がなかしく思はれるのである。
○兎角紛らはし――中將の言ふことを、源氏は何

片端づつ見るに「（頭中將）斯く樣々なるものどもこそ侍りけれ」とて心當に「其れか」「彼れか」など問ふ中に、言ひ中つるもあり、持離れたる事をも、思ひ寄せて疑ふも、「をかし」と思せど、言少なに、兎角紛らはしつつ、とり隱し給ひつ、「（源氏）其許にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなむこの厨子も快く開くべき」と宣へば、「（頭中將）御覽じ所あらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふついでに。

評　中將はそこにある艶書どもを「一一手に取つて見ながら「斯くいろ〳〵な種類のものがありますね。」と、自分の心であて推量に、この艶書はあの人のですか、それとも他の彼の人の[illegible]の

とも判然した返事をしないで、ごまかして、ゐること。
○とり隱し――中將の見てゐる艶書を取つて隱しなさること。
○其許にこそ――中將の許にこそあるだらうと源氏が仰せられるのだ。
○さてなむ――中將が見せて下さるならば。
○御覽じ所云々――中將が言ふには、私が藏してゐる艶書の中には、源氏の君などの御覽になるやうな價値のあるものは少ない。

○女の此れ云々――中將の言である。
○此れはしもと――此れは批評のない完全な女だと思はれもの。
○滿々なむ見給へ知る――いろ〳〵な女に接するうちに、やうやく悟りました。
○はしり書き――すらすらと達筆なるをいふ。
○折節の答へ――その時〳〵に應じての返書をうまく知つてゐる。
○自分に宜しき――その人相當にまづ〳〵宜い。
○我が心得たる――各々得意としてゐる藝能。
○心を遣りて――氣を喞らして得意となつて。
○持崇めて――娘を大事にすること。
○生先籠れる――娘が春秋に富みて深窓にあるをいふ。
○片才――智かな才藝を知つてゐること。
○おほどき――あどけなき。
○紛るる事なき程――親の世話になつてゐて、他に何も忙しい事のない時。
○果敢なきすさび――一寸したなぐさめ。
○心を入るる――熱心にですかなどと問ひたづねなさる中には、うまく言ひ當てなさるものもあるが、又關係のないことまでも、關係せしめてとんでもないことを想像なさる。源氏は中將の言ふのを可笑しいと思つてゐられるが、それに對して何とも返事をなさらず、言葉少なに兎や角言ひながらごまかし、そのうちに中將の見てゐる艶書どもを、隱してしまひなさつた。偖て源氏は中將に向ひ、「貴君こそ澤山の艶書どもを集めてゐられるだらう。少し見たいものである。若しそれを見せて下さるならば、それこそこの厨子をも氣持よく、すつかり開いて貴君に見せませう。」と仰せられた。すると中將は「いや〳〵私共の如き身分の所には、源氏君の御覽になるやうな價値のあるものはありますまい。」と申し上げ、その話の序に、中將は言葉をついで、下の如きことを語りだした。

評　「をかしと思せど言少なにて兎角紛らはしつつ、取り隱し云々」まことに靜かな貴公子らしい源氏の態度があらはれてゐる。俗な人であるならば、このやうなことを尋ね問はれた時、得意になつたり、きさな言ひ振りで喋々としやべり散らしたがるものである。これからいよ〳〵源氏の君と頭中將の女に對する批評に入る。

（頭中將）「女の此れはしもと難附くまじきは、難くもあるかな」と漸々なむ見給へ知る。唯表面ばかりの情に、はしり書き、折節の答へ心得て打爲などばかりは、隨分に宜しきも多かりと見給ふれど、そも實に其方を取り出でむ選びに、必ず漏るまじきはいと難しや。我が心得たる事ばかりを、各自心を遣りて、人をば貶しめ、傍痛き事多かり。親など立添ひ持崇めて、生先籠れる窓の內なる程は、唯片才を聞傳へて心を動かす事もあめり。容貌をかしくうちおほどき、若やかにて紛るる事なき程、果敢なきすさみをも、人眞似に心を入るる事もあるに、自ら一つ故づけて爲出づる事もあり。見る人、後れたる方をば言ひ隱し、さてありぬべき方をば繕ひて、眞似び出だすに、「其れ然かあらじ」と、空に如何は推量り思ひ朽さむ。「眞か」と見もて行くに、見劣りせぬやうは無くなむあるべき」と、呻きたる氣色も恥かしげなれば、

評　頭中將、「私はいろ〳〵の女に遇ふて話を交へたが、それから察すると、女といふものの中にはこれこそ無難なよい女だと言はれる女は、なか〳〵無いものだといふことを知りました。唯だ表面だけは愛情のあるやうな女で、手紙一枚書いてもすら〳〵と達筆に書き流し、春の花秋の月、其他時節々々の應答などは知つてゐて、相當にやつて行く位は隨分可なりにするものも多くあるやうに見えるけれども、その筆蹟なり、應答の文や歌を、その方の專門の見地から見て、善惡を選定しようとすると、立派なものであるとの選に入るものは甚だ少いことであるわい。普通の女は自分のよく知つてゐることばかりを、各自が得意さうに吹聽し、さうして他人が自分と同じい藝のことを知らないと、よしその人がそれ以外のことに達してゐても、自分の

やること。
○一つ故づけ――或る一つの藝を大抵出來るやうになる。
○後れたる方――下手な方面。
○言ひ隠し――隠して言はないこと。
○ありぬべき方――よいと思はれる方面をば。
○錆ひて――言ひ飾つて。
○眞似び出す――その有様のままを言ひ傳ふるをいふ。
○空に――漫然と、根據もなしに。
○思ひ朽さむ――批難しようか。

藝を標準として批難し、傍に聞いてゐても聞苦しいやうな事が多い。又親などが始終身邊に附き添ふて大事にしてゐる箱入れ娘で、娘はまだ若く春秋に富むといふのが、深窓の中に育てられる場合がある。深窓の箱入娘故に世人は勿論娘についての詳細なところは分らない。唯噂などに娘の何か一藝に達してゐると聞き傳へると、さては餘程立派な女であらうなどと心を動かす者もあるやうだ。容貌もよく、性質も應揚で若々しい時は、忙しい家事といふものもないから、一寸とした遊びごとを、最初は眞劍でやるといふこともなく、他人の眞似をするやうにやつてゐると、自然或る一つの藝が相當に出來るやうになる。するとそれを見聞する世人は女の短所の方面は言はず、よいと思はれる方面を飾り立てて言ひ立てるからして、聞く人は「さんな女にそのやうな事があらうかないだらう。」と、ぼんやりと、どうして批難が出來ようか、批難するわけには行かぬ。それならばと言つて眞に優れた偉い女かと思ふて觀察すれば、見れば見る程つまらない所があるものである。」と、長歎息して語りだす頭中將の話振りは、傍に聞いてゐられる源氏の君も恥しくなる程、よく其の方面のことを話した。

補 ○漸々なむ見給へ知る――このところの「給へ」は下二段活用の動詞で、先方の動作を尊敬するために、自己の動作につけるのである。他人の動作を尊敬するために、他人の動作につける「給ふ」は四段活用の動詞である。○隨分――この語は今日は、甚だとか、非常に、可なりの意に用ひるが、當時はまだこの文字通りに、分に隨つて、身分相應にの意味が餘程強く含まれて用ひたものである。白樂天の詩に「蓬蒿隨分有二榮枯一。」の如し。

○いと並べては――すつかり全部といふわけではないが、と中將の言についての源氏の君の胸を推して書いてゐる。
○いと然ばかり――そのやうに片才もないやうな。
○すかされ――あざむき誘はされること。
○取る方なく――認むべき長所のないこと。
○口惜しき――不完全で殘念に思ふこと。
○優なりと覺ゆ云々――これは實にすぐれてゐると思はれる程すぐれてゐること。
○數等しくこそ――最上のものと最下のものとは共に少いもので、中位のものが最も多いことをいふ。
○品高く――門閥權門の家に生れると。
○漏るる事多く――高き

評 「我が心得たる事ばかりを、各自心を遣りて云々。」の句は眞に世相の一面を捉へてゐる。

いと並べては有らねど、我も思し合はする事やあらむ。打微笑みて、「其の片才も無き人はあらむや」と宣へば、「いと然ばかりならむ邊には、誰かはすかされ寄り侍らむ。取る方なく口惜しきと、優なりと思ゆばかり勝れたるとは、數等しくこそ侍らめ。人の品高く生れぬれば、人にもてかしづかれて、隠るる事多く、自然に其の氣情此上なかるべし。中の品になむ、人の心々各自の立てたる趣も見えて、わかるべき事かた〴〵多かるべき。下のきざみといふ際になれば、殊に耳立たずかし。」とて、いと隈なげなる氣色なるも懷しくて、

釋 頭中將がいろ〳〵と語りだす話を聞いてゐると、その話の全部ではないが、ところ〴〵自分にもなるほどと思ひ當る所があつたのであらう。源氏は微笑を漏らしながら、「所謂少しも才藝のない無才の女といふものはあるものだらうか。」と仰せられると、頭中將曰く、「まあそのやうな無能無才なる女のところへは誰が接近しませうか、大體世の中には何等の長所をも持たぬ程下等な女と、是れは實に十分にすぐれた、何一つの缺點がないといふやうな女とは兩方とも極く少數で、さあ同等位であらう。大多數は中位の女である。高い家柄に生れた者は、附添の侍

家柄に生れるならば、附添の者に崇められて、缺點なきの現れないことをいふ。
○きざみ――等級。
○いと隈なげなる氣色云々――中將が隅から隅まで、漏らさず知つてゐるやうな樣子であつたからして、源氏も聞きたくなつたのである。
○元の品高く――生れたもとの素性は高貴でありながら。
○身は沈み――零落して。
○位短く――位階の低きこと。
○人氣なき――人の數にも入らぬやうに。
○なほ人――唯人のこと卽ち普通の身分の人。
○我は顏にて――得意さうな顏をして。
○左馬頭――左馬寮の頭(長官)ないふ。
○藤式部――藤原氏で式部省の丞(第三位の官)にある人。
○世の好色者――當世の通人。
○物よく言ひ通れるを――深く細い所にまで行き亘つて物を言ふこと。卽ち應酬の上手な。
○待ち取りて――待ち受けて。喜び迎へて。
○定め爭ふ――論じ爭ふこと。
○成上れども――公卿にまで立身すれども。
○世の人の思へる事も云々――このところ「然は言へど世の人の思へる事

女どもに大切に世話されてゐる故、本人の短所は隱くされる事が多い。隨つて自然とその人の樣子も非常にゆかしくなるのだらう。中位の女になると各自の心には各自の特徴や性格を隱すことなく現はしてゐるから、その間に等級區別が澤山出來るわけである。又下等な女になると特別に問題にする程なところがない。」などと、何から何までも知つてゐるやうに喋舌り散らすのでさすがの源氏も、もつと詳しく聞きたいなといふ氣になつてゐられる。

補　○耳立たず――他からあれやこれやと聞いても、聞きたいやうな感じがしないこと。自分では問題にしないこと。

「その品々や如何に、いづれを三の品に置きてか分くべき。元の品高く生れながら身は沈み位短くて人氣なき。又直人の上達部などまで成り上りたる、我は顏にて、家の內を飾り、人に劣らじと思へる、そのけじめをば如何分くべき。」と問ひたまふほどに、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らむとて參れり。世の好色者にて、物よく言ひ通れるを、中將待ち取りて、この品々を辨へ定め爭ふ。いと聞き憎き事多かり。

評　源氏の君が仰せられるには、「今、頭中將の仰せられた女についての、上中下の三等級といふのは、一體どういふのを申すのでありますか。どういふやうなのが三等級に分類ができるのか。

先づ生れたもとは高貴な家柄であつたが、その後だん〳〵と零落し、位も低くなつて人の數にも數へられぬ程になつた人と、それから又家柄が立派だといふことのない普通の人でありながら、遂に立身して公卿にまで成功し、得意顏になつて、家の內を堂々と飾り立て、決して世人に劣るまいと自慢してゐるものと、この二つの者は共に家柄のよい者の中に入れるわけには行くまい。からと言つて中位の中にも下位の中にも入れられないが、是等は一體どのやうに區別してよいだらうか。」と答ひ質してゐられる處へ、左の馬頭と藤式部の丞といふ二人の者どもが物淋しい物忌みの折柄、源氏の君の部屋に參上し、話でもして慰めようと思つて來たのである。是等二人の者共は所謂通人で坐談の上手な男であつたから、折柄中將は喜んで二人の者共を迎へになり、女についての上位中位下位の三等級の辨別につき議論が開かれた。この時は甚だ聞きにくい事どもが多く論ぜられた。

評　「この品々を辨へ定め爭ふ。いと聞き憎き事多かり。」といふのは、作者が左の馬頭、藤式部の丞に託して語ることどもが、あまりに聞き憎いことであるので、第三人者の地位に立つて斯く言つたのである。

「成上れども、元よりさるべき系ならぬは、世の人の思へる事も、さは言へど猶ほ異なり。又元はやむごとなき系なれど、世に經る便少く、時世移ろひて、覺衰へぬれば、心は心として事足らず、惡びたる事ども出で來るわ

も異なり。」と語句を顚倒して考へる方がよろし。
◎世に經る僅少く――世渡りをする上の援助者が少いこと。
○時世移ろひて――時勢が變遷して。
○覺衰へぬれば――世人の人望がだん〳〵と無くなつて。
○心は心として云々――心だけは往者のやうに上品に暮らしたいが、貧しいからして思ふやうにならぬ。
○惡びたる事――見苦しい事。
◎とり〳〵に――それぞれに從つて。
○ことわり――判定して。
○受領――諸國の守のこと。
○他の國――京からして地方の國をいふ。
○きざみ〳〵――諸種の階級。
○怪しうはあらぬ――惡くはない。
○頃ほひ――程度。
○なま〳〵――なまじかなこと。生々の義で未熟のことから出た語。
○非參議の三四位――まだ參議にならない三四位の人をいふ。
○元の根ざし――素性。
○安らかに――職務上責任も輕やかに。
○かはらか――さわやかに。清爽に。
○省かず――節約せずに。
○賑はしきに云々――すると女の品定めは、すべて富によるものであるやうだ。
○異人のやうに――源氏の君の仰せられることとも思はれぬ、わけの分らぬ事を仰せられることだと、中將が言ふのである。

ざなめれば、とり〳〵にことわりて、中の品にぞ置くべき。「受領といひて、他の國の事に拘ひ營みて、品定りたる中にも、またきざみ〳〵ありて、中の品の怪しうはあらぬ」、えり出でつべき頃ほひなり。なま〳〵の上達部よりも、非參議の三四位どもの、世の覺口惜しからず、元の根ざし卑しからぬが、安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の內に足らぬ事など將た無かめるままに、省かず眩きまでもてかしづける女などの、貶しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひ懸けぬ幸ひ取り出づる例ども多かりかし。」などいへば、「すべて賑ははしきによるべきななり。」とて笑ひ給ふを、「異人のいはむやうに、心得ず仰せらる、」とて中將にくむ。

補 左馬頭曰く「いくら公卿まで成功しても、元來が公卿になるべき素性でない者は、口では公卿だと言つて褒めるけれども、世人のこれに對する敬意が違ふものである。又元來は高貴な家系であつたが、世渡のたよりとすべき援助者も少く、時勢も變遷してしまひ、世人の人望も漸次衰へてくると、心だけは往時の榮華時代のやうに上品なことを考へてゐるけれども、衰へて貧しくなつた今日は不自由で思ふ通りにも出來ず。見苦しい事までもやるやうになる。故に源氏の君の提出せられた二つの場合は、各々判定した結果、中位の女に屬すべきである。但し玆處に受領(國守)なるものがある。彼等は地方の國々の政治に關係し、一階級を形成してゐるが、その國守の階級の中にも又いろ〳〵な階級があつて、受領といふ一階級の中からでも、中位の地位中でもよい方の女を見出すことの出來るやうな時勢である。勢力名望の少しもない微弱な公卿よりは、寧ろ參議にもまだなれない三四位の者で、世の人望も十分にあり、生れつきの素性も相當よい者が、氣樂に生活をしてゐるのは、見てゐると甚たさわやかに氣持のよいものである。斯樣な受領は生活に何一つの不自由も感ぜないから、少しも節約をせず照りかがやく程派手に育てる娘がある。このやうな娘はなか〳〵立派なものとなつて、批難のないよい女が澤山あらはれるやうになる。その中には宮中に宮仕をし、時によると皇子を誕生するなど思ひ懸けぬ幸福をとる前例も澤山ある。」などといふと、源氏の君はそれをお聞きになり「さては女の等級は富の如何によつて定むべきやうなことになる。」とあざけり笑ひなさる。中將之を聞き、「左馬頭はそのやうな意味で仰せられたのではない。通人でゐられる源氏の君の仰せ言とも思はれぬやうな、譯のわからぬことを仰せられることかな。」と言ひ憎んだ。

補 ○非參議――(一)三位以下にして未だ參議とならぬもの。(二)四位にして一度參議となつたもの即ち前參議をいふ。(三)四位でありながら、參議たるべき資格ばかりで未だ參議とならざるもの、只今の「非參議の三四位ども云々」は第三の場合の意である。公卿補任によると和銅

○元の品――門閥とか素性をいふ。
○時世の覺――その時の世望をいふ。
○内々のもてなし氣情――内々は家の内のものでここでは女をさす。立派な家の娘で、身のとりなし、風姿の劣つてゐること。
○更にもいはず――言ふにも及ばず。
○何をして斯く――世人が思ふには、どうして斯く下品に育つたのであらうか。
○言ふ甲斐なく――言つたとて仕方がない。
○うち合ひて勝れたらむ――門閥素性と娘の品位とが一致して立派であること。
○これこそは然るべき――これこそは當然なことだ。
○上が上は打置き云々――上の上に屬するやうな女についての批判は、私どもが言ふべきでないから止めて置く。
○らうたげ――可憐な。
○思ふより違へる事――存外に思はれる。
○怪しく――不思議に。
○心留る業なる――心が引きつけられる。
○物むつかしげ――不愉快に思はれるやうな無細工なこと。
○思ひ遣ゝ異なる――格別にも思はれない。
○いと甚く思ひあがり――氣高く身を持してゐること。
○故なからず――立派なところがある。
○然るかたに――それは又、その方面のよいものとして。

二年の條に「非參議從三位長屋王、十一月一日叙。」とあるのが非參議の始めである。

○受領――故實秘抄に「受領とは諸國の守に任じて其國にくだりて、其國の事を知るをいふ。近國は一任四ヶ年、太宰府陸奥出羽國の遠國は五ヶ年にてかはるなり。承和二年の格文に見えたり。承和以往の例はたび〳〵ありて定まらず。」と。

「元の品、時世の覺うちあひ、やむごとなきあたりの、内々のもてなし氣情、後れたらむは、更にもいはず、何をして斯く生ひ出でけむと、言ふ甲斐なく覺ゆべし。うち合ひて勝れたらむも道理、これこそは然るべきことと覺えて、珍らかなる事と心も驚くまじ。某が及ぶべき程ならねば、上が上はうちおき侍りぬ。さて世にありと人に知られず、淋しく荒れたらむ葺の門に、思ひの外にらうたげならむ人の、閉ぢられたらむこそ、限なく珍しく覺えめ。いかで將たかかりけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心とまる業なる。父の年老いものむつかしげに肥り過ぎ、兄の顏憎げに、思ひ遣り異なる事なき閨の内に、いと甚く思ひあがり、果敢なく爲出でたる事技も、故なからず見えたらむ、片才にても如何思ひの外にをかしからざらむ。すぐれて瑕なき方の選びにこそ及ばざらめ。然るかたにて棄て難きものをば、」とて式部を見やれば、

左馬頭は更に言葉をつづけて語りだすには「門閥素性も、當時の世望も兩方共に揃つて堂々たる家に生れた娘でありながら、娘の平素の身のもてなし、氣品が劣つてゐるのがある。このやうなものになると、言ふまでもなく世人も「どうしてあんな下品に育つたのだらう。」とつまらなく考へるだらう。若し又そのやうな門閥素性世望共に立派な家に生れ、それ相當に娘の品位も高いのは、これは當然な事で、誰でも「かうなるのがあたり前の事だ。」と考へる。決して「これは珍しい事だ。」などとはびつくりしない。斯く素性といひ世望の高い高貴な方々のことは、私共の彼れ此れと批評すべき事でないから、上の上に屬する部類の女についての議論は止めます。偖てこれとは全然反對に、世上には存在すら認められないで、淋しく荒涼とした葺の生ひ茂つてゐる門の中に住んでゐる女がある。この種の女で意外に可憐な女が淋しい侘び住居をしてゐるのこそ、限なく珍しい感がする。「まあこんな美しいよい女が、どうして斯くの如き荒涼たる家の中に居るのであらうか」と意外の情に驚くと共に、不思議にもその女に心が引きつけられることである。今言つたのは貧家の娘の話であるが、假令貧家でなく相當な暮しをしてゐる家にでも、父は最早老人となつて不體裁な體格をなし、兄といふ人も、厭にきたない顏をして、一見したところ憎らしく思はれる容貌である。こんな人達の住む家なら格別なところも

○我が妹どもの――このところ藤式部が言ふのである。
○宜しき聞え――可なりなよい女だとの評判。
○物も言はず――兄の顏憎げになどと自分のことをあてつけて言つたものとして腹を立てて藤式部が何も言はぬのである。
○いでや――さあどうだらう。
○御衣――ここでは下着

ないだらうと思ふ家に、時とすると大變氣高い志を持つた女がゐる。その女が一寸した技藝を爲ても、立派なところが見える。この種の女は、その藝は假令あらゆる手藝、學問に亙つてゐるのではなく、單なる一藝に勝れてゐるのとしても、どうして格別な趣のある女と言はざるを得ようか。この二種類の女はこのやうな趣のある女として棄て難いものである。」と言つて、藤式部の丞の方に眼を向けた。

評　「荒れたらむ葬の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむ云々。」とあるのや「父の年老い物むづかしげに肥り過ぎ云々、いと甚う思ひあがり云々」と書いてゐるのによると、紫式部といふ作者は些細なところにも美を見出す才能があつた。

「我が妹どもの、宜しき聞えあるを思ひて宣ふにや、」とや心得らむ、物も言はず。「いでや、上の品と思ふにだに、難げなる世を」と、君は思すべし。「白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりを、しどけなく着なし給ひて、紐なども打棄てて、添ひ臥し給へる御火影いとどめでたく、女にて見奉らまほし。この御爲には、上が上を選り出でても、なほ飽くまじく見え給ふ。」

講　藤式部が思ふには「自分の妹には可なりな評判のよい女がゐるから、それを思ふて左馬頭が「兄の顏憎げなに云々。」と我が章にあてつけたことを言つたのであらう。」と考へられたのであ

○なよよか――なよ〳〵として柔かなるないふ。
○直衣ばかり――下襲を脱ぎて、直衣ばかりを召したのである。
○しどけなげに――だらしなく、締りなく。
○添ひ臥し給へる――臂をつけて横に臥すことをいふ。源氏の君のうたたれ姿を燈火のもとで見るのである。
○女にて見奉らまほし――所謂女として見たいやうに思はれる。
○この御爲には――この源氏の君の妻としては、上の中の上の種類に屬する女を選んでも。
○なほ飽くまじく云々――それでもまだ物足らぬやうに思はれる。
○大方の世につけて――左馬頭の言で、大體世間向きの女として見るときはの意で、自分の妻とし

るかと思ひ、立腹して何も言はずにゐる。すると源氏の君は「左馬頭はさういふが、さあどうだらうか、高貴な家にさへも相當よい女はありにくいものであるのに、そんな低い家柄の所によい女がゐるかしら、左馬頭の言ふことはよい加減なことだらう」と思ひたされて、眞面目に傾聽なさるやうなことはない。さうして白い下着の柔かに着馴れてしまつた上に、下襲も着ずに直衣だけを、ふうわりとだらしなく着、紐なども結ばずに臂をついて横臥してゐられる。この源氏の君の姿を燈火のもとで見ると、實に美しい方で女として眺めたい氣持がする。斯くの如き美男子でゐられる源氏の爲めには、上品な女の中でも上品なよい女を選擇して配した所で、それでもまだ不滿足のやうに思はれる。

評　左馬頭が滔々と論ずる婦人論も隨分ながつたらしくなつたので、讀者は嫌厭の情をそろ〳〵感ずるやうになつた。そこで作者紫式部は、源氏の君のゆつたりとした公達らしい風姿を描いて、文に變化を求めたのである。又、この雨夜の品定めは源氏の君が主となり、頭中將と語つてゐられたのであるが、そこへ何の遠慮もなく、快活な左馬頭と藤式部が入り込んで、遂には左馬頭が主人公となつて騷しく論じてゐる。然して眞の主人公たるべき源氏の君は却つて、聞かないといふ風をして、うつら〳〵と眠つてゐられる所は構想の面白いところである。

さま〴〵の人の上どもを語り合はせつつ、「大方の世につけて見るには咎なきも、我が物とうち賴むべきを選ばむに、多かる中にも得なむ思ひ定むま

てではない。
○答なきも――別に批難すべきところはないが。
○我が物と――自分の妻として。
○多かる中にも――世上多くある女の中でも。
○公に仕う奉り――公の官職について。
○はか〳〵しき――しつかりとした。
○世の固となる――國家重要の柱石の臣となる。
○眞の器となる――眞に才能のある人物。
○然れど賢しとても――如何に賢者だと言つても――一人や二人で政をとるべきでないから。
○上は下に助けられ云々――上官に立つものは、下の者を輔け、下の者は上の者に服從して。
○事廣きに――天下の政は廣大なものといふが、諸人が互に讓り合つて力を合するのだから至難なことではない。

じかりける。男の公に仕う奉り、はか〳〵しき世の固となるべきも、眞の器となるべきを取り出さむには難かるべしかし。然れど賢しとても、一人二人世の中を政ち知るべきならねば、上は下に助けられ下は上に靡きて、事廣きに讓らふらむ。狹き家の内の、主婦とすべき人一人を、思ひめぐらすに、足らはで惡しかるべき大事どもなむ、方々多かる。「とあれば斯かり、合ふさ離るさ」にて、斜にさてもありぬべき人の少きを、好色々々しき心のすさびにて、人の有樣を數多見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべき寄邊と爲ばかりに、同じくは我が力入りをし、直し引繕ふべき所なく、心にかなふやうもやと、選り始めつる人の、定まり難きなるべし。

補　源氏の君はうつら〳〵と横臥してゐられるが、他の三人の者共はいろ〳〵な種類の女のことどもを論じあつてゐる。先づ左馬頭が言ふには「大體世間普通の女として見るならば、どのやうな女にも缺點はないが、いよ〳〵自分の妻となし、萬事を依頼すべき女を選定しようとすると、澤山の女の中でもなか〳〵選定される女はないものである。これは女子に限つたことばかりでは無く、男子でも國家の官職に仕へ、しつかりとした國家柱石の臣ともなるべき才能のある人物を選拔することも、矢張むづかしいことである。然しながら國家の政治といふやうな廣

○とあれば斯かりあふさきるさ――世の中のことはこれでよいかと思へば彼のことで困ることがあり、あれにつきこれにつき、何か缺點があるをいふ。
○斜にてさてもありぬべき云々――缺點があり不自由ながらも、それで我慢しようと思ふ人。斜はゆがんでゐること。
○好色々々しき云々――浮氣心の慰めで。
○ひとへに思　定むべき寄邊――ひたすら我が妻として信頼すべき女。
○我が力入りをし――自分が力を入れて女の缺點を匡正することもない。

大たものになると、如何なる賢者だと言つても一人や二人のものによつて、政治が成られるものではなく、上官はあまたの屬官どもに輔けられ、屬官どもは長官に服從し、多くの人の手により分擔せられて行はれるものである。故に一人の責任でないだけ氣樂なところがある。然し家政のことになると然うは行かない。萬事主婦たるべき人が取り計はねばならぬ。故にこの點から眺めると主婦は天下の政治をとる官人よりも、困難な位置にある。さてどういふ人を主婦とすべきかと考へて見ると、主婦として必要缺くべからざる條件が、あれやこれやと澤山出てくる。ところが何時の場合でも、長所があれば短所があるといふやうに完全な女は求められない。まあ不十分ながらも此れ位のところで我慢しようとする女でさへも極く少いのだから、浮氣心の慰め半分で、女の樣子をあまた比較批評しようといふ不眞面目な好奇心ではないが、ひたすら吾が妻として信頼し、たよるべき女が欲しい。それで同じく妻を娶るとするならば、妻にいろ〳〵と指導をしたり、教へなくてはならぬやうな缺點もなく、最初から夫の心にかなつた妻をと選擇し始めるとどうしても妻たるべき女を定めることがむづかしいやうだ。

補　○とあればかかりあふさきるさ――古今集俳諧歌に「そへにとてとすればかかりかくすればあないひ知らずあふさきるさに」とある歌の句によつて書いたものである。歌の意は「それならばといつて一つの考へを定めてやつて見ると、一方に支障が起る。それならばと考へを改めて他の方法でやつて見ても又そこに支障が起る。まあ世の中の事は何につき彼につき支障のあることだ。」の意。

○見そめつる――ふと女と知り合ひとなつて夫婦となつた約束を。
○ものまめやか――ものは接頭語で、眞面目なこと。
○保たるる女の爲も――夫婦の關係を保持して行く女のためにも。
○心にぐく――奥ゆかしいこと。
○されど何か――さうではあるが、どうか知ら大したこともないと、心にくく云々と言つてほめてゐた女を貶してゐる。
○心に及ばず――及び無きやうに思はるるなほふ。
○君たちの――源氏の君や、頭の中將をさしてゐる。
○上無き御選み――この上ないといふ極上等な女を選ぶ。

評 國家の政治と、一主婦の家政とを比べて、主婦の任務の重大で且つ多端であるを言つた比譬は、眞を穿つた斬新なものである。

必ずしも我が思ふに適はねど、見そめつる契ばかりを、捨てがたく思ひ止る人は、ものまめやかなりと見え、さて保たるる女の爲も、心にくく推量らるるなり。されど何か、世の有樣を見給へ集むる儘に、心に及ばず、いとゆかしき事もなしや。君たちの上なき御選びには、まして如何ばかりの人かは偶ひ給はむ。所狹く思ひたまへぬだに。

評 必ずしも自分の理想に適つたよい女だといふことが無くても、逢ひ見始めた當時の緣を重んじ、後となつても捨て難く、遂に夫婦となつてゐる人もある。かういふ男は實直眞面目な人とも見えるし、又あのやうにして夫婦關係が永く保持されてゐるところから見ると、その妻たる人も餘程よい所があるのだらうと心ゆかしく思はれるものである。とは言ふものの、廣い世間をよく眺めて見ると、これはどうもよい妻だとゆかしさの湧くよい女は事實無いものであるわい。斯く吾々の如き低い身分の者でさへ、妻を搜すといふことになるとなか〳〵むづかしいのである。然るにましてや、源氏の君や頭中將の如き高貴な方が、この上ないといふやうな極上等の妻を御選定なさるときには、どのやうな女がその選に入ることでありませうか。吾等の如く自由勝手にあらゆる世の中から搜しても、妻といふものは求められぬのに、君達の如くいる

○たぐふ――選に添ふ。
○所狹く思ひ給はぬだに――所の狹きの意より出でたる語で、不自由なこと。ここは貴人は身重々しくて萬のことがたやすくない。妻を選ぶにも貴人は容易なわけには行かぬ。我等の如き事むづかしくない身分でさへも妻を定めるのはむづかしいのだから、君達は猶更にむづかしい。
○塵もつかじ――少さな塵でさへも附けないといつて身のたしなみあるをいふ。

〳〵な條件をつけた狹い範圍で立派な妻を搜すとなると更に困難を感ずるのである。

評 この所の文章には古來、錯簡誤脱のあるものとして、意味のとりにくい所である。先づ廣道の說を引くならば、

試にいはば「所狹く思ひ給へぬだに」といふ事は無き本もあれば脱したることは論なし。此詞を上の「世の有樣を見給へ集むる儘に、」と云ふ下へ續けて見る時は、理り貫きて聞ゆるにつけて案ふに、もとは然かありけむを、二度おとして後に又書き入るる時に、二行ならびたる右の行へ書き入れたるを左の行へ入れたるぞと思ひ誤りて、後に又寫す人のこの所へ入れたるなるべし。物寫すには斯樣の事折々あるものなり。さてもなほ、「されど何か」といひたる事穩ならず。是は河海に、なにかは、なにがしといふ心とやうにいはれたる如く、もとは「なにがし」とありしを、文字を脱せるならん。斯くして見る時は、されどなにがし世のありさまを見給へ集るに所狹く思ひ給へぬだに心にも及ばずいと床しきことも無くや、まして君たちの上なき御えらみにはいかばかりの人かはたぐひ給はんと云意となりて事も無く聞ゆべし。ましては君たちの上にある意なり。

とあるが、最も適確な考察と思はれる。

容貌汚げなく若やかなる程の、各自は塵もつかじと身をもてなし、艶書を書けど、おほどかに言選をし、墨つき仄かに、心許なく思はせつつ、また

○おほどかに――おほやうに。
○言選なし――語句を推敲するないふ。
○墨つき仄かに――うすい墨でぼんやりと書き流すないふ。
○心許なく思はせ――男の方では、語句には趣があり、筆つきがぼんやりしてゐるので氣をもたすこと。
○さやかにも見てしがな――鮮明に書かれた手紙が欲しいものだな。
○すべなく待たせ――仕方ない程待たせること。
○僅なる聲聞くばかり――辛うじて女に接近する為。
○息の下に引入れ――話し聲を呼氣より小さくするをいふ。
○持隱すなり――女が自分の缺點を隱して、よい女のやうに見せる。
○なよびかに女しと――柔和な女らしい女だと。

「さやかにも見てしがな」と、すべなく待たせ、僅なる聲聞くばかりいひよれど、息の下に引入れ、言少ななるが、いとよく持隱すなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情に引籠められて、とりなせばあだめく。これを初の難とすべし。事が中に、斜なるまじき人の後見の方は、物の哀れ知り過し、果敢なき序の情あり、をかしきに進める方、なくてもよかるべしと見えたるに、又まめ〳〵しき理を立てて、耳挿み勝ちに、美相なき家刀自の、偏に打解けたる後見ばかりをして、朝夕の出入につけても、公私の人のたたずまひ、善き惡しき事の、目にも耳にも留る有樣を、疎き人にわざと打眞似ばむやは。近くて見む人の、聞き分き思ひ知るべからむに、語りも合せばやと、うちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしはあやなき公腹立たしく、心一つに思ひ餘る事など多かるを、「何にかは聞かせむ」と思へば、打背かれて、人知れぬ思出笑もせられ、「あはれ」ともうち獨言たるるに、「何事ぞ」など、あわつかに、さし仰ぎ居たらむは、いかがは口惜しからぬ。

解 容貌も美しく、年齢もまだ若い年頃な女が、各々一點の塵や埃をも身にはつけまいと身のた

○情に引籠められ――感情に左右せられ易くて。
○とりなせばあだめく――男の仕向けによつては浮氣もする。
○事の中に――のなすべき女の務めの中でも。
○斜なるまじき人の後見――女としては大概にして置かれぬ重大な夫の内助の方面。
○物の哀れ知り過し――物の情趣が感ずることの強きないふ。
○果敢なき序云々――一寸したことにつき情趣のあるないふ。花紅葉などに歌を詠み、琴を彈するなど。
○をかしきに――趣味の方に。
○まめ〳〵しき理――眞面目に立ち働く方針で。
○耳挿み勝ち――補欄參照。
○美相なき――美人でない。

しなみをなし、艶書など書くにしても、うるさいことは書かず、おほやうなさつぱりとした語句を用ひて、墨の具合もぼんやりと洒落れて書く。斯ういふ女の手紙を得た男は艶書には上品に情も籠つてゐるが、筆つきの分明しない所からして、何となく物足らぬ感じに打たれ、女の眞意もはつきりしないので、氣をいらだたせ、もつと鮮明に書かれた手紙が欲しいことだと仕樣のないほど待たさせられる。男がやうやくのことで女に接近する機を得、御簾を隔てて話を交へる時になると、女の方では呼氣よりも低い聲で話をし、然も言葉少なに語るのである。このやうにぼんやりとした態度を持してゐる女は、何となくゆかしい所があるもので、缺點短所などをよく隱すものである。大體柔和でやさしく女らしい女だと思はれる女は、情には脆く、從つて感情にはすぐ左右せられる。又男のやりかた一つで浮氣な挙動もする。斯くの如きは先づ女としての一つの批難すべき點である。女としてのなすべき務めの中でも、捨て置かれぬ大切なものは夫の内助であるが、この方面では趣味といふものは不必要と思はれる。あまり物の情趣を知り過ぎ、一寸したことの折にでも和歌を詠むとか、琴を彈ずるなどの情趣があり、趣味の方面に發達してゐることは不必要の方である。然しそれだからといつて、少しも趣味や情趣の理解がなくて、常に眞面目に家事のために働くといふ實直な方針で、頭の髪の美しいといふことなどは考へないで、額髪も耳に挿んで立ち働くことばかりを考へてゐる主婦で、親切な夫の世話ばかりをして趣味は少しも解せないといふ女もある。斯ふいふ女を持つてゐる夫は、朝晩の外出についても、公私に亘るの人の樣子についても、善き事につき惡しき事につき、い

○家刀自――主婦。
○人のたたずまひ――人の行ひの樣をいふ。
○疎き人に云々――他人に、ああであつたとか、かうであつたと話しが出來ようか出來ない。
○近くて見む人――妻をいふ。
○聞き分き思ひ知る――妻が夫の話を理解し、納得するをいふ。
○語りもせば――話し合ひたい。
○あやなき公腹立たしく――人の上のことで無闇と腹立つをいふ。あやなきは筋の通らないこと。
○あわつかに――あわてて。
○さし仰ぎ――妻がぼんやりと夫の顏を仰ぎ見ること。

ろ〳〵と見聞する事柄を、他人にことさら話しが出來ようか出來ない。矢張り吾が妻で淺趣味なところが無く、十分に聞き分けのある女と語り合つたならばよいがなあと思ひ出され、そのやうな女ならば面白からうと微笑も催されるが、實際斯くの如き趣味のない吾が妻のことを思ふと、なさけなくなつて涙が湧いてくるのである。若し又、人事で無闇矢鱈に腹が立つて、心中いろ〳〵の感が湧出することの多い時など、この感慨を妻に聞かせたとて分るものでないと思はれて、自然妻から離れ、庭などを眺めてゐると、人知らぬ思が浮んで獨り微笑を漏らすことがあり、或は嗚呼と長歎息を催すこともある。するとこの夫の樣子を見てゐた妻は「一體郎君はどうなさつたのです。何事があるのですか。」などと、あはて騒いで、夫の側に近寄り、夫の顏を仰ぎ見てゐるのは、妻に話した所で己れのこの感じは理解されないのだからと思はれて殘念なものである。

補　○僅なる聲聞くばかり――平安朝時代には餘程親密にならねば、男女が共に話を交すことが出來なかつた。男が女に可なり信ぜられた時は簾を隔てて女に逐ひ、話を交すのである。故に結婚以前の女には非常な權力があつたわけである。この場合も男がやうやくにして、簾を隔てて女と語るやうになつたことをいつてゐる。○耳挿み勝ちに――平安朝の婦女子は何れも皆、頭髪を垂れてゐたものである。特に左右に耳より少し前に、曾かな髮を垂れて、これを額髮といひ、女子の容姿の上からは艶なるものとされてゐた。實直に臺所の世話一方で働かうとする女になると、額髮など下げてゐるのが、うるさいから自然と耳のところに挿んで立ち働くこと

○子めきて――子供らしい所があつて。
○兒角引繕ひて――兒や角と妻の足らないところを教へ導いて。
○などか見ざらむ――どうして、そのやうなことを爲ないだらうかするの意。
○心許なぐとも――しつかりとしたところがなく不安であること。
○立離れては――夫が妻と分れては。
○然るべき事――さしあたつての用事。
○折節に爲出でむ業――時々に起る用事で爲すべき事をいふ。

になる。

評　實に用意周到な論じ方である。然かもその言ふところ、往時のこととは少しも思はれない。何れも現今の時勢に於ける婦人論としてもそのまま當嵌る。現今の青年男女は宜しく、このところを一讀再讀し、大に考慮をめぐらして宜しかるべしと思ふ。このところ紫式部の慧眼微を盡し、情を現はして餘蘊なし。さすが文名に恥ぢざるものがある。

ただひたぶるに子めきて、柔ならむ人を、兒角引繕ひては、などか見ざらむ。心許なくとも、直し所ある心地すべし。げに差向ひて見む程は、さてもらうたき方に、罪免し見るべきを、立離れては、然るべき事をもいひ遣り、折節に爲出でむ業の、あだ事にも、まめ事にも、我が心と思ひ得ることなく、深き至なからむは、いと口惜しく、頼もしげなき咎や、猶ほ苦しからむ。常は少し側々しく心づきなき人の、折節につけて、いてはえするやうもありかし」など、「隈無き物言も定めかねて、甚く打歎く。

釋　又女の態度が子供らしく可愛い所があつて柔味なのを妻とする人もある。かういふ女は假令足らない所があるとしても、夫が教へ導いて可愛つてゐるものである。只だ子供らしいので何となく危かしい所もあるが、それ等の缺點は今後直して行けば直されるやうに思はれる。成程

○あだ事にもまめ事にも――一寸した閑事でも、重要な事でも。
○我が心と思ひ得る云々――自分の考で處置することが出來なくて。
○深き至――深い思慮。
○頼もしげなき咎――頼み甲斐のない缺點。
○側々しく――よそ〳〵しくて、親しみのないこと。
○心づきなき人――氣に入らない人。
○いでばえ――拔んでて勝れたるないふ。
○限無き物言ひ云々――殘るところなく十分に論じたが、遂に判斷しかねたのである。馬頭の態度ないふ。
○品にもよらじ――今は門閥や家柄などにはよらぬ。
○いと口惜しく――甚だ殘念だと思はれる。
○拗けがましき覺――心のひねくれた女であると思はる所。
○寄邊――たよりとするところ。
○終の頼みどころ――生涯のたのみとすべき女として、即ち妻として。
○あまりの故由――それ以上の才能。
○心ばせ――趣味。情趣。
○少し後れたる方云々――忠實で靜かな女であるならば、他に少し位の缺點があつても、無理にそれを數へまい。
○表面の情――風流な才藝ないふ。
○自ら持附けつべき業をや――自然と見聞につれてつけ加へられる。

さういふ妻と相對座してゐる間は、可愛らしく思はれるので、それに引かれて缺點短所などは氣にならぬものである。然し旅行などで妻と暫く離れねばならぬことになると、さしあつての用事の指圖を手紙で言ひ送つたり、その他、時々起きてくる用事で、一寸した閑事だらうが、重大事だらうが、妻自身の考で處置することが出來なく、深い思慮のないのは、遠方の旅にある夫が、一一指圖してやらねばならぬから、實に殘念なものである。斯ふいふ弱い女は頼み甲斐のない缺點がある。その缺點は、如何に子供らしい可憐さがあるからよいなどといつても心配なものである。又この種の女とは全然反對に、平素は夫に對してよそ〳〵ほしく親しみのない女で、一向氣に入らない妻が、一旦何か事の起きた場合には非常な手腕を振つて出色の光彩を放つが如き場合もあるものだ。」などと、何から何までも十分に知りぬいた左馬頭の議論も、さて如何なる女を最も良いものとするかといふ點になると判定しかねて歎息した。

評　「子めきて、柔かならむ人を、兎角引繕ひてばなどか見ざらむ。」といふことは今日でも若い青年の空想するところであるが、いざ自己が社會に立つて活動する場合になると、妻の弱々しさに心引かれて、十分な活動が出來ないものである。又、「常は側々しく心づきなき人の、折節につけていでばえする云々」も世相の一面を穿つた觀察である。

「今はただ品にもよらじ、容貌をば更にも言はじ。いと口惜しく、拗けがましき覺だになくば、ただ偏に物まめやかに、靜なる心の趣ならむ寄邊をぞ、終の頼みどころには思ひ置くべかりける。あまりの故由、心ばせ打添へたらむをば喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、強ちに求め加へじ。後安く長閑き處だに強くば、表面の情は、自ら持附けつべき業をや。

釋　左馬頭は更に語を續けて言ふには「もう今となつては、女の價値を定めるには、女の家柄によつて上下をつけるなどは止さう。又容貌がよいとか惡いとかいふことも問題にせない。唯だ甚だしくひねくれた女だと思はれる點さへ無いならば、單に忠實で靜かな氣質の女を、吾等の信頼すべき女とし、生涯を托すべき妻と定めてよいやうだ。若し忠實で靜かな女で、猶その上に才能に長け、物の情趣をも理解する風流があるならば、それこそ思はぬ仕合せと喜ばねばならぬ。又忠實靜穩の二つの性質があるならば、他に少し位の缺點があつても無理にそれを數へだててはならぬ。心安く平和に身を托すべき性質さへ十分持つてゐる女ならば、それ以外の風流な才藝などは自然と後から修養されるから問題とするに及ばない。

補　○物まめやかに靜なる――細流抄に「葵上紫上を人の本にして皆云なり。」と。○後安く長閑き處云々――同じく細流抄に「葵上に當れり。」と。

評　新奇な女はよくない、派手な女も感心しない。永久の幸福を思ひ、眞面目に考へる男は、遂に忠實と靜穩な女を來めることになる。

○艶にもの恥ぢ――艶麗な女で、内氣なところのある。
○上はつれなく――表面は何氣ない風をしてゐながら内心は恨んでゐる。
○みさをつくり――殊更に平氣でゐる。
○心一つに思ひ餘る――或る一事を思ひつめて、感情の昂奮するとき。
○忍ばるべき形見――妻が居なくなつた後、夫が妻を思ひ出すやうな形見の品物を置いて。
○世離れたる――世間から遠く隔つてゐる。
○海づら――海岸。
○童に侍りし――左馬頭が子供でゐた頃。
○殊更びたる――わざとらしい。
○志深からむ男――妻を思ふ情のこまやかな夫。
○見る目の前に――假令眼前に夫の無情な態度があつてもそれは一時のことで、内心は妻を愛してゐるものである。
○人の心を見知らぬ云々――そのやうな妻は、夫の内心を理解してゐないやうに思はる。
○人を惑はし――夫をして迷惑せしめ。
○心をも見むとする程に――夫はどうするかしらと夫の内心を搜さうとすること。
○永き世の物思――離別のこと。
○心深しやなど云々――女の身で遁世などするのは、志深き殊勝なことであるとほめられて。
○思ひ立つ程は――尼にならうと發心する間は。
○世に顧みすべくも云々――再び俗界を顧みて出家を後悔するやうなことはない。
○いであな悲し――いであなは感歎詞で、俗にいふおまへはまあ、といふ意。どうしてそのやうな發心の心になつたかと人

艶にもの恥ぢして、怨みいふべき事をも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心一つに思ひ餘る時は、いはむ方なく凄き言の葉、哀なる歌を詠みおき、忍ばるべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海づらなどに、這ひ隱れぬかし。童に侍りしとき、女房などの物語讀みしを聞きて、「いと哀に悲しく、心深き事かな」と、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと輕々しく殊更びたる事なり。志深からむ男を置きて、見る目の前に、つらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隱れて人を惑はし、心をも見むとする程に、永き世の物思になる、いと味氣なき事なり。「心深しや」など譽め立てられて、哀進みぬれば頓て尼になりぬかし。思ひ立つ程は、いと心澄めるやうにて、世に顧みすべくも思へらず。「いであな悲し。かくはた思しなりにけるよ、」などやうに、相知れる人來訪らひ、「一向に憂し」ともおもひ離れぬ男聞きつけて、涙落せば、使ふ人、古御達など、「君の御心は哀なりけるものを、あたら御身を」などいふに、自ら額髮をかき探りて、あへなく心細ければ打顰みぬかし。忍ぶれど涙零れそめぬれば、折々毎に得念じ得ず、悔しきことも多かめるに、佛もなか〳〵「心穢し」と見給ひつべし。濁に染める程よりも、生浮びにては、返りて惡しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿世淺からで、尼にも爲さで尋ねとりたらむも、軈てその思出、恨めしき節あらざらむや。惡しくも善くも相添ひて、兎あらむ折も、斯からむ刻をも、見過ぐしたらむ中こそ契深くあはれならめ。我も人も、後めたく心置かれじやは。

解　又、艶麗に美しく且つ内氣な恥しがりの性質で、夫の方で薄情な事をやつても、それに對して小言をいふでもなく我慢をしてゐて、表面は何等腹を立ててゐるといふこともなく平氣でゐるが、一旦思ひつめて立腹すると、言ひやうのない程物凄い言葉や、凄絶な和歌、或は後となつて妻のことが追想される品物などを家に留め置いて、深山の奥や、世間から遠く離れてゐる海岸などに姿を隱してしまふ物凄い女もあるものだ。私(左馬頭)がまだ幼少でゐた頃、召使の女房どもが讀んでゐた物語を聞きましたが、その中には女が男の薄情な擧動を恨んで、山野に姿を隱すとか、出家して尼になるなどの事が書いてあつたので、それを聞く度に、「あゝ悲しいことである哉、偖出家するとは心深い仕方であるかなあ」と、感涙を催したことさへありました。然し今日となつて、それ等のことを考へると實に輕卒な、わざとらしいことである。男が

が訪れ問ふのである。
○一向に憂しともおもひ離れぬ男云々――夫はどこまでも女が厭だと思つたのでないから妻の出家を聞いては涙を落すのである。
○使ふ人――女の召使ふ女房。
○古御達――召使中での老女。
○あたら御身を云々――惜しい哉、御身を尼の妻にやつし給へる事よと。
○自ら額髪をかき探りて――昔の尼は、全く落髪するものの外に、さげ尼、そぎ尼又はたれ尼など言つて、髪を短く切つてゐた尼があつた。此の女も是等の體であつたと思はれる。それで口惜しさうに額髪をいぢりて心細い氣持でゐるのだ。
○打掣みぬかし――打沈んで泣くのである。
○得念じ得ず――尼になつた悔しさが折々につき

一時は無情なことをしたとはいへ、もと〳〵は女を愛してゐるその男を捨ててしまひ、眼前に如何なる困難が男の身の上に起きてきようが、それ等の事が分らぬ如く逃げ隱れて、夫に迷惑をかける女がある。斯くの如きことをやつて、夫はそれに對し如何なる處置をとるか見ようなどと女の方では考へてゐるが、その間に時期はだん〳〵と過ぎ去つてしまひ、遂に離別などいふ永久の心配事になり終ることはつまらないことである。又斯ふいふ女は他人から「貴女は俗界を脱離して隱遁出家なさるとは實に豪いことだ」など褒めそやされると、前後の考へもなく成程と思つて、哀愁の催すままに、直ちに尼となつてしまふ。發心した當時だけは餘程心は清く澄んで、俗界のことなどは顧慮するやうなこともない。然しだん〳〵と歳月も經た頃、突然友達が音づれて曰く「あらまあ、どうしてそのやうな出家の姿におなりあそばされたのですか」などと知人が悲しんでくれる。又女の方でも「全然この夫はつまらない薄情な男だ」と思つて捨てたのではなくして、單に男がその後の處置はどうするかといふ、男の心を見るだけに離れた夫が、その後自分の妻の出家のことどもを聞いて哀を催し、涙を流してゐるなどと、女の傍に使はれてゐる召使の女や、その中でも老女どもが聞きつけて、「御覽なさい。夫君の御心は氣の毒なものである。貴女は急いで出家なさつたとは惜しいことになつた。」など話す。さあ、斯ういふことを聞くと、女も今更出家したことが悔しくなり、短く切つた額髪を手でさぐりながら、どうにもならぬ程心淋しくなつてくるからして、打沈んで悲しみ出すのである。我慢しようと思つても涙がはら〳〵と出るので、時々はどうにもならぬ程淋しくなつてくる。又、尼となつたことが悔しくもなる。こんな不純な尼は佛も却つて「心の汚い者だ」と思召しなさることだらう。俗界に居る人よりも、斯くの如く、出家したやうでまだ俗界に執着を持つてゐることでは、來世は往生が出來るどころか却つて邪道に落ち込むやうにもなると思ふ。又女が尼になるまでに至らないで夫が女を捜し出し再び元の籍に納つて夫婦となることが出來たとしても、一旦不和な騒ぎをしたのであるから、直ぐにその時の恨めしいことが思ひ出されてくるだらう。されればお互に打ち解けた愉快もないわけだ。夫婦といふものは善くとも惡しくとも、互に辛抱をして相添ひ、苦しみの中も樂しみの中も、どういふことがあつてもそれを我慢して行くこそ、夫婦の契も深くてよいものである。さきのやうに一度分れた者は夫にしても妻にしても何等の不安もなく、遠慮もなく打解けてゐるわけには行かぬ。そこに始終不安があるものだ。

補　○女房などの物語讀みしを聞きて――源注餘滴に「これは大和物語に平仲がむさしの守の女をよばひて、さてあひて後いかざりければ、女うらみわびてこもりゐて、つかふ人にも見せで尼になりけるを平仲聞きてゆきけれども、ぬりごめにかくれていらへをだにせねば、事のありよふをつかふ人々にいひてなきけるよしかの物語にあり。ことながければここにはいはず。蜻蛉日記にもさること見えたり。ここに物語讀みしとあるはこれなどにやあらん。」とある。

評　小心なヒステリー的の女をとらへて詳細な觀察のもとに、描き出したものである。「自ら額髪を搔き探りて」の一句この場合の眞情を發露してゐる。最後の文句である「我も人も後めたく心置かれじやは」は前後の文と續き具合が面白くない。多分誤脱があるものと思はれる。

我慢出來ぬのである。
○洞りに染める程――俗身でゐる者。
○絶えぬ宿世淺からで――前世からの因緣が深くて夫婦間の緣の絶えざるないふ。
○兎あらむ折も云々――兎や角のことが出來て腹立つことがあつても。

○斜に移ふ方あらむ人――斜に移ふは横にそれること。夫が他の女に心を移すをいふ。
○氣色ばみ――恨みの心を外面にあらはして。
○なこがまし――馬鹿らしい。
○見初めし志――初めて懇した時の夫の親切な心。
○さる方のよすが――夫は始めは、あのやうに愛してくれたのだから、その心をたよりとしてゐる。
○然樣ならむたじろき――たじろぎは驚ぎ。夫は外に女を持つた、妻は恨んでゐるといふドサクサまぎれにといふこと。
○絶えぬべき業――遂に夫婦の緣も切れてしまふ。
○見知れるさまにほのめかし――夫が他に女を持つてゐるのを知つてゐるといふやうに、それとなく知らせる。
○憎からずかすめ――憎らしく嫉妬せず、それとなく、ぼんやりと恨をいふ。
○哀も增さりぬ――妻に對する感興もまさる。
○我が心も見る人から治まりもすべし――見る人とは妻をいふ。夫の心も妻の心次第で治まるものである。
○打緩べ見放ち――夫の爲すがままにして平氣でゐること。
○繫がぬ舟の云々――白樂天の詩、「不レ繫舟隨ニ去住風一」とある句をとつたので、妻が夫を全く放任してゐるのは惡い。
○浮きたる例――浮氣なたとへ。
○あやなし――つまらない。
○さは侍らぬか――さうではないか。
○さしあたりて――現在眼の前に。
○顯もしげ無き疑――女

また斜に移ふ方あらむ人を怨みて、氣色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。心はうつろふ方ありとも、見初めし志いとほしく思はゞ、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、然樣ならむたじろきに、絶えぬべき業なり。凡て萬の事なだらかに、怨ずべき事をば、見知れるさまにほのめかし、怨むべからむ節をも、憎からずかすめなさば、それにつけて、哀もまさりぬべし。多くは、我が心も、見る人から治まりもすべし。餘り無下に打緩べ見放ちたるも、心安くらうたき樣なれど、自ら輕き方にぞ覺え侍るかし。繫がぬ船の浮きたる例も實にあやなし。さは侍らぬか」と言へば、中將うなづく。

評 又夫が妻から心を移して他の女に行くことがある。すると妻は早速その恨みを外面に表はし、遂に夫と離別するのは是れ亦馬鹿らしいことである。假令一時夫の心が他の女に移るとも、もと〳〵夫婦となつた當初、夫から愛せられてゐた眞情を可愛らしいと思ふならば、今暫し夫の心が移るとも、まさかこの妻を全然捨てることはあるまい、遂には夫は改心するものだといふ點をたよりとして妻は落着いてゐればよい。然るにこのやうなときに急いで事をやるとその騷ぎに離緣せねばならぬやうな破目になる。女は凡ての事に亘つて穩便になし、男を怨むべきことがあるとしても、全然知らぬ振などはせず、ちやんとそんな事は私が存じてゐますといふ所をほのめかし、夫を怨まねばならぬ時には、强く憎まずそれとなく婉曲に一寸恨んで置くといふやうにすると、その女のゆかしさも增すものである。大體夫の心は妻のやり方次第で治まるものである。とはいふものの、妻が極端に夫の擧動について放任的な態度をとると、夫の方では氣樂な愛らしい妻のやうに考へるもので、自然と輕蔑せられるやうなこともあるものだ。彼の白樂天の詩にある「不レ繫舟隨ニ去住風一。」といふ句の通りに、夫の爲すままに放任して置くと、夫の行爲は遂に亂れて浮氣になつてしまひつまらぬことになる。然うではありませんか」と左馬頭が熱心に言ふので、これを聞いてゐた頭中將は成程さうだと合點してゐる。

補 ○繫がぬ舟の浮きたる――文選の鵩鳥賦に「泛乎若ニ不レ繫之舟一。」の句から出たものといふが、今の場合は白樂天の偶吟詩にある「無レ情永任ニ方圓器一、不レ繫舟隨ニ去住風一。」とあるのをとつて書いたものである。

評 女であまりに燒くのは厭らしい。とはいふものの少しも燒かぬ女といふものも、手ごたへがなくて物足らぬ感じがする。要するところは男をほんがりと燒いてゐる女にこそ、盡きせぬ魅力が籠つてゐるといふ紫式部の慧眼、人情の機微を穿つて餘蘊なし。

（頭中將）「さしあたりて、をかしとも哀とも、心に入らむ人の、賴もしげなき疑あらむこそ、大事なるべけれ。わが心過無くて見過さば、さし直しても、などか見ざらむと覺えたれど、それ然しもあらじ。兎も角も違ふべき節あらむ

の他へ心を移して浮氣心のあるをいふ。
○わが心過——男の方で浮氣などの過誤がないならば。
○それ然しもあらじ——女の浮氣を默してゐても直すことが出來ると思ふが、それはそのやうにうまくゆかぬ。
○兎も角も違ふ云々——何れにしても男子の浮氣に對して、やきもきせず靜かに我慢する女を。
○わが妹の姫君——頭中將は我が妹で源氏の君の妻である葵の上が、この選びに入るものとしてゐる。
○さうぐしく——さびしいのである。
○心やまし——心のいらくすること、心惱ましい。
○物定——議論の判定。
○博士——古今に通じて廣く物を知れるをいふ。
○ひぴらぎ——しきりにしやべる。俗に言ふ口を

を、長閑やかに見忍ばむより外に、ます事あるまじかりけり。」といひて、「わが妹の姫君は、この定に適ひ給へり」と思へば、君のうち眠りて、詞交ぜ給はぬを、「さうぐしく心やまし」と思ふ。馬頭、物定の博士になりて、ひぴらぎ居たり。中將は、此の道理聞き果てむと、心に入れてあへしらひ居給へり。

評 さて頭中將が言ふには、只今のこの女こそ雅趣もあり、ゆかしさがあると氣に叶つた女が、どうも浮氣らしい所があると云ふ疑ひが出て來るときは、それこそ一大事である。男の方さへ眞面目で、女の浮氣を咎めもせず見過してゐるならば、何時かは女も後悔してくるものである。女の心を自然と善き方に導くといふことも、やらないわけでもないなど考へたこともあつたが、女の浮氣はさう暢氣に見過してゐても直ると思はれるものではないやうだ。まあ男方に浮氣があるとしても、それをやきもきせずに靜かに見過す女よりよい女は無いわい。」と語つて、「我が妹で源氏の君の妻にあたる葵の上こそは、恰度この夫の浮氣を靜かに見過してゐるよい部類の女である」と思つてゐるが、源氏の君はこれに對して何とも批評をなされず、ただ打眠つてゐられるので、頭中將は「物淋しくいら〳〵することだ。」と思つてゐる。すると左馬頭は大に得意となり、此際の婦人論の判定役の博士となりすまして、盛んにしやべり散らしてゐる。頭中將は又、左馬頭の結論まで聞き終らうと熱心に相槌を打ち應答してゐる。

たたくこと。
○あしらひ——應答する。
○本の道の工匠——木細工する者。
○臨時の甄物——その折々の流行的小道具をいふ。
○その物と跡も定まらぬ——斯ういふ形式と一定の定まりのないもの、あとは形式とか樣式といふこと。
○そばつき——傍から見た形をいふ。つきは「顔つき」などのつきと意同じ。
○戯ればみたる——作り方のしやれたるにて不眞面目なるをいふ。
○げにかうも爲つ云々——

評 この所の「兎も角も違ふべき節あらむを、長閑やかに見忍ばむより外に、增す事あるまじかりけり。」と頭中將の言つてゐるのは、自己の妹、葵の上が源氏の浮氣に對して、おとなしく、やきもきもせず溫和にしてゐられるのをよい娘だと、それとなくあてて言つたのである。故に頭中將はこの際、源氏の君から何とかの批評が聞きたかつた。然るに源氏の君は打眠つて何の返答もなかつたので、頭中將は豫想が裏切れ、物淋しくいら〳〵した氣分になつたのである。

「萬の事に比へて思せ。木の道の工匠の、萬の物を心に任せて作り出すも、臨時の甄物の、その物と跡も定まらぬは、そばつき戯ればみたるも、「げにかうも爲つべかりけり」と、時につけつつ樣を變へて、今めかしきに目うつりて、をかしきもあり。大事として、誠に麗しき、人の調度の飾とする、定まれる樣あるものを、難無く爲出る事なむ、なほ眞の物の上手は、樣殊に見え分かれ侍る。また繪所に上手多かれど、墨書きに選ばれて、次々に更に劣り優る區別、ふとしも見えわかれず。斯かれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國の烈しき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろ〳〵しく作りたる物は、心にまかせて、一際人の目を驚かして、實に

—成程このやうにも作られるものだと見る人の感心して言つてゐる語。
○時につけつつ——その折に應じては新奇な形を作りだすこと。
○今めかしき——當世風なこと。
○大事として——一定の樣式があつて、作り方の嚴格なもの。
○調度の飾——飾になる調度。
○樣殊に見え分かれ——上手な人の手際の優れてゐる事が明白に辨別せられる。
○繪所——繪のことを司る役所。
○墨書き——昔は繪を描くには先づ墨で描く人がある。この繪を「墨書き」といふ。次に別人に彩色を施さしむ。この方が「つくり繪」といふ。
○次々——にこの語の下に「書くに」の語を補ふて說くべし。

は似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたたずまひ、水の流れ、目に近き人の家居有樣、「實に」と見え、懷かしく和びたる形などを、靜に書き交ぜて、嶮岨ならぬ山の景色、木深く、世離れて疊みなし、氣近き籬の內をば、その用意掟などをなむ、上手はいと勢ひことに、わろものは及ばぬ所多かめる。

釋 左馬頭曰く「萬事に比へて御覽なさい。先づ木工人がいろ〳〵な物を心に任せて自由自在に作り出すとき、時々の流行的小道具で、一定の形式の無いものは自由自在に變化を求めて作り出す。見る人は傍から一見した所洒落に出來てゐるので「成程このやうな珍しい形にも作られるものかな」と感心する。又その折〳〵に應じて形を變へて當世風に作るから、その新奇なのに目を引かれて面白い。ところが之に反して、嚴かな道具で、端正に作るべき飾り道具になると、その作り方には一定の樣式があるもので、難の無い立派なものに作りあげるには、矢張り眞の名工がやると格別立派に作られるが、普通の工人は作られない。又繪畫の方面から言ふならば、繪所には隨分名畫家もゐるけれども、墨書きに選任せられ、その次〳〵と書くならば、畫家の優劣の區別は少しも分らない。然し吾人の見たこともない蓬萊山、荒海の怖しき大魚の怒れる姿、支那に居るといふ獅子虎の如き猛獸、或は目に見たことのない鬼の顏などのこわい姿は、一定の形があるのでないから、畫家が心のままに筆を運ぶ。すると吾等はそれを見て一

○ふとしも見た云々——一寸見ても優劣が分らない。
○烈しき獸——猛獸ないふ。
○おどろ〳〵しく——怖しいこと。こわいこと。
○さてありぬべし——眞實見ないものであるからまあそのやうかとも思はれる。
○たたずまひ——樣子。
○世離れて疊みなし——俗界を超越した神韻漂渺の趣を重ねあらはし。
○その用意掟——その畫を描くに就いての用意描法ないふ。

層驚歎する。その繪は實物に似てゐることもないだらうが、それでもその繪が立派なものとされる。だがこれと反對に日常見てゐる山水の風景や眼前の人家を描き、見る人をして「これこそ成程立派に出來た」と感心せしめ、そこへは溫和な親しみのある趣を靜にあらはし、嶮岨なところのないなだらかな山を、樹木鬱蒼と俗塵に超越した樣に重疊せしめ、又目慣れた庭園などを描くとなると、自然とその描き方は定つてゐるからして、その構想筆法などは名家になると、非常に運筆が立派であるが、下手な者はとても及ぶものではない。

補 ○繪所——エドコロと讀む。繪畫のことや女房の衣服の模樣なども書いたものである。故實秘抄に「畫師の集る所なり。西宮記には式乾門のうち東の腋、御書所の南とあり、又萬芥抄には建春門の內の東脇、御書所の北にありと見えたり。時代によりて其所かはれるにや、古畫工司ありて後には內匠寮にあはせ給へり。後世內匠寮も只名のみにして實なければ別に繪所をたて給ふにや。」と見ゆ。○墨書き——岷江入楚に「河下繪をまづ墨にて書くは上手のするなり。朽木かきとも云也。色どりはそれよりもつぎの事なり。一說に墨繪の事なり、色どり繪は兎角まぎらはしても有べし。墨繪は上手ならでは書きえぬ物也。弄墨がきは下繪の事なり、うへの彩色ことは繪具にてまぎらほし侍れば中々やすし。下繪が大事なるといへり。大かた唐繪も墨繪に筆勢はこもるなるべし。」註 秘彩色はまぎるる事あり、墨繪はいたりて大事也祇注同之。」と見ゆ。○蓬萊の山——和漢三才圖會に「山海經云、蓬萊山海中之神山、非有道者不至。普陀山志云昌國北界有蓬萊山。衆山四圍、峙立旋繞小嶼屹如千丈樓臺而中處、又有紫霞洞」

與レ山爲レ隣中畔通明、方如ニ大車之輿一、潮水一退人可レ入、或云人不レ可レ到、隱隱有ニ神仙處一、墨漫不レ能レ辯、其南有ニ東霍山一徐市往ニ舟于此一。」と見ゆ。○荒海の怒れる魚の姿云々――後漢書、張衡傳注、引ニ韓子一曰、「客爲ニ齊王一畫者。問畫孰難、對曰、狗馬最難、孰易、鬼魅最易、狗馬人所レ知也、故難、鬼魅無レ形、故易也。」とある。○世離れて疊みなし――眠江入楚に「花雅兼卿の記に云、天永元年十二月廿一日師匡房かたられて曰、繪師金岡が子、公望公忠也、公望が子深江、深江が子廣高なり、公望、公忠上手なり。深江は廣高よりは其の名を得ず。然るに彼の時屏風を得る人あり。深江これを見て廣高を召して見せしむ、廣高云劣なり。深江が曰く、然らば此野すぢ、汝斯くは畫きてんや、廣高かなはじといふ。又此岩の淡又およぶべしや、廣高よく見て又かなはじのよしを申す。深江曰、これは公忠の繪なり。彼の人屏風の繪を書くごとに定つてその裏に署す。仍はなちてこれを見る所にその名あり、時の人深江はよく此の道を知れりとす云々、金岡は山をたむ事十五重、廣高は五重なり。今案墨の濃淡をもて遠近の山をあらはすなり。

金岡――公望――深江――廣高
　　└公忠

と見ゆ。○捉などをなむ――本居翁云「此をもじ下に受けたる言なく、穩ならず。いきほひとに書くをと、いふ言を加へて心得べし。」と云つてゐる。

評 雨夜の品定めも、最初は女の品、心ばへをありのままに論じたが、ここに至り工匠、畫家の

○手を書きたるにも――文字か書きたるについても。
○深き事は無くて――書道に造詣するところ無くて。
○ここかしこの點長に――達筆らしく書くこと。
○そこはかとなく氣色ばめる――何處となく氣取つてゐる。
○打見るに――一寸と一見した所。
○才々しく――才氣の勝れた如く。
○氣色立ちたれ――立派に見える。
○實の筋――正しき書法。
○細やかに――眞面目に。
○表面の筆消えて見ゆれ――表面は筆力無く見えるけれども。
○今一度取並べて見れば――走り書きのものと、道に譬へてゐる。比譬の力をかりて一層作者の說を分明ならしめるに努力したのである。

手を書きたるにも、深き事は無くて、ここかしこの點長に走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、打見るに才々しく氣色立ちたれど、なほ實の筋を細やかに書き得たるは、表面の筆きえて見ゆれど、今一度取並べて見れば、なほ實になむ寄りける。果敢なき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時に當りて氣色ばめらむ、見る目の情をば、得賴むまじく思ひ給へ侍り。

その初のこと、好色々々しくとも申し侍らむ。」とて、近く居寄れば、君も目覺まし給ふ。中將甚じく信じて、頰杖をつきて對ひ居給へり。法の師の、世の道理說き聞かせむところの心地するも、かつは可笑けれど、斯る序は、各睦言も得忍び止めずなむありける。

解 書道に比して言ふならば「文字を書くにしても、書道に造詣すること深くも無いものが、如何にも能筆家らしい態度で、すら〳〵と草書體で書き流し、どことなく氣取つた所のあるのは一見した所、才能家のやうに立派に見える。けれども正しい書法を眞面目に念を押して書いたものは、表面眺めただけでは筆力も無く見えるが、今一度、氣取つて走り書きしたものと、眞

實の筋のものと比べると。
○なほ實になむ寄り――やはり眞面目に書いた方に心が引かれる。
○時に當りて――當世の流行につれて派手をなしてゐる。
○見る目の情――眼前の情趣。
○得頼むまじく――信頼出來ないやうだ。
○その初のこと――昔のこと。
○甚しく信じて――甚だ感服して。
○法の師の云々――法師の說敎を聞くやうであるが。
○且つは――一方から見ると。
○各聘言も云々――各々男女間の私語までも隱さずに語り出すといふ。
○早う――年若い昔。

面目に正しい書法で書いた元氣ない文字とを比較すると、矢張り眞面目に書法に從つて書いたものの方に心が引かれる。一寸した木細工、繪畫、書道のことについてさへも、眞面目に爲したものの方が、品もあり立派なものになる。故にましてや、人間の心では、當世風に派手な所があり、眼前には情趣に富むことがあつても、それ等の輕薄なことは信頼出來るものではありません。何と言つてもジミであるとも眞面目で實直な女がよいものである。好色がましいことでありますが、私(左馬頭)が昔の實例を申し上げませう。」と言つて膝を進めた。すると源氏の君も眠つてゐられたが目を覺しなさつた。頭中將は左馬頭の言にいたく感服し、頰杖をして對座してゐられる。この有樣は恰度法師が、人生に對する說敎を說いてゐる場所の如く思はれて滑稽なやうにも考へられたが、兎に角、斯ふいふ折には各人が男女間の睦しい私語までも隱さず語るものである。

評 この所では書道に譬へて言つてゐる。次に「法の師の世の道理……得忍び止めずなむありける。」の語については眞淵云く「これを記者の語といふ說はいかにぞや、我むかしのことかたらむとていふ也。」と言つてゐるが、石川雅望が「のりの師より、むつごともえしのびとどめずなむ有けるといふまで侍といふ詞ひとつもなきをもて左馬頭が詞ならぬを知るべし。むかしより草子の地といひ來ることよしなきにはあらず。」と言つてゐる方がよい。

(馬頭)「早う、未だいと下臈に侍りし時、憐と思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに、

○下臈――身分の卑しきをいふ。
○あはれと思ふ――いとしいと思ひ込んだ女。
○聞えさせつるやうに――前に申し上げた如くに。美相なき家刀自云々の語をさす。
○まほ――物の十分なるをいふ。
○この人を止まりに――樣々の女に逢つたが、此の女を止りなりと思ふことで、妻の意である。
○寄邊――妻とするまでには及ばぬが、一つのたよりとして。
○さうぐしく――淋しくて。
○紛れ歩き――浮氣をして歩く。
○物怨じ――嫉妬すること。
○心づきなく――氣にかなはない。
○おいらか――おほやう。おとなしい。
○あまりいと許しなく疑

容貌などいとまほにも侍らざりしかば、若き程のすき心地には、「この人を止まりに」とも思ひ止め侍らず。寄邊とは思ひながら、さうぐしくて、兎角紛れ歩き侍りしを、物怨じをなむ甚く爲侍りしかば、心づきなく、「いと斯からで、おいらかならましかば」と思ひつつ、あまりいと許しなく疑ひ侍りしも煩くて、「かく數ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむ」と、心苦しき折々も侍りて、自然に心治めらるるやうになむ侍りし。

譯 左馬頭曰く「私がまだ年も若く官も低い時、眞に可憐なと同情される女がありました。前に一寸申し上げたやうに美相無き家刀自の部類で、容貌など左程立派といふこともありませんでしたが、私もまだ若い年頃のことでありましたから、當時の心地としては「これを終生の妻としよう」などとは考へないで、單に一つのたより處だ位に思つてゐました。從つて心の中では何となく物淋しさを感じて、どうかすると浮かれ歩きましたが、するとその女は大變に嫉妬するのであります。私は益々いら〳〵して氣に合は無いから「まあそんなにやきもきせないで、少し大やうなおとなしい所でもあればよいなあ。」と思つてゐました。又女の方で極端に私の浮氣を疑ふので、遂にうるさくなり、「私のやうなこんなつまらない男を見捨ても爲ないで、なぜあのやうに思つてくれるのか」と思つたが、女の心に對しても相濟まぬと氣毒になる事も折々

ふ――女が少しのことにも疑ふのである。
○かく數ならぬ身を――私（左馬頭）の如きつまらない身を。
○見も放たで――見捨てず、女が一心に守つてゐること。
○心苦しき――氣毒なこと。
○心治めらる――馬頭が浮かれ心を止めらる。
○もとより思ひ至らざり――今日まで自分が少しも氣附かずに居た。
○いかで此の人の爲め――どうでもしてこの左馬頭のためには盡さうと努める。
○無き手を出だし――女として爲し得ざることまでも强ひてつとめる。

あつて、自然私の浮氣も止めさせられることもありました。

補 ○下萬――萬を積むことの短きもの、卽ち身分の卑しき者をいふ。萬とは僧侶が安居（安居とは僧徒が四月十六日より七月十六日に至る九十日の間、安居禁足して業を修するを云ふ。その起りは釋迦成佛後、母伽毘羅國善覺長者の娘摩耶夫人の爲めに登利天に登りて、一夏九旬說敎されたのが濫觴である。）を一萬として功を積みたる年を數ふる語であつたのが、移りて一般に用ひられるやうになつた。卽ちその人の地位職掌によつて下萬女房、下萬藏人、下萬御隨身、下萬法師等の名がある。

評 左馬頭は女の品定めにつき、前段には比譬でいろ〳〵と說いたが、本段からは、かかる抽象論を脫しての經驗論に入つた。又この段から「侍り」の語が急に多く使はれてゐるのは、源氏の君が目を覺ましてゐられるため、源氏に對する尊敬の意であるといはれてゐる。

此の女のあるやう、もとより思ひ至らざりける事にも、「いかでこの人の爲めには」と、無き手を出だし、後れたる筋の心をも、なほ「口惜しくは見えじ」と思ひ勵みつつ、兎に角につけて、物まめやかに後見、「露にても心に違ふことはなくもがな」と思へりし程に、「進める方」と思ひしかど、兎角に靡き來てなよび行き、醜き容貌をも、「この人に見や疎まれむ」と、理なく思ひ繕ひ、「疎き人に見えば、面伏せにや思はむ」と憚り恥ぢて、操にもてつけて、見馴るる儘に、心も怪しうはあらず侍りしかど、唯だこの憎き方一つなむ心治めず侍りし。

○授れたる筋の心――不得手な方面についての用意。
○口惜しくは見えじ――言ひ甲斐のない女とは見られまいと。
○進める方――女として出過ぎたやり方だと。
○靡き來て――左馬頭になついて來て。
○なよび行き――柔和になつて。
○この人――左馬頭を指す。
○疎き人――他人を指す。
○見えば――顏を合はせると。
○面伏――不面目のこと。女が自分の醜き姿を他人に見せるならば馬頭は定めて面目ないことであらうと思ふて。
○操にもてつけて――操とは心を變へざることで常住不變のこと。常に女が容姿の嗜を爲すをいふ。

評 この女の平常の樣子を言ふならば、私（左馬頭）が今に至るまで少しも氣附かなかつた事でも、「どうかしてこの左馬頭の爲めには、便利なやうに取り計らう。」と、女としてとてもやれさうにもないことにまで、やり通さうと努力し、又外面をつくろふ爲めに不得手なことにも心をぶち込んで勵んでゐた。そのやうにしながら猶ほ、「言ひ甲斐の無い、つまらない女だと見られまい」と一生懸命に働きながら、何につき彼につき私の世話を眞面目になし、「少しなりとも私の心に逆らふことのないやうにとしてゐたい。」と思つてゐた。それで私は「女としてはあまりに出過ぎたやりかただ。」と思つてゐましたが、女の方ではどうしても私の方になついてきて、漸次柔和になり、醜い容貌が私に見られては、疎んじられは爲ないかと、無性に化粧をしてゐました。又こんな醜い形を他人に見られては、先づ第一に左馬頭があんなつまらぬ女を持つてゐるかなどと他人から嘲られ、大變な不面目となるだらう。」と他人に遇ふことを遠慮し恥ぢて、始終化粧の嗜みをしてゐたので、私がこの女を見てゐると、左程惡いといふ性質があるでも無く、可愛相にも思はれましたが、ただ一つこの男を疑ふといふ嫉妬の點だけは氣に合はぬことでありました。

○憎き方一つ――男を疑ふ嫉妬の一點だけは。
○心治めず――心の落着かぬこと。
○斯うあながちに從ひ怖ぢたる――斯く絶對に服從し畏れてゐる人。即ち左馬頭を一心に思つてゐる女。
○懲るばかりの業――どうかして女が弱り困るほどの事をして。
○この方――嫉妬の方面。
○さがなさ――口やかましきこと。
○實に憂しなども――實際嫉妬を嫌ふて緣を切るやうに裝ふならば。
○かくおぞましくば――女がそんなに剛情であるならば。
○いみじき契深く――二人の間の夫婦の契がたとひ甚だ深いものであつても。
○絶えて復た見じ――離緣して再び相見えないだらう。
○限りと思はば――これを最後として離れるならば。
○斜に思ひなりて――嫉妬の心も大抵に思ひなして。
○人並々にもなり――官位も昇進して人並に立身したならば。
○大人びむ――大人らしく年齢も行つたならの意。
○また比ぶ人無く――比類なく汝を愛する。
○賢く教へ立つる――うまく女に訓戒をしたなあ。
○我猛く言ひそし――巧みに言つた得意になつて言ひすごした。「そし」は過すこと。
○萬は見立なく――萬事に見すぼらしきこと。
○物氣なき程――認められる程でもない身分の低い間。

補　○疎き人に見えば――白氏文集に「外人不レ見見應レ笑」とある。

評　ここに描かれてゐる女の如きは、まあ〳〵安心の出來るよい女の部類に屬するだらう。その心根こそいと可愛く思はれる。

當時思ひ侍りしやう、「斯うあながちに從ひ怖ぢたる人なめり。いかで懲るばかりの業して、嚇して、この方も少し宜しくもなり、さがなさもやめむ」と思ひて、「實に憂しなども思ひて、絶えぬべき氣色ならば、かばかりわれに隨ふ心ならば、思ひ懲りなむ」と思ひ給へて、殊更に情無くつれなき樣を見せて、例の腹立ち怨ずるを、「かくおぞましくば、いみじき契深くとも、絶えてまた見じ。限りと思はば、かく理なき物疑ひはせよ。行先長く見えむと思はば、辛き事ありとも念じて、斜に思ひなりて、斯かる心だに失せなば、いと憐となむ思ふべき。人並々にもなり、少し大人びむに添へて、また比ぶ人無くなむあるべき」など、「賢く教へ立つるかな」と思ひ給へて、我れ猛く言ひそし侍るに、少し打笑ひて、「萬に見立なく、物氣なき程を見過して、人數なる世もやと侍つ方は、いとのどかに思ひなされて、心疾しくもあらず。つらき心を忍びて、思ひ直らむ折を見つけむと、年月を重ねむあいなだのみは、いと苦しくなむあるべければ、互に背きぬべき刻になむある」と、妬げにいふ時に、腹立しくなりて、憎げなる事どもを言ひ勵ましろ〳〵しく嘆ちて、「斯かる疵さへ付きぬれば、いよ〳〵交ひをすべきにはあらず、辱しめ給ふめる官位、いとどしく、何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり」などいひ嚇して、「然らば今日こそはかぎりなめれ」と、此の指を屈めてまかでぬ。

解　その當時私(左馬頭)が思ふには「女がこのやうに畏れ〳〵絶對に服從してゐるやうだから、どうかして女が困り弱る程の事をし、おどかして彼の嫉妬心も少しは直るやうにしてやり、口やかましい方も改めてやらう」と思つて、「私が女の嫉妬を眞實に嫌つて、時によると女と緣を切るといふ態度を示すならば、女の方ではあれ程私に服從してゐる心であるならば、屹度弱り果てて嫉妬も止めるだらう。」と考へました。それでそれからはその機會をこしらへる爲めに、わざとらしく女に對して無情殘酷な態度に出ました。すると早速女は立腹して怨言を述べ立てました。私はこの好機逸す可からずと、彼に對して言ふには「斯くまで汝が剛情であるならば

○人數なる世もや――人並になる時機が來るかと。
○つらき心を怨びて――左馬頭の無情なる心を我慢して。
○思ひ直らむ折――その心のなほる時。
○あいなだのみ――空頼（そらだのみ）に同じ。そんな事をたよりとしてゐても覺束ないこと。
○剋――時機。
○腹立しく――左馬頭が。
○得治めぬ筋――こらへられぬ方で。
○おどろ〳〵――おどろくべく、仰山らしく。
○交ひ――社會上の交際。
○いとどしく――一層。
○何につけてか人めかむ――何に頼りてか、人並に立世出來ようか。
○世を背きぬべき――最早世に望みがないから遁世すべきである。

假令どれ程深い夫婦の縁かは知らないが、もう縁は切つてしまひ再び相逢ふことはしまい。お前も今日限りで離縁してしまはうと思ふならば、どれ程でも嫉妬するがよい。それとも又今後行末永く夫婦となつて連れ添ひたい考へであるならば、假令私が殘酷な事をしても、大抵なところで我慢をし、嫉妬の心も無くするならば、それこそお前を可憐なものとして愛してやるだらう。私も官位が相當立身して、少しは大人らしいやうにもなるにつれて、御身をも比ふべきものなく大切に愛するであらう。」などと、「如何にも賢しく訓戒してやつた」ことだと思つて、得意然として言ひ過ぎました。すると彼女は少々微笑を漏して「夫の身分がまだ萬事についてみすぼらしく、認められる程にも至らない間は我慢して、人並に立身なさる時機も來るだらうかと待つてゐることは、さう心苦しくありません。まあ長閑に安心して居られるもので心を惱ますまさない。けれども夫の無情な心が直る時機があるだらうかと、その時の至るのを幾歳月を重ねても、おぼつかないものであるのに、それでも時によると直るかも知れぬといふ果敢ないたよりを頼みとしてゐなければならぬとは、甚だ心苦しいことであります故、どうもかうなつてはお互に離縁すべき時機となつたのでありませう。」と憎らしく言ひました。これを聞いた私は大いに腹立しくなり、憎らしいことを大に言つて叱つてやりますと、女の方でもこらへられぬやうになり、遂に私の指を引張り寄せて、喰ひつきました。私は大いに仰山らしく歎いて「斯う官位ともに卑しい私が、この上に指を喰ひつかれて見苦しい樣がついた以上は、欲も徳の中へ出て交際することもならぬから、汝が嘗て私の[illegible]位は卑しい[illegible]

○手を折りて云々の歌――補欄參照。
○憂き節を心一つにの歌――補欄參照。
○言ひしろひ――「しろひ」は互にすること、故に互に言ひ爭ふこと。
○誠には變る云々――眞實のところ二人が離縁せようとは思はなかつた。

以て駄目となつた。どうして人並に立身出世が出來ようか、それはとても叶はぬことだ。もう世から遁れて出家でもすべき身の上となつたやうだ。」などとおどしてやりました。さて「それでは今日こそお互に離縁すべきことになりました。」と言ひながら、喰ひつかれた指をまげてそこを出ました。

補 ○および（指）――ただ指といふことで、小指といふ意でない。源注餘滴に「契云、和名鈔、指和名由比、俗云於與比、儀禮云、季指和名古於與比、小指、第五指也、これ指をすべておよびといへり。今考るに土佐日記に「けふいくかはつかみそかとかぞふればおよびもそこなはれぬべし。」これもただゆびなり。およびとあるを小指のこととせるは誤り也。」と見ゆ。

評 左馬頭の女をおどした所は少し殘酷なやり方とも見られるが、女が左馬頭の指に喰ひついたとは、少し滑稽な趣がある。紫式部はこんなことで、平凡に落ちやうとするのを避けて、文にあやをなしたものである。

手を折りてあひ見し事を數ふればこれ一つやは君が憂きふし
憂きふしを心一つに數へ來て此やきみが手を別るべき折
など言ひしろひ侍りしかど、誠には變るべき事とも思ひ給へずながら、日頃經るまで消息も遣さず、あくがれ罷りありくに、臨時の祭の調樂に、夜更

○あくがれ――浮かれ立つこと。
○徘徊――往來する意、此處彼處と歩くこと。
○臨時の祭――賀茂臨時の祭で、十一月下の酉の日に行はる。
○調樂――臨時の祭に先だち午の日に宮中で調樂の儀式がある。
○これかれ――誰も彼もの意。
○家路と思はむ云々――どこか我が家と定めて行かうかと思つても、彼女のところより他になかつた。
○内裏邊の旅寢――禁中にての獨寢も面白くない。
○氣色ばめる邊――氣取つた女の邊は、打解けたところがないから遠慮がちで寒いだらう。
○いかが思へると――指に喰いついた女はどうしてゐるだらうかと。樣子も見たかつたから。

けて甚じう霙降る夜、これかれ罷り別るる所にて思ひ回らせば、なほ家路と思はむ方は、また無かりけり。内裏邊の旅寢も荒涼まじかるべく、氣色ばめる邊は、そぞろ寒くやと思ひたまへられしかば、「いかが思へる」と氣色も見がてら、雪を打拂ひつつまかりて、なま人惡く爪喰はるれど、「然りとも今宵、日頃の恨は解けなむ」と思ひ給へしに、火灰かに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大なる籠にうち懸けて、引上ぐべき物の帷子などうち上げて、「今宵ばかりや」と待ちけるさまなり。「さればよ」と心驕りするに、正身はなし。然るべき女房共ばかり留まりて、「親の家に、この夜さりなむ渡りぬる」と答へ侍り。

樂 いよ〳〵その女と別れる際、私は、

手を折りてあひ見し事を數ふればこれ一つやは君が憂きふし

と、一首の歌を詠んで、お前の嫉妬だけはにくらしいが、その他は親切に預つたから、今別れても御身を怨むやうなことは決してせまい。」と言ひましたら、女の方でも感慨に咽び涙を流して、

憂きふしを心一つに數へ來て此やきみが手を別るべき折

○なま人惡く――何だかきまりが惡いが、「なま」とは何だかといふ意。
○爪食はるれど――きまり惡い態度である。恥ぢらふ場合には自然と爪などをかむから斯くいふ。
○火灰かに壁に背け――燈火を小さくして壁際に片寄せて置きたる樣。
○萎えたる衣――着馴れて柔くなつた着物。
○厚肥えたる――綿が澤山入つて厚くなつてゐるもの。
○大なる籠――火をさかんに起して、その上に籠を置き着物を温めるのである。
○引上ぐべき物の帷子云々――「帷子」は几帳の布帛をいふ。人の入り易きやうに引きあげて置くべき几帳の帷子などは引上げて人の來るを待つてゐること。
○今宵ばかりや――今夜こそ男が來るだらうと。

と返歌を詠み、互に語り合ひましたが、そのときは眞實に彼女と緣を切らうとは思はず。その後暫くは手紙もやらず、其處此處と心も浮き立つて歩きまわりました。恰度賀茂臨時祭の調樂の日となり、私も朝廷にまゐりましたが、夜も更けてから霙の强く降る中を、何れの人も皆宮中から退出しました。さて自分は今夜何處に行つて休まうかと、行くべき家路を考へ回らすと、どうしても彼の指を喰つた女の所へ行くより外に道はありません。内裏で獨寢するのは旅寢のやうに無趣味なものだし、氣取つた女の所は遠慮してゐなければならず、そんな所は今晩の如きは寒くて堪らぬだらうと思はれましたから「彼の指を喰つた女はどうしてゐるだらう。」と、彼女のその後の樣子も見がてら、降る雪を拂ひながら行くことにしました。いよ〳〵行くとなると何だかきまりが惡く、恥づかしいことでありましたが、「それでも、今晩こそ日頃の恨も解けて、仲直りが出來るものだ。」と思ひながら、急いで彼女の家に行きました。さて家の中に行つて見ると、燈火を小さく點して壁側に引き寄せてあり、着馴れて柔かになつた綿の厚い着物が、大きな籠の中に火鉢を入れ、その上に被せて温めてあります。又几帳の帷子もひき上げて何時でもそのあたためてある綿の着物を着て、几帳の中にすぐ入つて眠られるやうに準備がしてあるのです。成程今晩こそ私が來るものと女が待つてゐた樣子であります。そこで「成程私を待つてゐたなあ」と大得意になつてゐると、肝煎の本人たる女が居ないのです。ただ相當品のある女房共が留守をしてゐるので、彼女達に本人の女は一體どうしたのだと尋ねさすと、「今晩は親御の家に御出かけになりました。」と答へました。

○されば よ――なるほど自分の思つてゐた通りに。
○心驕り――自慢する。得意になる。
○正身――本人、主人公、ここでは指か喰つた女。
○夜さり――原義は夜になるといふ意だが、ここでは早に夜といふこと。
○渡りぬる――行きました。

補　○手を折りて逢ひ見し云々の歌――お前と相逢ひ始めてからの事を、指を折つて數へてくると、常に我が爲めに世話をしてくれたことばかりであるが、ただ嫉妬の一點だけは困つたことである。「折り」と「ふし」とは緣語である。○憂き節を心一つに數へ來て云々の歌――「郎君の浮氣をなさる心配な點だけを、今日まで一つ二つと數へながらも、何時かは直ることもあらうと、耐へ忍んで來ましたが、遂に今は郎君と別れねばならぬ時となりました。○調樂――朝廷にて雅樂を奏する以前に調習するをいふ。江家次第の石清水臨時祭の條に「前三十日調樂、先日試樂云々、上古調樂於桂芳坊行之。」と見ゆ。○火仄かに壁に背け――白氏文集の「耿々殘燈背壁影」の句によつたもの。○引上ぐべき物の帷子――これは几帳に掛ける布帛をいつてゐる。几帳とは又、木丁とも書く。室內に立てて隔てをなす具、貴婦人の坐側には常に立てたものである。几帳とは几に帳があるから斯く名づけたものといふ。高さによつて三尺の几帳とか四尺の几帳の區別がある。四尺の几帳には帷子は五幅を綴ぢ合せ、三尺の几帳には四幅を綴ぢ合せて帷子となす。普通は三尺の几帳を用ひるけれども、廂の間とか母屋等に簾のつらに立てるときは四尺の几帳を用ひる。その製、下に土居とて四角なる臺があり、柱を二本立て、その上に横手をつけ、これに帷子を結び垂れるのである。帷子の表は普通は朽木形であるが、[illegible]物のきら〳〵しきを用ひることもある。裏と紐とは平絹で、紐の縫ひ樣は壁代の如く、[illegible]畫く。

評　深更調樂の歸りに、霧にさん〳〵と降られ困り果てたとき、仲違ひとなつた女のことを追想し、その家を音づれるとは人情の機微を穿つたものである。このところに出てゐる二首の歌を見ても、紫式部は和歌については左程すぐれた技倆を持つてゐたとは思はれない。極く平淡な歌を作る女であつたらしい。

○艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いとひたやごもりに情無かりしかば、あへなき心地して、「さがなく許なかりしも、我れを疎みねと思ふ方の心やありけむ」と、然しも見給へざりし事なれど、心疚しきままに思ひ侍りしに、着るべき物、常よりも心留めたる色合し、さまいとあらまほしくて、流石に我が見捨ててむ後をさへなむ、思ひ遣り後見たりし。然りとも、絶えて思ひ放つやうはあらじと思ひ給へて、とかく言ひ侍りしを、背きもせず、尋ね惑はさむとも隱れ忍びず。赫かしからず答へつつ、「唯ありし心ながらは、えなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむあひ見るべき」など言ひしを、「然りとも思ひ離れじ」と、思ひたまへしかば、暫し懲さむの心にて、「然か改めむともいはず、いたく綱引きて見せし間に、いといたく思ひ歎きて、はかなくなり侍りにしかば、戯れにくくなむ覺

○艶なる歌――情味に富んだ歌。
○氣色ばめる消息――消息は音信とか手紙の意。氣の利いた音づれ。
○ひたやごもり――ひたすら引籠つてゐること。
○あへなき心地――張り合ひの無い氣持。
○さがなく――よくない意地惡く。
○我れを疎みねと――我れは女自身で、女が男に愛想が盡して下さいといふ態度でゐたのは、他に男でもあつて、それと添ひたしとの心であるかしらと疑はれた。
○然しも見給へざりし事――そのやうな女の態度とは思れなかつたが。
○心疚しき――心の惱ましきないふ。